女子文壇 定期増刊

菊花月



明治三十九年十一月十五日發行（毎月一回一日）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

第二巻 第十五號

秋の山



鏑木清方筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

第二回新學期開始

●會員大募集　目下入會の最も好機也

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で優に全期を終る事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上揭の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

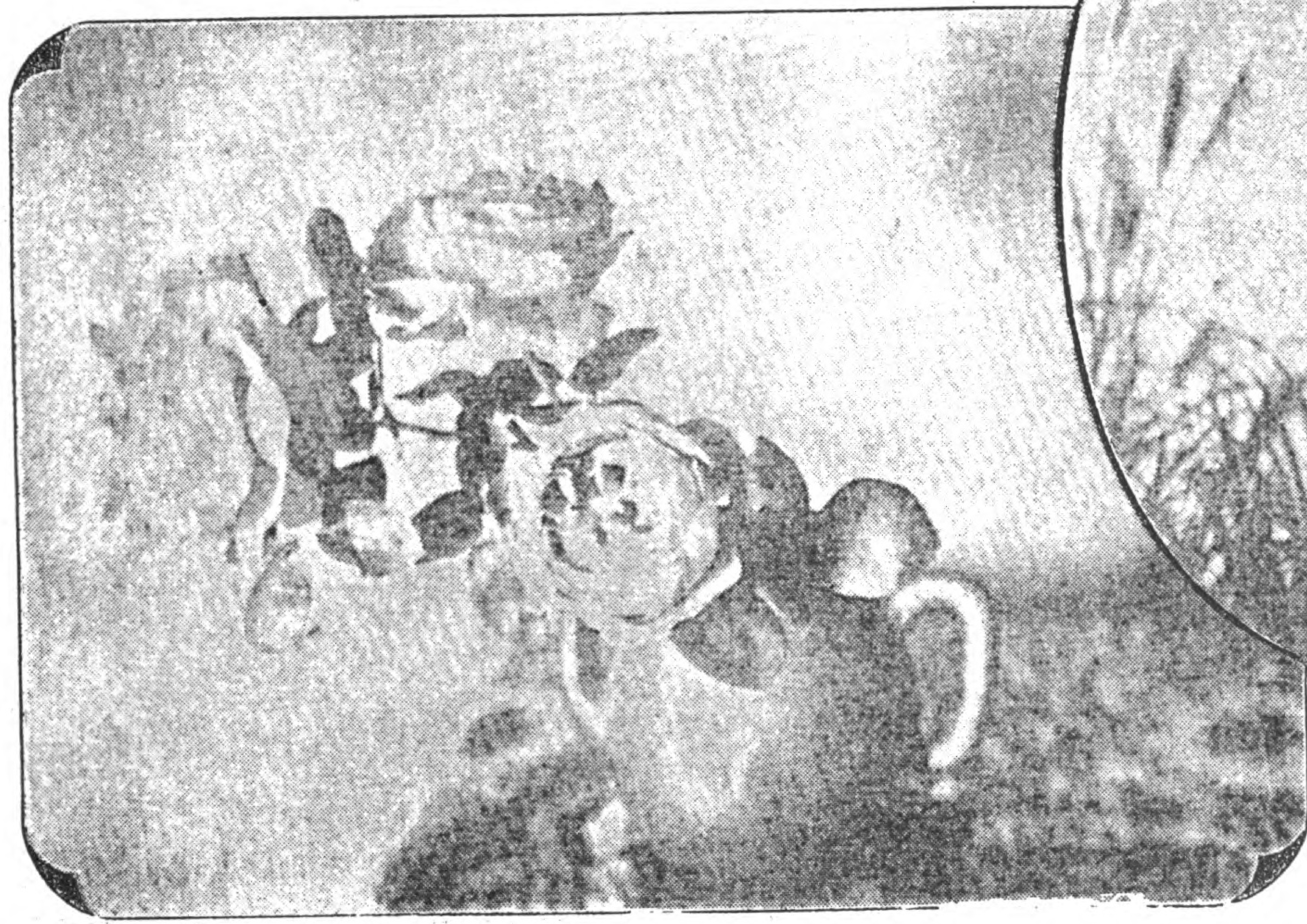
▲規則書▼

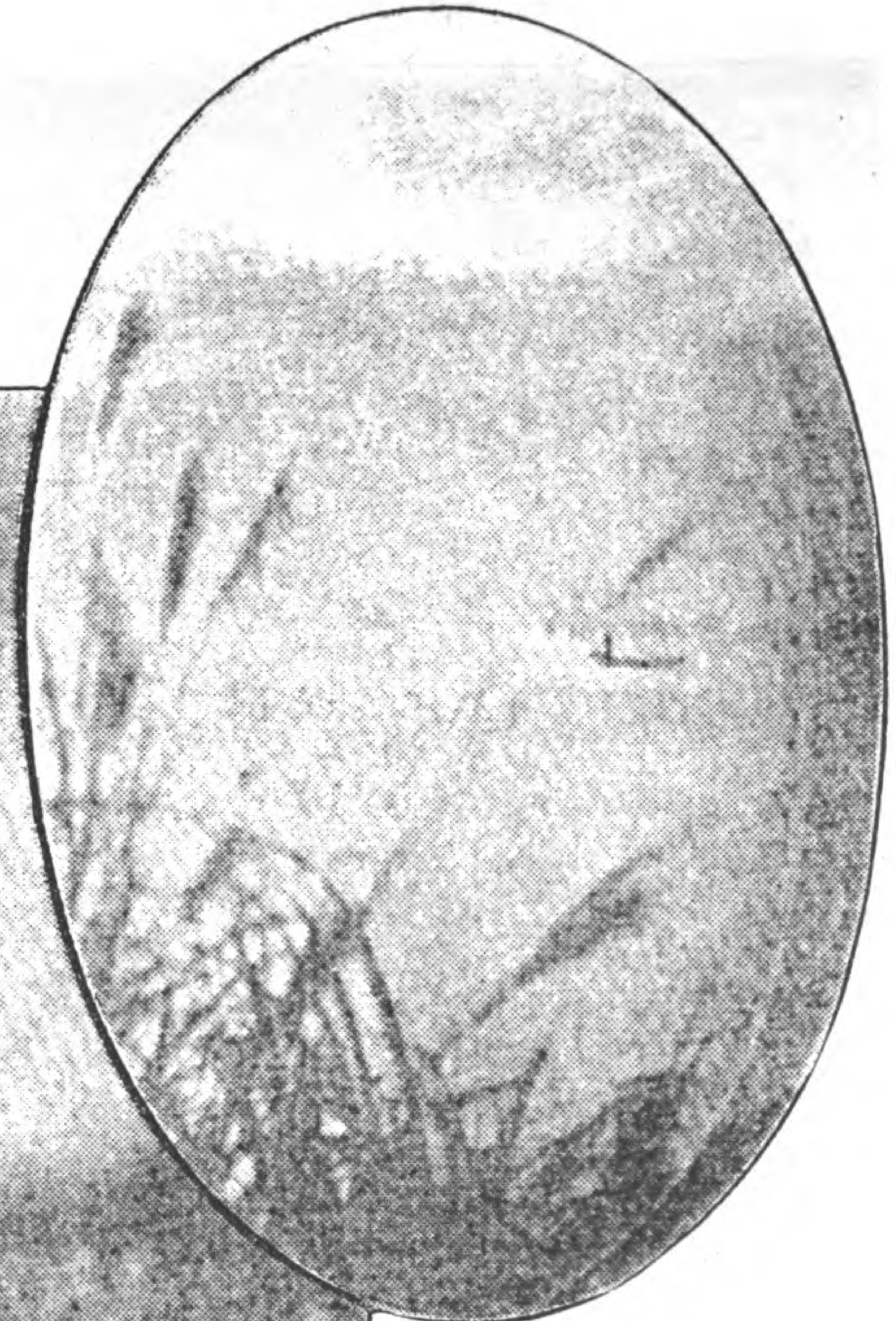
端書にて申込あれば直に郵送す可し

東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）大日本淑女學會

（甲の四）

寒薔薇





枯尾花



清國の貴婦人

（秀翠女史寄贈）



韓國の花婿花嫁

（奥田惠以子寄贈）

花と少女

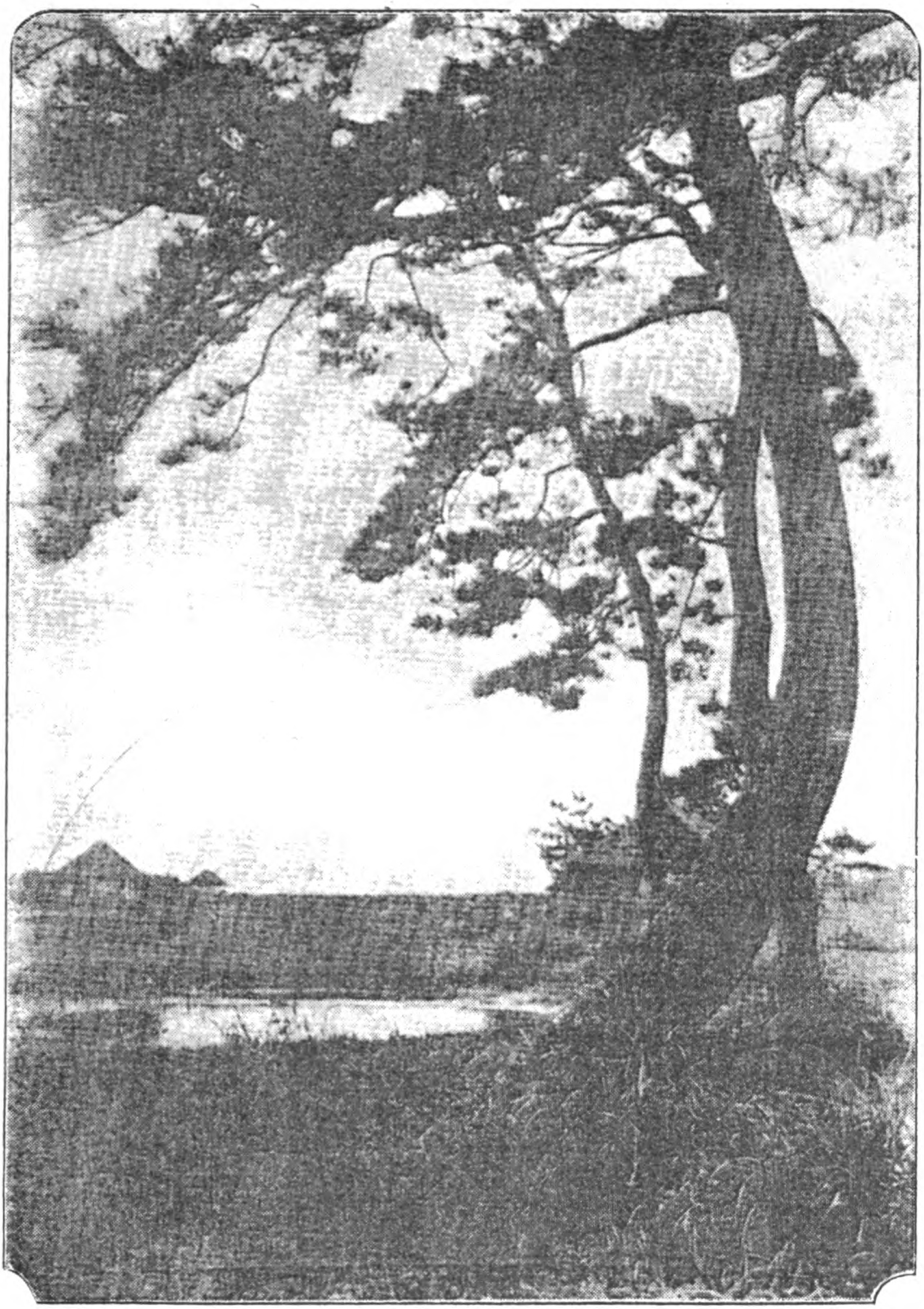








晩秋



（上總一ノ宮海岸）

新年以後の女子文壇豫告

全國大小の都會は申すに及ばず、如何なる山間僻地と雖も、本社發行の『女子文壇』愛讀者のある事は、本誌の發行高が最も多く、從つて各地方に能く廣まつて居る證據です。之れ本社の光榮として愛讀諸孃に誠意の感謝を表する所以てありますが、聊か其愛顧に酬ゆる爲に、新年以後の『女子文壇』に新計畫を立てました、則ち懸賞の方法です、雜誌が多く出れば出るだけ内容を善くし體裁を美くしたいのは、本社年來の主義てすから、何時の號にても全力を盡くして善美にしたいと存じて居りますが、新年と云ひ、本社創業第三年と云ひ、旁々一月一日發行の雜誌からは、先づ懸賞法を左の通り改正します

大懸賞品

甲種

第一等 新形婦人持銀側懷中時計……（價格金拾圓 天賞堂眺）
第二等 新柄反物……（價格金參圓 三越呉服店）
第三等 縮緬半襟……（價格金壹圓 ゑり治商店）
第四等 本社出版圖書切符……金七拾錢
第五等 同……金五拾錢

乙種

第一等 流行絹張洋傘……（價格金五圓 仙女香眺）
第二等 流行帶止……（價格金壹圓 大西白牡丹）
第三等 化粧品……（價格金五拾錢 佐々木商店）
第四等 本社出版圖書切符……金參拾錢
第五等 同……金拾錢

（甲種とは）短篇小説 叙事文 抒情文 書簡文 評論文 新體詩

（乙種とは）和歌 俳句 短文 新歌謠 新笑話 圖畫

（課題及び各種の字詰行數は從前の通りてす）

右に依りて讀者は更に新鋭の氣を鼓舞して詩歌文章の投書を願ひたい、即ち十一月二十日締切の原稿から新年に出るわけてす

新年以後の女子文壇豫告

●新年大附錄と記事

懸賞方法の改正、文藝遊戲の新設、其外新年の本誌は創業三年の祝意を表する爲め、特別大附錄として當代第一流の洋畫家に托し、艶麗鮮美なる石版極彩色の附錄を添へます、外に口繪の選擇、名家の記事等種々既に着手中てありますが、詳細の豫告は十二月の紙上に於てする事とし、今暫く讀者の想像にお任せいたします

文藝遊戲 姉妹合せ

〔興味ある新案＝別種の懸賞文〕

他に類の無い一種の面白き方法を以て讀者の文才を試み合せて興味を惹く爲に新年から「文藝遊戲」の一欄を增設します、左の說明を詳しく御覧下さい

○問ひ。假に斯う云ふ事があるとします、或る母君が二人の娘に向ひ「今年からお前達に學校へ遣る外に、何か一藝を敎へてあげやうと思ふが、好みを言つて御覧なさい」と問ひました、兩個の姉妹は何と答へるでせう。と云ふやうな時に諸孃の答へは何うでせうか、假に其答を作つて頂きたいのです。

▲答は右の問に相應するやう成る可く談話體に面白く作つて頂きたい、つまり御自ヶの習ひたいと思ふ一藝（單に遊戲に止まらず、實用的の技藝でもよろし）譬へば生花音樂裁縫其他細かに言へば澤山ある諸藝の內で學校ばかしでなく專門的に深く習ひたい一藝を指すのです▲我儘でも何でもかまひません思ふ通りに習ひたい理由や注文や場所やさま〲に作つて下さい▲文章は餘り長いのは困ります十行內外を限りとします▲選者は其中から最も似合うた二人を姉妹として最も優れた二人を一等にするのです▲一人で姉妹になる事は出來ません又姉とか妹とかは選者の方で定めるので作者は只答さへ出して下されば宜しい▲賞品は甲種乙種以外の別種のものとして扱ひます、其方法は答に因んで例へば琴なら琴曲指南の書物とか繪畫なら繪の具と云ふ類です賞品も文章と共に發表し發表二ヶ月の後に贈呈します▲原稿には「姉妹合せ」と題を書き半紙に限ります▲都合にて紙上へは匿名でも原稿には住所姓名を明記して下さい▲實際世間の同胞と云ふ者は心の合ふのもあり合はぬのもありますが是は誌上で理想の姉妹を作るので、知らぬ方どうしが姉となり妹となる處に面白みがあるのです、何卒澤山に投書して下さい

▲投書締切、第一回は十一月二十日

毎號　皇太子妃殿下賜上覧

女子文壇

定期増刊　菊花月　二巻第拾五號

本號　石版極彩色口繪＝秋の山（鏑木清方君筆）表紙（山中古洞君筆）

（乙の四）

女子文壇　定期増刊

菊花月

第二卷第十五號

龍田姫

河井醉茗

「千山痩せて涸るゝ水　木の根巖角這ひ纒ふ　蔦も力やゆるむらむ　秋の木の葉に草の葉に　もみづる料の紅を　織るに忙しき龍田姫　天の羽袖をふりかへし　たゆたに歌ふ梭歌の　銀河の水に響くらむ

「海上遠く燃え盛る　火山の光、空に映え　射返す如き緋の色も　日の出現にさきだちて　曉の童子がふりかざす　金縄まばゆき黄の色も　姫が工は思ふまゝ　深林ふるく棲む鳥も　双翼染まる輝きに　雲やかゝると驚いて　虚空高きに舞ひ出でむ

「一の梭取るくれは姫　二の梭投ぐるあやは姫　光みちたる織殿を　こぼる櫻　銀杏の葉　曉は不思議に透かし見て　秋さり衣かき合はし　山の霧笛吹き上げむ

秋より冬

▲暦の表には何月から秋、何月から冬と云ふ事が、明かに書されてあるけれど、是は人間が假に作つた日記てあつて、大自然の移り變りには何月幾日から秋になり、何月幾日から冬になると判然たる區別はない。「秋立つと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」と云ふたのは誠に歌人の眞に感ずる處で、秋の季冬の季と季別をして、自然を歌うとするのは未だ〳〵幼稚であると云はねばならぬ▲俳句には季にあるとかないとか云ふ事を殿重に調べるが、自然と云ふものは然う判然と區別し得られるものでない。只詩人の眼に映る花の形、空の色、雲の姿、木の葉の落る、水の流れる、自然は名の如く自然に歌ひさへすれば可い、机の上や、書物の中から引張り出す自然では何うしても生氣が無い、書物は辭の參考に見るまで、觀察は實地に越した事はない▲以上の意味に於て行く春と、行く秋とは姿致が多い春の事は暫く措いて、秋の暮から冬の初、乃ち秋のやうな日もあつたり冬のやうな日もあつたりする頃は季の上では秋とか冬とか極つてあつても、實際は何方つかずの凛然たる氣候である▲秋から冬に變る頃の山の色を見よ、玲瓏たる空氣に透いて地平線上に波状の輪廓を畫する遠山の形、色、紫、紺青、藍、瑠璃、碧の濃かさ、此頃でなければ見る事は出來ない、富士川の鐵橋から見る富士にせよ、武藏野から見る筑波にせよ湖上から見る比叡にせよ、山の色の澄み切つて美しいのは此頃である、自然に渇仰する者は此頃の山色に多大の崇敬を拂はねばならぬ▲秋から冬に變る頃の雜木林に來れ、色づく葉あり、落る葉あり、地に積る葉あり、空に舞ふ葉あり、草の莖は折れ蔓は弱り、紅の實、黄の實、珠を綴りて、聲鋭くなつた小禽は、梢高く晴れた日を讃美して居る。雜木林は殊に武藏野の名物で、東京近郊に限るやうである、試みに半日逍遙すれば、敍事文の材料も、短文の捉えどころも、水彩畫の畫題も、詩歌の趣考も無盡藏に得られる、田舍道を單調だと云ふのは未だ雜木林に入らないからである▲秋から冬に變る頃の多趣多樣さよ、黄は紅となり、綠は黄となり、水は白くなり、村雨は時雨となり、露は霜となり、袷は綿入となり、南天は實となり、密柑は甘くなり、林檎は北海より運ばれ、魚の肉は肥え、大根は太くなり、燈火は親くなり、人の面は白くなり、少女の夢は暖かくなる。



投書小說

廣津柳浪先生選

天

○さち子

京都田中村字關田　宮島なみ子

閉て切つた障子には、父娘のかげが大く寫つて居る、「さち、お前内に歸つて少し手助けを仕たらどうだね？」「はあ、」俯いて居た頭を上げて、丈夫ながらも老いたる父の顏を辛らさうに見たが「けども、お父樣、」一寸口を切つて、「皆樣の御辛勞は、よく知てゐます、少してもお爲めになるやうにとはおもつて居ますけども……」

父は口を挾んだ。

「けども何だね……耳が不自由だからと云ふのだらうね、遠慮仕ないでいつて御覽」

「はい、あの私不意に耳が遠くなつた計りで高等師範も、一月やそこらで退いて仕舞つたのですもの」そう云ふ内にも、口惜しげに涙ぐんだ「それに、大學病院でも見込がないつてゞすもの私……」とまでは云つたがひどく神經を刺激されたのか、悲しさ、口惜しさが込み上ぐるさまで、暫くはすゝり泣きに言葉も途絕えた。

「うむ、お前の無念はよく知つてゐるよ、泣かなくてもいゝ、何も運命だとあきらめるが宜いよ、ね、決してお父樣は、無理なことは、云はない積りだ……それで」と父は先を促した。

情ある父の言葉に、また云ひ知らぬ涙を催したが、「恐れ入ります、もう泣いたりなぞ仕ませんから……」

最早泣いたとて悶えたとて以前のやうに、快活に、無邪氣に、順風に帆を揚げて樂しく浮世を渡ることは思ひも寄らない。これから煩い困難な交際なども、さほど必要のない文士……志す方向は人々に依りて違ふだらうが兎に角筆を取つて生活の道も得やう、また失意の身を慰めるよすがにもと、考へて居るのである、さち子は言葉をついだ「ですから實に濟みませんけども、暫くの間私の自由にさして下さいまし！ねお父

樣お願ですから！」

僅か三年の女學校生活に斯うも大人らしいことを云ふやうになつたのかと思ひながら父は首を傾げて「それも然うだね、お前の氣性では、この儘朽ち果てるのは殘念だらうから………」といつたが向きを變へて、「だがね何時まで獨りで居るのでもなからうからもうそんな事は止して、氣樂に家事の實習でも仕たらどうだらう、無理にとは云はないが、……まさか一生獨身で暮すなぞ思つては居ないだらうね。」

如何に悧發とは云へ、未だ數へ年の十八、さち子は流石に顏を赤めて俯いたが、「否えお父樣、その事は初めから五六年は、獨身で居る積りだつたではありませんか、そしてお父樣もお許しなすつたではありませんか……ですから、」持前の冷靜な態度でいつたが、父の答なきを見ると、やがて沈痛な調子で、「ねえ、お父樣、いくら女の務めだと云つて、只譯もなく――いつそ周圍からさせられて――人の妻となつて、子供を生んでそして活動するに一番適當な時を空しく臺所に老い込んで仕舞ふのは、私の眼にはあんまりつまらないのですもの……何も外に活動するばかりが人の務めでもありますまいけれど………そして子供は――子孫は自分の靈を不滅に生くるものだと云ふ人がよくありますけれど、」若い女のしかも父の前でと氣が付いたが、もう追付かない、父の顏を覗きながら「私は何も不滅に生きやうとも思ひませんし……」口を切つて暫く考へて「もしも獨身が寂しいとか、子供が欲しいとか云ふ時がありましたらその時に正當に結婚してもおそくはあるまいとおもひます、たゞあてもなく子供を持つ爲めに何も彼も犧牲にすることは私には出來ません！それに今はもう片輪同樣な身躰ですもの！それよりも：……」

さち子の熱し易き感情は眼にやどれる露にもあらはれて、藝術を以てつとめとする者の――自己の信仰する處のものを一意に務むる者の如何に尊きか？如何に、美しきかを、眞情より說くのである、而して最後に父母の存命中に必ず一かどの成功はして御覽に入れるとまで誓つた、かくて、さち子は寛大な父の許を得たのである。

＊　＊　＊　＊　＊

心なき月日は早くも三年を過ぎた、がまだ／＼前途は遠い！彼女は孜々として文筆を採るにつとめて居る、彼女は幾度か絶望の聲を上げて筆を投げた事もあつた

しかし、彼女はまだ嘗て父に誓つた言葉を悔いないのである、今もなほ都の片ほとりに獨りさびしく藝術の國に志して成功の日を期してゐるのである。

小說の主人公に意志の強い人を書かうとするものも、亦最近の一新潮流て、涙もろい、弱い、感情的の女性許り書いて居た小說界には一寸不思議に感じられるけれど、時代の要求てあるから仕方が無い（選者評）

地

○昔の友

日本橋　小林櫻花

（上）

「オヤ〳〵竹子さん、よくこそ、さあこちらへ……どうも御久しう御座います、御障もなく」と玄關に兩手を突いてゐるのは、芳紀十八九の色白の細面で、すらりと肉附の好い束髪に白いリボンは何處となくよく似合ふ之は岡村郁雄の妻の松子で竹子とは女學校時代の親友てある「私ね一應御伺したかつたのですよけれど色々用事がありましてね、失禮いたしました、ちよいと女と云ふ者は出掛るのが憶劫て」「竹子さん今日は御ゆつくりなさいよねー、旦那樣も御休て朝から御怠屈の樣ですから何か面白いお話でもして上てください」と竹子を茶の間へ案内した。



田舎の夕（選外）　日本橋　松井なみ子

（中）

「アヽよく晴れた、何處へ出掛け樣かな」獨語しながら茶の間の障子を開けたのは松子の夫、岡村郁雄てある、「竹ちやん暫く、矢張神田の方に御住居て……」云ひ乍ら松子の側へ座した「ハイ何て御座います、こちらの方へ移らうと思つて……探す時にはよい所が見當りません者です」「松ちやん、僕ア怠屈て困るがどうかしてくれないか」妻と語り初めた「オホヽ、其樣事仰有ても仕方が御座いません」「さう云はないて、御話てもいたしませうか位は云つてもいゝじやないか」「オホヽヽ、それなればお話まうしませう、昔々龜と兎がありましたとさア」「これは怪しからん、そりやお伽話じやないか、僕ア子供じやないよさう僕をなぶる心算ならこちらにも考がある」「考へとは」「考へとは讀んで字の如し」と煙草の灰を松子の膝へ掛け樣とした「アラ御免なさい、御免なさい、御

免なさいと云ふに」と松子は竹子の側へ逃げ寄つた。

（下）

「お母樣どうも遲くなりました、早く歸らうと思ひましたが色々御話が出て、こんなになりましてすみません」と竹子は母に謝してゐる「大層御ゆつくりでしたね何分そんな事であらうと思つてゐた、案の通りでしたそれ御覧、母の思ふ事は間違ありますまい、ですから昨日も母さんが云ふた通り徳太郎さんと御結婚なさいと云ふに早いとか耻しいとか、さう母を困らせるのじやありませんよ」竹子は疊の上を撫てゝゐる「お母樣私ね今日松子さんの御宅の有樣を見て考へたのです、松子さんは幸福な方です、御むこ樣も立派な御方でそれにやさしくつて松子さんとの中のよい事私は羨しい程で私も徳太郎さんと……」次の語は消えてしまつた其時「郵便」の一聲、つと立ち上り取り行き見れば、「在米國徳太郎」竹子は幾扁となく讀み續けて、莞爾とした。

（中）の松子と郁雄の對話が少しわざとらしい、斯う云ふ風に仲の好い夫婦は乾度圓滿なる家庭をつゞけ得ない、もつと自然に、心から温い情味が通うて居られればならぬ、竹子と松子の對話、及び（下）の一段は好く出來て居る、竹子に心機一轉させる動機は誠に好かつた（選者評）

人

○似た影

東京市日本橋區金吹町五番地松井方　紅女

今しも甲賀町停留場に停つた電車へ、二三の乘客の後から怯々乘つた少女がある。

電車は旋て搖ぎ出した、車掌は切符を切り初めた時、衝と出た少女の少さな手から、白銅一ッを受取りながら、其の可憐らしい姿を凝乎と視つめて、

「どちらへお出ですか」と優しく尋ねた「あの日比谷」伏目になつて幽かに聲は顫えて居た。

電燈の光煌々として照らされた車中の、凡ての視線は少女の面に注がれた。年は十二ばかり色白の下膨で見るから可愛らしい、其の黒目勝の睫毛長き瞼の邊りに、折々漲る露の玉、車中の人の眼は怪訝と好奇とに滿されたのである。

電車は疾風の如く、寂たる夜道を照らしながら、進行しつゝ、幾何かの停留場を過ぎた。

「ちーん」と鈴が一ッ鳴つて停つた、今日比谷に着いたので、車掌に注意されて少女は周章てゝ降りた、で後を

も見ずにスタ〳〵と、幸橋の方へ、橋の袂まで來か、ると、「あらッ靜ちやんじやないの、」「アッ母さん、」母さんと云はれたのは年頃三十二三、無論靜子の實母である、それと見るや、靜子は、ワッとばかり泣き出して犇と縋り付いた、暫時は二人抱き合ふた限り、母親は湧き來る涙を辛じて抑へ。

「靜ちやん奈何してこんな所へ、そうして一人なの、」「……」涙の顔で僅かに首肯いた「まあ何所へ行く心底なの、」「アノもしや久保町の小母さんとこに母さんが在しやるかと思つて、」「まあこの寂しいのに只一人て、」あとは得云はず只潸然と泣くのである。

「母さん妾といッ………一所に家へか………歸つて頂戴な、」「………」言葉はなくて熱い涙は止め處なく漏れるのである、稍暫時泣き沈んでから、「靜ちやん母さんはネ阿父樣のお免しのない中は家へ歸れないのだからネ後世だから靜ちやん一人で歸つて頂戴な、母さんが電車まで送りますから、阿父樣も姥やも屹度待つて居るのよ、ネ、だから少しも早く歸つて阿父樣の御安心なさるやうにネ母さんも、もう直に歸れるやうになりますから其時までは屹度柔和しくして待てゝ頂戴よ」靜子は只啜り上げては泣いて居る。

「靜ちやん、」と吐く息苦しげに、眼には熱涙が溢れて居る、不幸なる彼女は、夫の春山茂が此の春新年會の其時に、不圖新橋あたりの魔性の者に迷ひ込み、それからと云ふものは、夜を晝と遊興三昧に暮らして、たまたま家へ歸れば、人でも變つたかのやうな無情ない振舞に、敢て一度だに不滿の色は見せないのであつたが、つひ十日程前、それとなしに夫の機嫌の好い折を見て、諫めたのが却つて夫の不興の基となり、今は久保町の伯母の家に身を寄せる事の止むなくされたのである。

「あゝ……、」と思はず太い溜息。

己が身の苦痛は更に〳〵厭はねども、唯憐れは靜子の身の上、此まゝ一人で歸したなら、さぞや無情母と恨むであらうと思へば思ふ程堪へられぬ程に悲しく、未練の涙は胸にせき來るので。

まだ宵ながら、寂れて此處は夜闌のやう、夜風は身に泌み渡つた。

不圖我に返つたかのやう、首垂れた頭を上げて四邊を眗した時、彼方胃腸病院の横手に添ふて動き行く二個の影、一は仇ッぽい島田を半ショールに埋めて、一は中折帽にインバチス、而も何所やらに見覺えある後姿

の早くも闇に消えて了つた。

靜子のあはれな樣子が、電車の乘合ならぬ人にも能く分る、此小說は靜子だけを能く讀めばいゝ、其れから今一つ、此作を實際らしく感ぜしめるのは、地を能くあらはした事で、電車停留場と云ひ、日比谷と云ひ、地をはつきりと出す事は、讀者の實感を喚起せしむる功が多い(選者評)

秀逸

○傳道師

丹波靜子

「其次が神の豫言、即ち世界滅亡の時は何時であるか或は何時何處でどの國とどの國とが戰爭を開くかと言ふ樣な、此から後に起る事を神樣は今から知つて居られて、我々につげ玉ふ事を言ふのだ……」

此處野間村の中程の處にある寂しい御堂、其の椽に腰かけた四十格行の長い顎ひげのある男、色あせた茶色の服を着て、村の若い衆風の者十數名に圍まれてかく話して居る、其男は何か新聞樣の物を出して前に擴げまた言葉をついて語り始めた。

椽の向側に釣りランプを手にして提灯を差し出す樣にしてる人と、其横に座つて居る溫和し氣な年增とは、分らない樣な顏して居ながらも一心に耳を傾けて居る一方の隅では、尺八を口に當てゝスーと息て節を取つて居る者、またこちらでは「ちつともわからない」とつぶやいて居る者等、彼はまた語り始めた「なあ一ケ年分僅か卅錢じやないか、一ケ月分が唯の二錢、どうだね、此村の青年會で取つたら？誰か此青年會の爲に寄附する者はないのかね」と言つたが皆唯顏を見合す許りなので、彼もあくびしながら「此村には宿屋はないのか」と問ふた、すると一人が無いと答へた、其時「一寸御免下さい」と優しい聲がして進み出た一婦人、年は廿四五、容姿と言ひ身振と言ひ一見村には珍らしい淑女である、彼女は椽に手をついて「一寸新聞をどうか」と受取つて見ながら「一度キリストの說教を聞き度いものと思ふて居ましたが、此村にも來られませんので、不便を感じて居ましたが今夜來られたと聞きまして、御話承はらうと思ひまして」と語ると彼は「あそうですか私は神戶キリスト敎會の社員でありまして、年に一度は此地方にも巡廻する事になつて居るので……では御宅へ上りまして御話させて貰ひませうか」

「いゝえ其には及びません、此處に皆さんも居られますから一所に」若い衆等はそろ〳〵歸り出した。

傳道師「いや此處の方々には最早說教致しましたてすから」「さうて御座いますかてはどうか」と婦人は傳道師をともなつて家に歸つた。

聞けば此婦人は、此の村一の富者の內儀て、村中の女子は皆手本ともあがめて居る程な淑女だとの事。

＊　＊　＊　＊

「……母が少し難かしい質て御座いまして……はい本の母は主人のまだ幼い時死なられまして……てどうも主人と氣が合ひませんので……一所に並んて御飯食べて居るのさへ……」

白壁の藏の二棟も建つた立派な家の奧座敷、此即ち例の婦人の家てある、床の側に座つたのが傳道師、其前は主と其妻君なる例の婦人てある。「私は酒をやりますので……て一度一月程禁酒致して見ましたけれど、村の者が色々の事を言ひ出しましてな、また家內の者も色々と言ひますので」主人なる人も悲みをおびてかく言つた、傳道師は一語一言を聞く毎に「あそうてすか」と深き感に堪えぬ樣てあつたが、やがてツッと淚を拂つて、深く同情を込めて或は慰め或はさとし、聖書の講義をなして遂に夜十二時頃迄熱心に話した、主人と婦人は此に始めて神を悟り始めて心に平和を來し、嬉し淚にくれたのてある。

翌朝彼の傳道師は一冊の書を與へて辭し去つた、彼等夫妻は其後を見送りつゝないて神に感謝した。

然るに近所……否此村にては彼の傳道師の惡口……かの家を出る時高い書をおし賣つて出た……等のうわさが擴つた。

他の小說とは大いに筋が變つてある、或は讀んて面白く感じないかも知れぬ、寧ろ淋しい氣づかひ、けれども田舍廻り傳道師が遭遇しさうな出來事て、餘り正直に書いてあるから面白く感じないてあらう、味いの深い作（選者評）

挿畫　（選外）

宇都宮　小森谷あき子



○夏菊

靜岡　松永ゆき子

「うむ分つた、泣くな、最う泣くな、俺もな、兼ねて他から聞いて居た、あんな家へお前をやつて置いては俺も心配てならないから、近い內連れに行くつもりて居た」と赤い顏をした兄の久滿一は、今しも夕餐の膳に向つて、盃を手にしながら言つた、油煙て煤けた行燈の、薄い光線が、久滿一の横顏を掠

めて、一層赤く、きらりと凄い瞳で、上り框に、腰かけて、泣伏して居る、妹のお照を一瞥したが、面には少なからぬ怒氣が含まれて居た。お照は二十の上を、一つか二つ越した、細面で、額のあたりの肉寒げだが口元のあたり、兄によく似て、眉の間せまつて、何んとなく淋しい樣な顔付、結立の丸髷も雨にぬれて崩れ只涙に溺ぶのである。

外には、五月雨の廂を打つ音陰氣に、夜風に軒の梧桐が、ゆらぐ外靜かである、久滿一は猶、言葉を續けて「お照ッ俺はな、お前の身を些つとも、忘れた日は無い、今頃は何して居るか、此頃は時候が惡いに病氣にても掛りやしないかと、俺の身になつて見ると、只お前の事が案じられる許りだ、どうせこんな事に成るだらうとは、俺も前から、思つて居た、さぞ苦勞したらう、是れも皆んな浮世だ、世が世てありやあ、俺だつても、山なぞに居なくともいゝ、こんなに零落しても青春の血汐は、枯れないぞ、屹度、我が家を再興して見る、屹度……」一語尾は、極めて力のある、聲だ、お照は自愛籠れる兄の言に、面を擡げて、兄の顏を仰ぎ見た「私しは最う他へ行くのは、厭ですから、此の山に兄さんと、いつしよに居たいのです、ね兄さん置いて下さいな」「無論置くさ、誰が何んと云つても、俺が他へはやられない」と撫然としたが、眉をひそめて「見りやあ着物も大分濡れて、居る樣だな、此の雨の降るのに、女只一人で歸してよこすたあ、餘り向ふも薄情過ぎる、早く裏で足を洗つて休め、夜も更けた樣だ」お照は、無言て、上り框を放れた、久滿一は其後姿を見送つて、何んとなく、淋しい妹の影に、ハラハラと、熱い涙を流した、油の盡きたる行燈の光りは、細くなつた。

＊　＊　＊　＊　＊

お照は裏戸を開けると、蕭々たる雨は晴れて、草木の葉末に、露を置いて、山風が杉木立を戰がし、鎌形の雨後の月が、薄い光りを放つて、谷間の溪流は咽ぶ樣に流れて、此の山里の靜けさを、增すのみである、お照は思はしげに月を仰いて、つぶやいた「私しは明日から、此の山に暮らすのだ、昨日は榮華に誇つて、明日に鎌鍬取つて暮らす此の身は、變れば變る者だ、父だに、母だに、ましまさば、私だつてもこんな境遇に成る事はない、兄さんだつても淋しい山に、居る事はない、嗚呼私は瘦た、何故こんなに瘦たのでしやう矢張苦勞した爲だ、それに付けても先刻の兄さんの、言

が嬉しい、たのもしい、自分が小さい時から、今の身の上まで、くらべると悲しさが一時に湧いて涙が止めなく出る、朽ち果てた間垣に、一本の夏菊が昨日迄は、美しく咲いて居たが、今日の雨で崩れてしまつて憐を止めて居る、お照は何んと思つたか、さめ〴〵と泣くのである。

襟元吹く風に、心付いて、我家に入れば、兄は何時の間にか、眠つて了つて、只いびきの聲高く、外には遠く河鹿が泣いて居る、嗚呼、お照の心は。

兄妹の話が何うかするど文字になるなど、未だ熱練は缺いてゐるものゝ、警句もあり、情味もあり、一讀多少人を動かすに足る、兄の言葉に『未だ靑春の血汐は枯れないぞ』は大當り（選者評）

○水車

越中　北本歐子

水車小屋といふは僅か一坪餘りの土地に木と竹と土もて作られた極々粗惡な新築である、この水車小屋の裏へ廻ると、この水車を絶えず運轉して淸らかな水を虚み出して居る一つの森が目の前に顯はれて來る、この森は氏神の森の方に連接つて居て、この界隈で二となき絶景である。

「信さん、あなた兄さんは有るの……？」

櫻、椿、枇杷など茂りあふてその隙間を孟宗と藤葛とが綴つて、その中を押のける樣に流れる水の邊、大きな象の蹲つて水を飮むが如く見らるゝ石が轉げて居る上に、信夫は腰を掛けて、富子は其石に靠れながら信夫の顏を見上た。

「否」

「姉さんは、」熱心に問ふた。

「姉さんも何もなくつてよ、僕一人、」

「では信さん、あなた兄さんか姉さんか欲しかないの」

此の言葉を聞いて流石本年十二になる信夫も、父の存命の時には町で遊んだ友達は、みんな兄弟があつたが僕ばかりはさびしく一人で遊んだ事を、そゞろ小さき胸に浮んだ、まして十日許り前に母と二人寂しき此の村に移つてからは、尚一層淋しいやら悲しいやらで、只富子と遊ぶのを此上もない樂しみとして居た、今富子の言葉を聞いて、彼はいかに悲しかつたであらうか。

「僕欲しくつて〳〵ならないわ」心の底から出た言葉。

「然う、妾ね信さんの樣な弟が欲しいのよ」

「僕も眞個にね、富さんの樣な姉さんが欲しいのよ、」

「眞個、それでは妾はあなたの姉さん、あゝ嬉しい今日から仲よくしましようね」

富子は滿面に笑みを含みながら信夫の手を何迄もはなさじと握つた。

「アお母さんが、それ來なさつた樣だ、一寸行つて來ますよ、富さん、」信夫は許しを乞ふ如くに先づ富子の顔を瞻めて石をば離れやうとした。

「富さんてはないよ、姉さんてお謂な」

「言ひ難いもの、では姉さん、」思ひ切つたらしく、信夫は言ひ捨て母の方へと駈け出した。

「眞個ですよ信夫、いゝかね、忘れては否ませんよ」

信夫はうなづいたらしく母の方へ行つた。

此時信夫の母は筧の水を落さんと、水車小屋の裏手に來て、

「誰だね、今お前を信夫つて呼んだのは」母は我子を見詰めた。

「僕のお連れ」

「お前のお連れ、お連れが何故、お前を呼び流しにするの、何處の子だね、」母は依達々々して居る信夫の顔を瞻めて、森の方へ視線を轉じたが、はや信夫の目にさへも、富子の影は映えなかつた。

* * * * *

浪華女學院へ入學するとて、義姉としての田山富子と悲しき袂を拂つてより、いかに森の裡を徘徊ても、富子の聲の聞ゆべくもあらず、日は落ち月は登るとも、彼女の姿の夢ならでは目にも映らず、たゞ水車の廻かるゝのみ、あゝこの水この水車、抑も誰が爲めに何日迄かくは流れかくは廻るぞ、あゝ聞かせたきはこの水の音。

不自然と言はゞ言ふべく、自然と解釋させるには今少し何ものかを捉えて來ねばならぬ、併し是は何處までも純潔な姉弟の緣をして、戀愛などの分子の加はらないものとせねばならぬ、戀愛の分子を加へやうとする積りならば、全然、頭から書き直す必要がある、敍景は上手(選者評)

○あらぬ戀

京都 濱部郭公

「僕は何故、彼女の事を恁麼に想ふので有ろうか不思議てならん……彼女は美麗な女である賢い女で有る同情深い而して優しい女である、又僕を助けて勵まして呉れる」今しも清次は机に向つて英文典を繙いて居つたが、清次の眼は自然と前栽の方に傾き、右手に持つて居つた鉛筆は機械的に空中に動いて居る、彼は暫し茫然として居つたが今度は机の上に肱をつき、

「彼女は無論僕より年長だ、僕は例も姉樣と呼んでる姉さんも僕を信實の弟の樣に思つて可愛がつて呉れ

るが僕は姉樣に遇ふと例も妙に何だか胸がドギマギして、嬉しい樣な極りの惡い樣な氣持がする……が僕は今迄女に逢つても恁麼事は無かつたがナ、近頃は什麼なつたのか知ら」清次は猶も考へ續けた。

「僕の死んだ兄樣がよく友達に戀だのと話して居つたが若や僕は其の……戀ては無か知ら、いつかの新聞に同情の進化は戀と成るとか書いて有つたが……姉樣は信實に薄倖な人だ氣の毒な境遇の人だ、又僕も幼少い時から恁して繼母に懸つて隨分人の知らない苦勞もした、だから姉樣は自分に比べて例も僕に同情を寄せて下さる、然ると新聞に書いて有つた樣に同情が進化したのでは有るまいか、だけど僕にや是が戀で有るか不解らん」清次は這麼事を獨で考へて居つたが折しも蝶が窓近く飛んで來て直ぐ又他へ逃げてしまつた、清次は見るとはなしに蝶の行衛を見て居つたが其時廊下の方で荒荒しい足音が聞えて間も無く腹違の九ツに成る弟が「兄樣是が來たよ」と一通の手紙を投げて直ぐ出て行つた清次は先づ名前を觀て「ヤー姉さんからだよ何を書いてよこしたのだらう」凝乎と手紙を瞶めて居つたが手の先が微かに慄えてをる、清次は懸て封を切つて讀み始めた。

孝行（選外）　佐賀　樋口龍子



「近頃は些つとも顔をお見せなさら無いのね若しや病氣ぢや無いかと妾は心配して居ますよ」「左樣だ僕は久濶行かなつたなア」「試驗も追々と近づいて來てね怠けちやいけなくつてよ」信實に姉さんは心から親切だよ「妾はね清さんの事を一日でも思はぬ日は有りませんの然れど決して卑しい心ぢや無くつて眞から清さんが可愛つて決して他人などとは思つて居ないのですからね、世間の人は若い男女が交際すると直ぐ何だの彼だのと謂ひますが妾と清さんとの間柄は決して其麼のぢや無くつてそれはそれは清い〳〵中ですからね……然ど清さんは私が思つてる程思つては下さらないわねても妾はかまは無いのよ」姉樣は其麼に僕を思つて呉れるのかナ「妾はね清さんと何時迄も何時迄も恁してお互に信の姉弟

の樣にして悲しい事も嬉しい事も共にして慰め慰められつ暮したいのですけれど……人は運命には勝つ事は迚も出來ません、妾はね妾は近々にお嫁に行くのです、清さんと長く別れなければなりません、噫々清さん妾は此の土地を離れたか有りません些つとても離れるのは不嫌ですが、是れ許りはもう仕方が有りません清さんも知つて被居る通りの妾の身の上なんですからね恩ある叔父叔母の言葉に背く事は妾の心として迚も出來ないのですからね、清さん此の可憐な姉さんがお嫁に行つても清さんはやはり思つて下さるでしようね譬へ身は海山幾百里を隔つても心に變りは無のですからね、世界廣しと雖も此の妾に同情をして下さるのは清さんより無いのです妾の心を知つて呉れる人は清さんより無いのですからね、噫々あとはもう悲しくつて書けません察して下さい清さん」清次は讀み終つて投げる樣に手紙を机の上へ置き、

「あゝ僕の最も愛する優しい姉樣はもうお嫁に行つてしまうのだ！姉樣はさぞ心で苦んで居るだろう氣の毒だな僕も別れるのは不嫌だ……けれど僕は今迚も姉樣を什麽する事も出來無い、せめて僕がもう少し大きかつたらな……」清次は思はず頭を抱へた。

清次の考が如何にも說明的で、自叙體の小說には陷り易い弊所に落て居る、女の手紙も文章は委曲盡くしてゐるけれども、情味が足りない（選者評）

○湖畔の月

小石川　小林芳女

「オヤ月が出ましたよ」湖面から來た夕風は、サラサラと青葉を渡つて、洗ふような凉しい、岸邊の、小造りな平屋の椽に、腰かけて只うつとりと、空想に耽つて居た靜子、鈴の樣な目に空を仰いで、憾く云た、手束ねの束髮、生花を一寸挿して、顏立姿の何所となく氣品高い、到底田舍で育た人とは見られぬのである。

「兄樣未だ書ていらしつて？」振返つてすだれ越に斯云ふと中では、バサ〳〵と紙の音がして、ランプの光はあやうくまたゝいて居る「否今日の分は卒へて仕舞たよ」とやがて椽へ現れたのは兄の光雄である「兄樣あの月……すツかり晴れて……」とにつこりする

「ハヽヽ靜ちやん嬉しがつて、明日は晴れなきや、ならないんだからね」靜子は只伏顏た「婆はどうしたの」

「あのこゝの名物を何か買てお土產にしますつて買ひに出ましたの」「そうかそれもよからう、然し靜ちやん一寸言つとく事がある斯して僕の勝手から、こんな

田舍で水入らずの三人暮し僕も十分注意したつもりだけれどまだ〳〵至らぬところが多い、之から東京へ行つたら學校は勿論、琴、茶も習はねばならず行儀作法も正しくせなければいけないよ、お前も、もう十七に成て見れば、昔の靜ちやんではないからね、そして立派な松岡夫人となる資格を作らなければならない、先程も云た通り僕はもう生涯あんな塵の世へは出ない心意だからね、決して僕を賴る心など起さずに、よく叔母樣の御命を聞くのだよ、」眞心の愛情をこめて、諭す兄の言葉に「ハイ」と潔く返事して「それでは兄樣如何しても東京へはいらつしやらないの?」「そうさ、兄樣はもう決心したからね、こうして斯して暮せば毎日心を洗はれて居るようで、實に氣樂だ、あんなとこで四邊の汚れた制裁に亡つたお清は、可愛そうなものさ」柱に寄てうなだれると、悲慘な其當時が聯想される、活々とした眼、豐な頰も見違る斗りやつれて、あの臨終の時、あゝ私は何故斯樣な處へ來たのでせう……うらむ樣な、訴へる樣な泪、此淸い里の、例へば谷間の白百合の樣な、あのお淸を連れて上京したのは自分ては無いか……位地名譽……淸をもてあそんだのは、是ではないか!淸ならぬ自分も、あゝ可憐な妹、此無邪氣な一點の汚れもない靜子も亦同じ運命に泣くのでは無からうか……」吾知らず太息して、ふと、見上げれば月はいつしか山の端をはなれて、湖上は、さながら銀をちりばめたよう、何鳥か黑く向岸へ消へた、「もう今夜きりですわね」名殘惜しそふに靜子は兄を振仰いだ光雄も無言に見た、折しも婆が歸つたのであらう、庭の折戸が、ぎーッとあいてバタンと閉された月は愈々さえて、風はいよ〳〵凉し。

無垢の妹を都へやる兄の情、ほど〳〵にあらはされて居るやうだ、對話よりも叙景にうまい處もある、殊に起首に於て(選者評)

○臨終

愛知　石原つたえ

「君、實にすまんが僕の一生の賴みだ、いや、妹の臨終の願ひだ、ね君、可愛そうだと思つて、いつてやつてくれ給へ、委細は此手紙に一と眞心を面に表はして熱心に賴んで居るのは文科大學生の吉田淸である。其手紙を靜に受取つて讀み下して居るのは淸の唯一の親友矢野晃とて秀才の聞え高き、有望の靑年。漸々に讀み終り今西山に沈んだ夕陽の餘光が美しく雲を彩つて此所不忍の池中に寫つてる樣を、見るともなく、ながめながら「あゝ知らなかつた……」と叫んだ、「君い

つてくれるか」とさも心配氣に其顏をのぞき込んで問ふた、「ウン往くよ、往かなくつちやあ増子さんにすまない」「じや明日立つてくれるか」「何、あすだ僕あたつた今たつよ」といつて、ステッキ取直し歩みかけた「ありがたい、じやすぐ立たう、どんなに妹が嬉しがるだらう」と歩み靜に切通しの方へ。突然に「君ッ」と呼びかけた清の聲はふるへて「なに」と見上げた晃の目はうるんで居る「君、僕さへあんな事知らせなかつたら妹は無事で居つただろーにねー」「あんな事つてどんな事知らせたんだ」「どんな事つて僕あ氣がつかなかつたもんだから、君が政子さんと婚禮した事を知らせてやつたのさ、そうしたら其後、病氣付て此手紙の通りになつちやつたんだ、君もあー云ふ風な義理合から無理に婚禮したんだから妹の願ひがかなつたかも知れなかつたにね、口惜しい事つた」言ひ終つていとゞ打沈んだ「今更仕方がない」と晃はなげる樣に答へた、とたん「エヽ車だッ」と飛び付きそうな聲におどろいて飛び退つた二人は顏見合せてさびしく笑つた。

厚い白の毛ぶとんに細くやせた身躰を仰向に、新メレンスの夜具を胸のあたり迄かけ、青白い顏、骨ばかりなる兩の手を乳の上に組んで、吸呼扱ひせわしき其樣を、はれ上つた目でのぞき込んだ母は「増さんや今、車の音がしたから兄さんがお出た樣だよ」と其言葉が終るか終らぬに、ガラス障子に影さして入ッて來たは伯父を先にして清と晃とである。清は、つと進みより「増さんお前は‥‥‥」と泣言つたが後は聲がつまつて出ぬのである、「増さん、僕、僕かあ、知らなかつたんだから惡く思はないで下さいよ」涙の目で、吾れ故に色あせて今僅の間にして落ち散らんとして居る此可憐の花をみつめた。増子はたえかねてや、其大い目を閉たが新しい涙は泉の如くに湧き出るのである、それをそつとハンカチーフで拭てやつて、「増さんや、お前の思は、たしかに晃さんに屆てるから安心してねい、かい、いつかの手紙の樣に晃さんは決して進んで結婚したんじやないからね」増子の唇はぶる／＼とふるえた、て、母はすぐ樣コップの水で其唇をぬらした「兄さん‥‥‥私‥‥‥嬉しいの‥‥‥」「増子さん、君のお心たしかに戴いた、此世は自由にならぬ、仕方がない然し未來は必ず増子さんは僕は妻、きつとなつて下さい」と言つて靜に彼女の手を握つた「あ、ありがたう、私‥‥‥美しい、あの花園で‥‥‥まつて居りますから」猶も何事か云うとしたが此時急に、せき込ん

てきたと同時に唐紅の血しほは金だらひに八分目も。次の間に立ち去つた母は醫者が許に人を走した。かくて增子の命は一秒々々に死の神の手に近くのである、「兄さん…兄さん…母さん…お先へ」「しつかりおし、增さんしつかり」と交る〴〵叫ぶ其顏を見つめてかすかな笑ひを目に浮べたまゝ其まなこは再び動なくなつた。

趣向の奇抜なものは文章に足らぬ點が多く、文章の能く出來て居るものは、趣向に奇が無い、必ずしも奇を求めるにも及ばないが、餘りに同型の能く似た作はまぎらはしくていけない、此作もどちらかと云へばまぎらはしい方であるが、臨終の一段は力が籠つて、一語一句と雖、むだはない（選者評）

○最上川

山形　櫻巷女史

「八重さん、お待ち！妾も行くからね……。」十と七つの桃割姿、菊子は妹の糸ちやんを連れて河の游泳にと、窃と家を出るのであつた。
「はア、早くお出！もう幸さんも敏さんも行つてよ。」
「そう。今日は良天氣で宜いのね。」



せんだく（選外）　大阪　伊藤あさ子

昨日一日降續けた雨の名殘でカラリと霽れ渡つた今日の空、九時頃から熱し初めて正午前には最うヂリヂリと肉も焦げさう。太陽が少し西に寄つた二時頃は最う暑氣の頂上。獨りこの最上川！暑熱を掃ふのである。
「糸ちやん泳がなくつて？」菊子は云つた。
「妾いやよ、母ちやんに叱られるから……。」
「だつて誰も見ていやしないわ、些の間よ。」
「あ、妾も泳いてよ。糸ちやん厭？」
云ひさま二人は帶を解いた。暫し悄然と見て居た糸ちやんも軈て獨り點頭いて、突と夏衣を傍の椎の木に。
「おゝ寒冷い」と一人が肩まで身を沈める後から又一人、水の中に首が二つ。泳いでは一緒に笑ふのである。糸ちやんも負けぬ氣で「妾だつて行てよ」と水中へ入る。「然う大丈夫よ來て御らん。」糸ちやんは恐る〳〵沖へと出て行つたが、最う乳の下あたりまで水か寄せくる我慢して一足々々。水は乳を

越して喉を浸す、アッと思つて引返さうと勉める。すると泳ぎ慣れぬ足が片足づゝ悶くに從ひ浮上るので、身は却つて流される。

初の程は笑ひ中程は呆氣にとられ、後にはあはやと驚き出した二人の娘は、此有樣に心惑ひ、自ら救はんとするにも力足らず、眞靑になつて陸へ馳上り聲を限に救助を求めるのであつたが、それも詮なく、遂に糸ちやんは死の神の手から奪ひ去られたのである。

*　*　*　*　*　*

それより菊子は春風秋雨十九年、月淸き夕べ、浪みどりなる晨、最上川の畔に立つては「糸ちやん、姉さんが惡かつた、どうぞ許してお呉れよ」と人知れず泣くのであつた。

此頃は盛りの花の初春を、俱に白髮の後までと申し來る人も多けれど、菊子は糸ちやんを思つて、一歩も去らうとはせぬ、年每に歸り來る八重子の、海老茶姿すらりとして見違へる樣な都ぶり、諸共に花さく都へと誘ふのであるが、菊子は糸ちやんの墓場のある土地を後に片時も去らうとはせぬ。あゝわが爲めに一命を失はしめしあの妹をどうして見捨てられやうか。菊子は酒田町の小學敎員となつて、終身獨身で生活すべく決心した。そして每朝せめてもの侘び心手向けの花をもつて糸ちやんの墓參りにゆくのであつた。

最上川に泳ぐ處が此作の山とも見るべく、情景活動して居る、全體は大して言ふほどの趣向でもない（選者評）

○暴風

豐[illegible]　山本喜美子

上

一面薄墨を流した樣な空は、見る〳〵黑雲に蔽はれて猛り狂ふ波は轟々として天をつき、風さへ吹きすさみて見るから悽い樣な暴風、漁村のものは皆心配さうに日和山へ登つて沖合を眺めて居る。

「ヤアすてきな大波だナ、そら船が澤山來たゾ、常にや大きい船でも今日は木の葉だ」「アーほんに何艘か來たナだん〳〵近づかア」「オヤおらが父の船も來たゾ」「ヤイ〳〵兄の船も來たゾ」「コレ〳〵おらが可愛い坊が來らア」愛ひ顏にとざされて一時寂とした日和山は俄に、喜びの聲に充たされた。村の者が山を下りて行つてからもの、十分もすぎた頃、髮もおどろにはたゞしう日和山へかけ登つた一人の娘、名はお花とて無造作な漁村には珍らしい程の顏容である、眼には一杯の露を宿し息もたえ〴〵しう。

「どうして兄さんは遲いだらう……もしやかはつた事でも……オーイ兄さん兄さん……オヤ磯島の影に黑いもの……さうだ〳〵きつとあれが兄さんの船だ」折から鳶が空をかすめて羽ばたき荒ら。

「マア人間にも鳥の樣な羽があつたなら……」あとはとぎれて聲が出なかつた、お花はしばし途方に暮れた樣子、ふと思ひついた樣に下駄を脫ぎ捨てゝ鎭守の森へと走つた。

お花の家は母は早くに世を去り今は老父と兄の新吉と自分との三人ぐらしてある。さすがに爭はれぬは親子の情愛で今は父も心ならず、胸をどらして濱に立ち出て、老の寒さも打ち忘れて、水中に飛び入り身を淸めていとしわが子の身の上を、神佛に祈るのであつた。

下

「今日は常にない大漁だから親父が見たらさぞ悅ぶてあらう」ヨイショ〳〵ギチン〳〵。

「何だか沖合が暗くなつていやに海が鳴り出いたゾ、これは心配だナ」「ギチンコ、ギチンコ、ヨイショッ」「ヤア急に天氣がかはつて來た、オヤ海が荒れ出いた風も強いな帆をかけては是も心配だ仕方がないナー」ヨイショッ〳〵新吉は艪に手をかけて一生懸命折から波をけたてゝ暴風一陣、あはれ、運もつきたのか船は眞一文字に磯島影の暗礁にと吹き流された、「アー困つたナ……オーイ〳〵助け船助け船〳〵」常には白帆の數しげき磯島沖も、今日は何の影もとめぬ。船は次第に水入りとなる。

「オーイ親父さん、ゆるしておくれヨ、のーゆるしてヨウ、親父さん受けた御恩の萬分の一も報いぬ中に、先だつのは誠に心苦しいが、是も前世からの因緣とあきらめてヨー親父さん此の上はお花を賴むぞへ……」止め度もなくせきくる淚を破れ着に拭つて、しば〳〵空を仰いだが、はてはをかし難い決心の色を浮べて、持ちあはせし斧で、帆柱を倒し、運を天に任せて、ザンブとばかり……さかまく波に、浮きつ沈みつ。

濱横道が稽古に書いて見やうと云ふ風な短篇で、別に小說として重きを置いて評論するほどのものでない、只「上」の方が「下」よりは能く書かれてあるのと、素朴な漁夫生活の一端がほのめかされてある事（選者評）

○梅雨晴

石狩　芙蓉

人の形犬の形船の形の黑雲、幾重にも幾重にも重なりて、今にも降り出さん空模樣。

此處は某師團の營所の後、三本筋の軍服に外套を被りし一人の兵士、さすが軍人何處やらに猛々しき所は有

れどまた情ある面ざし、一人はその妹と思しき女學生兵士は妹の方を見省り。

「ね美智子、美智様何も學者に成らなければ生活しられない事も無いでせう、廣い世の中には幾何も有るよ、自分の名さへ知らない人が、それに美智様は高等女學校迄卒業したじやないの、僕の弱腕では過ぎた知識を與へた心で居たのに、又そんな不足を云たつて最早何様する事も出來ないじやないか、以後は先の分らない僕だもの、何でも人は滿足が一番必要だよ美智様是で滿足しさへすれば母様は何様にお悦びだかしれないよね、先刻も云つた通り思切ては何様、如うしても思ひ切る事は出來ないかい」美智子は露けき面を上げ、

「だつて妾如何しても小學教師で：：：何卒兄様最早五年間如何かして、母様も嘸お寂しいでせうけれど」

兄はしたり顔に妹を見つめ、

「如何してつて、だから先刻も云つてるぢやないの、僕達も二三週間の内に軍行なけりやならない様に成つてるし、如何して五年間の學費が續く者ですか、それに東京に行きさへすれば立派な人に成れると思つてるかも知れないが却て失策る人も澤山有るよ。」

「だつて妾出してさへ戴ければ勉強する心算ですわ、」

空は破れて迸り落る大雨、美智子は早くも洋傘に雨を避け袴の裾からげしも草の上には座りかねて跼みたり兵士は外套眉深に被り乍ら、

「どうせ戰地へ出れば死は覺悟僕が戰死したら母様はお一人で如何成さるだらう、始めから餘裕の有る身では無し、貴女の卒業して歸るのを頼みに泪も見せずに僕を送つて下すつたんだよ」：：：妹は無言、兄は語を續て「何も學校に通わない故つて少しも進歩せんと限つてるものじやないし、次第進歩も退歩も：：：：母様とて最早永くは無い體、心一生、不幸不自由で終らせるのも氣の毒、實にすまん次第じやないの、ねえ、美智様其様でせう、それが解れば上京する等とは云はれまいね、あゝ何故此様に決斷心に乏しいんだらう、時々の日曜には何時も此様つまらん說敎、あゝいやだ嫌だ早く戰地へ行つて敵丸に斃れ度い、死だ方が何程宜いか：：：：だが困つたものだ、美智様願から宜く考へてお呉れ、」

雨はまた一しきり、此時美智子は雄々しくも湧き出る泪を袖て拭ひ、ほつれし髮をかき上げ、

「兄様赦して頂戴な、妾惡かつてよ、東京等へ行かないわ、敎師に成つて母様に御不自由は掛けないわ、」

兄は意外の言葉にかゞやく眼を見張り、

「えッそれは眞實、僕の言葉を解してお呉れなの、」

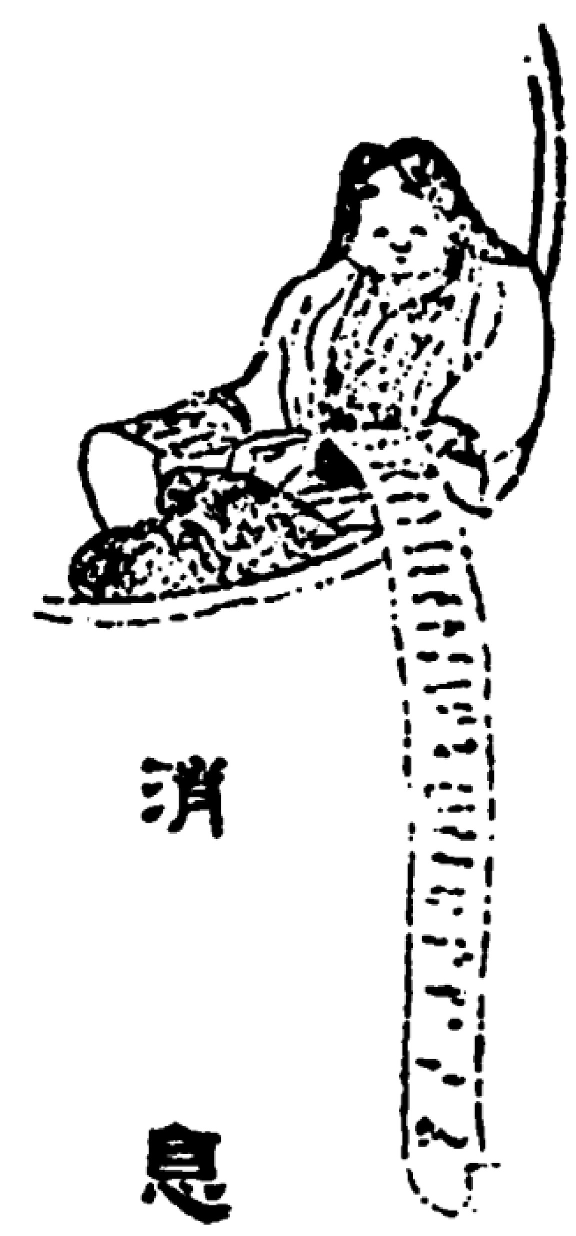
「宜く解つてよ、明日にも本宅へ歸つて、そして務めますわ兄様安心して頂戴、ほんとに妾の心得違だつたわ、兄様の御恩は終生忘れはしなくつてよ」

兄は嬉しげに妹の手を握つた。

「あゝ僕も始めて安心しました、何卒何時までも其心て、無益な空想等は廢してね、：：：：母様を頼むよ、今日は遲くなつた故是で別れやう、：：：じや失敬、サヨナラ體を大切にね」

やをら立ち上つて兄妹は西と東：：：：：「じや頼むよ母様を、」振りかへり振かへり。

軍人にしては少し女々しすぎるが、此女々しい處が、却て妹をして心を翻へしむるに到らしめたかも知れぬ、文章も節約、たちの好い書きぶりである（選者評）



消息文

文學士　沼波瓊音先生選

○海外に去りし人へ

麹町　柴崎ふみ子

世は既に春にて候、御けしきいかに入らせ給ふや、妾こと此程心ともなく住居を出でゝ、今は紀念の、懐かしき上野山王臺に、ふら〳〵と迎り入り候。去年の此頃は君とともに展覽會場に繼遷の定めなや、はてなき美しき想ひに満た尋とき藝術の中を歩みて、ひとゝせ廻り來りし其月の今は、獨りされ候ひしが、淋しく※に立ちて此の懐ひに忱り候はんとは。明年はた如何に成るべきさだめ持つ身に候やら。花も見ず人も見ずして力なく道端を歩み候折柄、不圖聞ゆる雄大な響き、ピャノにやと振り向けば、音樂學校は空に聳えて書くが如く、園生に咲ける桃の花櫻の花、花と花との中を傳うて間斷なく漏るゝ壯麗な音調さながら靈あるやうに覺えて、しばし、歩みを留め居り候。あゝ、華々しき世の様や、あゝ、耐なる春色や、されど淋しき我が心は浮立つべくもあらず、只懐かしきは萬里のそなた、はかなしと知りつゝもなほ空に舞ふ鳥のつばさを羨み候。

〔評〕情切にして人を泣かしむ。

○都の友へ

樺太　東　てつ子

妾は、今、月の小舟に千代の流れを遊ぶにて候。北良山は淡霧の上にねむり、紫尾の靈峯はほのかに連山のかなたに高く聳え候。さても水を渡りて吹きくるそよ風の如何に涼しく候事や。今や月は太平橋下にねむれる船舶の帆柱にかゝりて光美しく、橋は黑く、川は白し。かく申し候はゞ、さぞな故鄕の千代の流れの夏の夜景色、御目の前に現はれ故はん。あはれ故鄕戀ひしとは思召さずや。はては辭せし横笛取り出でゝ、懐かしの君にまで響けよと吹き候音の、御耳には達し申さずや。もし夢にても入り候はゞ、居殘る故鄕の友に一筆を惜み給ひぞ。先は是まで、水棹に滴る流れの雫硯にうけてかくは……、かしこ。

〔評〕知らぬ者の目にも浮ぶ。

○禿筆だより

鳥取　上山千重子

萩の雨蕭々として京の秋もなか〳〵に佗しう候。さはれ友呼びて鳴小鹿のそれならねど、妹ゆきてより此かた、兎角人なつかしう、さ候へば門に佇む花賣女など

呼び入れて、古衣かつげやる日もおはし候。御室に住む乳母が許へも文して候へば、兩三日のうちには馳せ參ずべく、然らばしばし寂寞を慰せんと存じ候。去ながら、懐しき御許様には如何に渡らせ給ひてかそよとの御便りだに洩したまはぬ悲しさ、之れのみは誰が力にても癒えず候。御手飼ひの玉が首輪など縫ひて、かなしき境にさまよふ子を忘れ給ひしにや、とまれ恨は雨の細々とつきず候。

○

御手紙巻き返し拜し候、折柄誰がすさびにて候らむ「雞冠花は霜を帶びて朱頭正に重く、斷腸花は露に落ちて紅涙自ら滴る……」と、あはれ此處にもしどまの秋は更け行き候。さて御恨みも然る事ながら、母暑肥立ち兎角宜しからず、今猶病褥に悶へ候へば、何くれと忙しうて、新參の下女をたよりに、心細くも立働き居候、想へば同じ寂寞の境に泣くも宿世の御緣、いかで〳〵君を忘れ申すべき……。あれ搖籃の嬰兒目さめ候、早速用意の羊乳含ませて子守唄一つ二つ、可憐やまたすやすやと眠り候。斯樣に候へば愛猫玉を省みる暇おはさず、さりとて捨つるも便なう候へば、何も優しき御許樣に甘えて。

［評］寂しき秋。

○遠足に誘ふ

靜岡　谷　文子

燒山て提灯の蠟燭がジヽと音して消えかゝつた時は有繫のわたしも蒼白になりました。何しろ今迄灯一つに命を托して辿つた山てすもの、夫が急に消えて折から星一つない暗、光に馴らされた眼のこの闇黑を什麽して承知致しませう、實に彼時は前へも後へも行かれない始末でしたのね。無理はありません。右は斷崖三十丈といふ谷で左は四十八瀨の水の音が只囂々と云てる恐ろしさ徑は人二人やつと並んて通れる位の窄さでしたものね。けれど妾はその後て土地のものに聞きましたの、此土地の壯佼はあの闇を平氣てすつとこ冠りにじん〳〵褻り小唄うたつて提灯なしして通るんですつてね。豪いわ、で妾も考へたの、いくら女だつて闇に恐れて山越し位てきないでは以後は耻てすわ、貴女も平常からその主義で夜分遠くへお出かけと聞きました、こんだまた燒山へ遠足しようと思ひますの、貴女明日宅へ來られなくつて？ご相談しますわ。

よいへんじまつ

ねえさま

妹より

［評］誘引文としてはしつこき嫌あれど流石に面白き節あるをとる。

○浪花の花信

大阪　青野　波子

繪葉書て花の見頃を問はれけり

問はるゝまゝに當地の花信お答申上候世の中は三日見

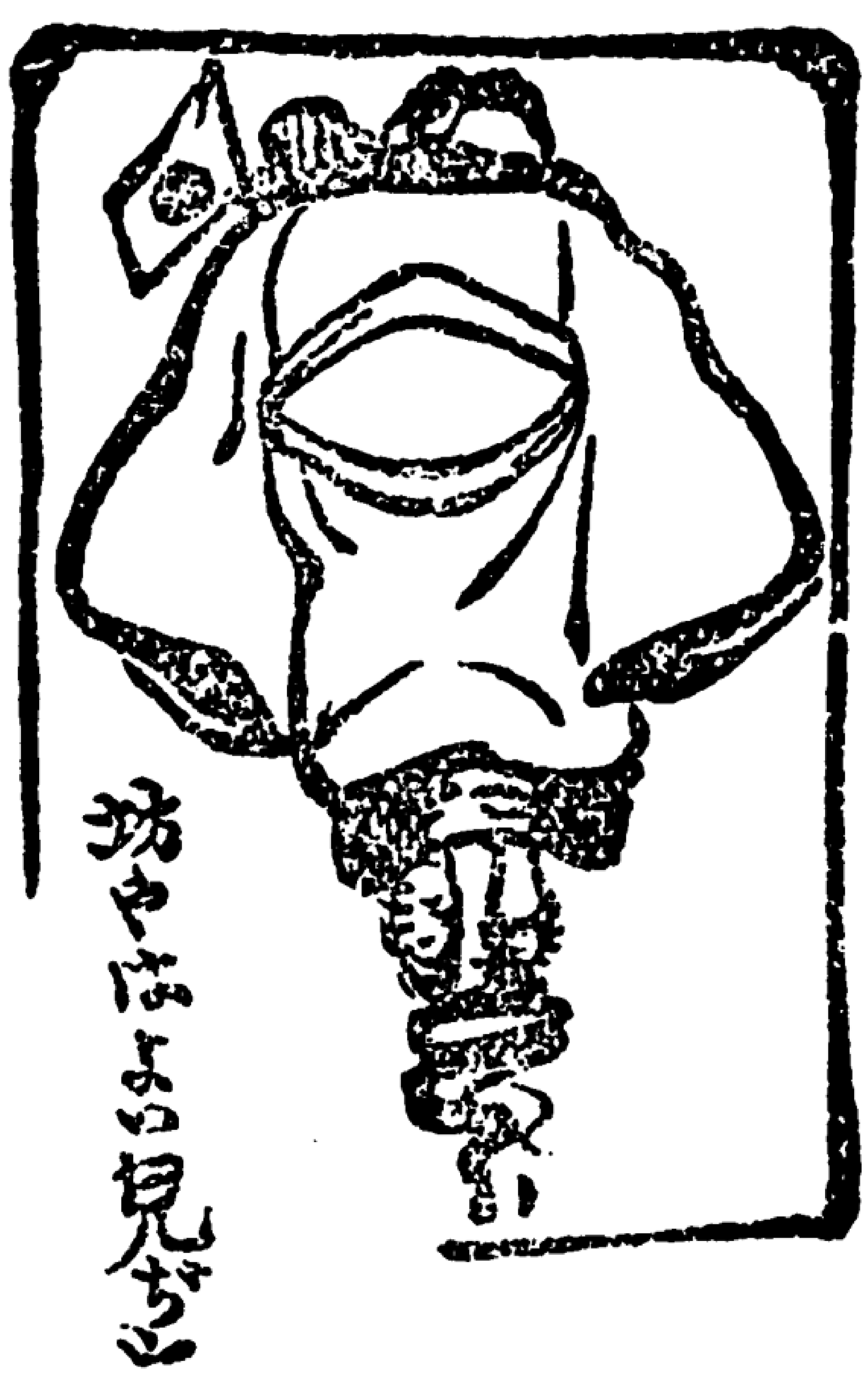
ぬ間の櫻とやら北野鶴滿寺内の糸櫻兩三日が咲きも揃はず散りも初めぬ見頃に候よし花の便は來り候へ共未だ見る折りを得ず候。櫻の宮造幣局あたりは十五日頃が滿開との噂掛茶屋もこれより賑ふべく候仇な九軒の夜櫻はそれと程遠からざるべく候。

こゝに封し込めたる彼岸櫻の一枝は机上に我目を樂しませしものに候へば乍失禮故郷の春を忍び玉ふよすがにもと差上げ申候。さても東の都の委しき花の便こそ一入待遠しく候若よ隅田の花は如何に候ぞ九段の櫻は蕾を破り候乎とく麗しき水莖の跡にて一筆お示し玉はれかしとなん。

【評】 或人の句に「絵葉書に花の便や女文字」

○都より　　神田　塚越のぶ子

月明の夜淺草凌雲閣に上る、八百八街只靜かに果てもなく花よりも美しき百萬の電燈遙かに天に接し、長蛇の如き電車は此の間を縱横に縫らて滿都は恰も不夜城の極樂淨土を見るが如く時々聞ゆるは汽笛の音、天をも焦す幾萬の烟突は煙濛々として長く天に冲し壯觀譬



ふるにものなし。東京は氣候の變遷が時々甚しい事が有之候へば、夏に向つたからとて直ぐに冬物の質人は危險なものに御座候由、ある人の話に御座候、にはかに寒さを催して又質屋から出す樣な事も有之候へば、矢張り一枚位は殘し置く方が便利に御座候由聞き及び候。

（選外）　磯中　阿部とみ子

本郷通りて、男學生が、女學生より金を受取つて何か買物に戻つた樣子が一寸面白く見受け申候、陳は女生が帶の間から紙入を出す間、男生は其前に、つと立て待ち居り申候、何だか男が女に金を貰つて行くのは餘り立派なものでないと見たは僻目に御座候や。

東京は食道樂の所に御座候、蕎麥や天ぷらや汁粉や蒲燒や牛やしやもや西洋料理や等、各獨特の、にほひを致させ居り候へば、遂に上りたく相成り申候、矢張り人間も猫みた樣なものに御座候。

上京の折、弱いから、氣を付けよと言はれた妾、家にありては丁寧に風や脚氣を病みしもの、さて上京して見れば思ひの外、未だ風邪一服呑みたる事之なく候、して見れば矢張り風や脚氣も我儘より出づるものと始

めて相分り申候。

〔評〕或はそしり或はいましむ。

○故里の友へ返し　豊前　山中敬子

この間の汐干狩りの記、くりかへしくりかへし、面白く讀み申し候、例にならう籠に滿つるまで得られ候ひしおうれしさお察し申し候。鈴熊山の桃も漸く笑ひ初めこゝ二三日間見ごろとのよし聞しに就けても、昨春の御身と共に眺められし天仲寺の櫻、ゆかりの色の誇など變ることなくほころびて昨春の野邊にも勝るべく候はん。あれやこれや故郷を思へば西の空戀しく思はず涙を催し候に「敬子の君ましまさば此春の今一しほうれしからん」など讀み終りし時は今にも飛び出したき心地いたし候、情の薄さ紙よりも甚しき塵の巷に咽ぶ今の身には誠心深き君のたよりいとうれしくて夏の山路に湧き泉見出でたらん心地して、いつしか心は海山遠き故郷に馳せて由なき想ひに迷ひ申候覺束なくも西に歸る雁にもがな事傳てんとまで思ひつめ申候、さるは、みづからのぞみて出京いたし候事ゆゑ、もとよりたゆむこゝろはなく候へども折にふれ、時につけては故郷の事の思ひうかばれ申候、なほ聞え上げまほしきことは山々候へど後のたよりと、かき殘し候かしこ。なほなほ御序もあらば、野本汝枝の君へもよろしく御申聞下されたく願ひ上げ候。

○お泣きてないよ　四谷　みどり子

郵便と投げ込んで行つたのが、懐かしいなつかしい武ちやんの御手紙であらうとは思ひがけ無かつたので、取りあげた姉はあまりの嬉しさに破れる許り接吻しました武ちやん淋しいでせう悲しいでせう、御親切な父樣の傍おちやあるけれど母樣のない武ちやんを一人殘して來たのだから雨につけ風につけ何うしておいでかと氣になつて片時も忘れる暇はありません。まあ母樣がつねりなさるつて？可愛さうにね、幼い者を、母樣もおひどいわ、武ちやんがどんなに口惜しがつてお泣きだらう、姉さんは飛んで歸つて遁れて來てあげたいわ。けれど武ちやん泣かずに辛抱おしよ、えらい軍人になる人は決して泣かぬものよ。武ちやんの好きなサーベルや劍は姉さんがどうしてでも買つてあげるからね、日本男子は泣くのぢや無いよ、武ちやんが泣いてお呉れだと姉さんは身を切られるやうだからね。最少し大人になつたら東京に出て大將になる學問をするのよ、それ迄はね、悲しからうが母樣のお言葉よくきいて叱られんやうにしてお呉れよ。姉さんは遠方に居るけれど武ちやんの事許り思つてお金を澤山溜めて置くからね、乾度々々お泣きてないよ。

○試驗の成績　麹町　芳野静子

校門の開くのを待ち兼ねて、開くや遅しと、掲示場へ馳せ付けて、成績の張出を見ると驚いたわ、卒業生の中に、自分の名が無い、胸はどきどきしてくる、さあ、どうしたらよからうと、約も委しく見ましたら、終り

から三番目の處に、漸く名が見付かつて、やつと、胸をなでました、あなたさまにおしらせするのも恥しいけれど、あれ程、堅く約束したこと故、恥しながら、別紙の點表を添へてお知らせ申します、どうぞ、お笑ひください。

○夫を失ひて　周防　小澤ちゑ子

拜啓御袖を別ち候てより、既に二年。明日をも知らぬ人の身の、永き此年月の間に、我身ながらも驚くほど變り申候。さはれそは、其都度御知らせ申し候故御存じのことゝ筆擱き申候。

友の君。

今我が筆持つ手は慄ふも打震ひ申候。我夫は彼の世に旅立たれ候、吁、其時の有樣、今尙目の前に御座候へ共、……言ふに忍びず候。

我運命のあまりに、慘きを思うては、泣き候ことも幾度か御座候。

あゝ思へば、此の幼き二人の子を育て、操を守り、夫の意志をば、受けつぎて、處理すべきことの女の身には重き荷に候こととよ。

さはれ友の君。

夫を失ひたりとて、取り亂すほどの女には候はず。願はくば、妾が後日の働きを、見給はんことを。

かしこ。

○なつかしき友に　靜香

梢やうやく色まして、雲井にさけぶほとゝぎす、いつに變らねど、あはれその綠こき木の下に一聲きかんと待ちわびし人は、今いかに。

君よ玉造の里山深き處に、夕陽を背に浴びつゝ駒いななく畷道を一人淋しくさまよふ友あるを忘れ給はずや、思へば去年の今頃は四つの袂風にひるがへしつゝ、理想がたりして樂しみ候もの、山川距てゝ朝に夕に御うつしゑのみ眺むる身とならんとは、實に淵瀬定めぬならひにて候よ、君には其後御變りもあらせられずや定めし日々の御務に御多忙の事と推し居候妾事晝は例の元氣にて、敎へ子に向ひ居候へども、家に歸れば冷なる六疊の間にたゞ文机と語るのみ、いかに我と我心を叱り候ても暮雲暗き夕故山の空を望みては何物か頰に一二滴、思はず前なる寫眞ばさみ取上げて、キッス致すこともまゝこれあり候御笑ひ下さるべく候、たゞこの上は來る休みには必ず御めもじ致し積るかず〳〵御話申度とそれのみひたすら待居候君にも充分御保養專一に又の逢瀨を樂みに御勤務のほど祈り上候。

堪へがたさに軒の玉水一雫硯にうけて、かくは御伺ひ申上候。かしこ。

○出京の友に　青山千代子

澤子樣今朝程御手紙拜見致しました、貴女はどうして東京に入らしつて御父樣や御母樣の御同意を得て入らしつて、若し不都合な事をして御家をぬけだして入らつしやりは致しませんか、貴女にかぎつて其樣な間違も有りますまいが、よく世間でも有ります事て、あま

り東京に行きたい行きたいと思ふが一心で、父母の許も受けず出京して方針を立てる事も出來ず、すご／＼國に歸る人も有る世の中ですから、もしや貴女もと一時は心配を致しましたが、麴町には御叔母樣の御宅が有るとかね／＼承つて居りましたから一先安心を致しました、何を申しますも廻らぬ筆をむりにまはさうとすると、間違だらけになりますから御暑いでせうが、御隙の時に一寸入らつしやいな、其上で私しも少しは御力を添へますから、御方針を御立て遊ばせな失禮な事を申す樣ですけれども、貴女を思ふから申上るのですよ、何卒あしからず。

○全快を祝ふ　　茨城　和田もと子

一筆しめしまゐらせ候。さても、この頃の霖雨はすこやかなる身にすらも何となう、うつ／＼しう覺えられ、まして、御いたづきの蓐にふせり給ふあなた樣には如何ばかりかと案ぜられ候を、御家内みな樣の御心づくしと御服藥との甲斐おはして、いよ／＼御平癒いたされ候よし、妾こと誠に／＼嬉しきことゝ御喜びまゐらせ候。母ことも常々あなた樣の御病氣につきて、心配いたし居り候ことゝて、このたび御心ようなられしよしを申しきけ候ひしに、ことのほか喜び申し候。これはみすぼらしき物にて侍れど、御地にはめづらしきものにおはせばとて、いさゝか進めまゐらせ候。御笑留あそばされ候はゞこよなう嬉しく存じ候。
いづれ、參上おめもじいたすべけれど、取りあへず、御祝ひまでにかくなん申し上げ候。かしこ。

○朝顔の花を乞ふ　　横濱　ちあき

谷合ひの清水ほしき頃に候あはれ無情の空や雨を送らぬのみならず一陣の風すらさえぎりて只々むすばかりの御暑に御座候昨夜もあまりの暑に寢苦しければ臥床起き出でゝ椽に腰打ち掛け月をながめ虫の音を聞きて漸く少しの涼さを覺え候亦も床に入ればむし暑くて眠られず色々の物思ひに耽り候今朝朝まだき散歩の折柄垣間より御庭の中をのぞき候へば數百鉢とも數へきれぬ程の御鉢植の朝顔の銀の玉の如き朝露にほころびて咲きたる風情をながめ候君が日頃の御丹精の程あらはれ候ていとも恭けしく存じ候誠に申兼たる事には候へど日頃の御心安きにまかせて一輪にてもよろしく候へば御惠み下され度若し御心にかけさせられて一鉢賜る事のかなひ候はゞ種子を取るべく兄上も申し居り候御宅樣の種子ならば無奇用なる私共にも丹精の結果よき花を咲かせる事も出來申すべしと今より樂みに致し居り候何卒御熟考の上御惠み下さるゝ樣偏に伏して願ひ上げ候かしこ。

○米吉妾は涙が出ますよ　　芝　芳子

米吉妾はおまへの手紙を見るとほんとうに涙が出ますよ。
おまへも何時迄も子供のやうな氣で居ないで少しは自分で考へて御覽な田舎では年老いた父母が朝薄暗い頃

から夜星の出る頃迄鍬を持て働いて居られるてはありませんか其れと云ふものは皆子供の爲てす其れにおまへは朝は八時の出勤で午後四時には銀行を退くのてせうさうしておまへは自分の下宿料の小使は充分とり其上親からは不自由なすつて毎月拾圓づゝ下さるてはありませんか其れに未だおまへは小使が足りない等と妾の困て居る所へよくも云て來られたものてす妾は一日も早く老いたる親に樂をさせたいと思ひ此の家に來てからは着物等は勿論の事三度の食も充分出來ず儉約に儉約をして三年が間と云ふものは一日も仇に暮した日はありませんお前もどうか此の事をよく聞分け此後は心を改め無駄費等は一切止め毎月親から戴く拾圓をことわるともして老いたる親に安心させて下さい其れかと云て小使が不充分だからと惡心を抱てはなりません是れが妾の御願なのてす。

○伯母の許より　　神戸　森本千代子

空はいよ〳〵眞紅に遠寺の晩鐘微かにひゞく、物淋しき黄昏時、涼臺にこし打ちかけ、神戸の空のみ見やりて、父母君さては同じ友どちの、いかにおはすらんなど、初めて父母の膝下をはなれし此身は、いとゞわが家なつかしく、かひなき空想にふける折柄、郵便一聲、取る手おそしと見れば、なつかしき〳〵御筆、察し給へ君よ、妾はいかばかりよろこびしか、くらぶべくもなき、なつかしの御身が御心づくしの、一言一句遂に堪へかねて御玉章ひしといだきしめて、泣き伏し候よまことや舊病院あとには、おもしろきもの出來候事よ同じ地なれば共に見るべきものを、思ひ立ちし寫眞も取るべきものを、それさへかなはず…わづかに一里とはへだてねど、御目もじし得ぬかなしさは、百萬里の海山をへだてし如く思はれ、共に遊びし樂しさも今は追憶の種にて、たゞ世の無情をはかなむのみに候御筆繰返し〳〵拜してよりは、一入伯母の看護に手をつくし候かひあつて、少しは快方に赴き候是も一に君が御心づくしに外ならずと、かげながら涙を以て、禮辭にかへ深く謝し居り候、歸宅の後は種々つもる思の山々をかたり合ふべくそれのみたのしみまち侍り候。



宮かへり（選外）　能登　勝田せい子

○雨の降る日友に　　赤坂　高木留子

庭の青葉に梟の聲、幻の中に響きて、おぼろ月夜のさびしさに、妾は、破机に向ひて、日頃したしき、君に一文を呈し候、長くふりつゞく此の雨に心もしめりてうつ〳〵とくらし給ふ君が心もしのばれ候て、いかにも堪へがたく候、此の本は雨の日つれ〴〵を慰むるに適すとて、遠國に、ゆき、ましゝ、兄上樣の送りくだされ候、ものに候、我れ、一人、面白き思ひするも

ほいなく候まゝ御心を慰めんと、只今御送り申上候、受け取りくださらば、うれしく存じ候かしこ。

○友の許へ　　東京　舞ごろ叢

さても寂しき夕べには候はずや。夕日は西に入りて、名殘りの光り歸雲に映じ、ゆるう流るゝ刀江の水に、臙脂をながすが如く、はるかに遠くきこゆる水車の音は、絕え間もなうわらはが胸をつき候。あはれ君よ、この寂しき夕べを、いかに過させ給ふにか。

さぞや、君のとゆゑ、ピアノ、ヴア井オリン、さては詩に文に、あかぬ御手業の、御憂さもなうすぐさせ給ふらむと、そゞろ吾が身の悲しうこそ候へ。げにも我が世は、幻影の如く候かな。妾は、はかなき情の子にて候よ。あはれ祝福なる君よ、妾を！情の子を、いつくしみたまひて、折々は、嬉しき御音信を聞かせ給はれよ。

○奉公せる友に　　大阪　刀禰春子

こたび御許樣には、家事見習として、御奉公遊ばされ候由、承はりし妾は、いとゞ感じ申候。誠に浮世のからきをなむる、御稽古としては、至極よろしき御事と存じ候。人間も、いたづらに、樂しき家庭を、慕ふのみにては、獨行の思案にも、乏しく相成申事故、とかく、わたるに安き事なき社會の風にも少々あてられてこそ、はじめて、氣高き品性も、そなはるものに、御座候。されば左樣の事をふかく御心に思ひとめて、御自愛の上、精々御實直に御勤務相成樣、例の老婆心をもちいて、御注意申上候。尙御宅の事などは少しも御心にかけ給ふな、及ばずながら御世話致すべく候。あら〳〵かしこ。

○音づれなき友に　　尾張　井口登代子

飛鳥川流れて早き年月の昨日今日と徒に過ぎ候程にはや青葉深き頃と相成りしを如何に御暮し遊ばされ候か會者定離は世の常とは申ながらつら〳〵思ひ起せば露置く袂を停車場に別ち候ひしは去年の今日なりしあゝ過ぎにし日君の東都に遊び給ふときゝし時の驚きはそも如何計りにて候ひしかもはや再び此地にて逢ふ事の難ければとて御出發の前夜よもすがら私の宅にて語り明しゝ其折を思ひ出しては今も一種の感に襲はれ申候君とても雨そぼふるの夜半或は月清き夕には御慈愛深き御兩親を思ひ懷しき故鄕をも思ひ出し給ふべしあゝ彼の夜共に眺めし月は今も我を照せど懷かしき君は在さずあゝ美しの月も今は中々に恨をますよすがにて候さりながら君が目的を達し給ふ日も近づくかと思へば何となく嬉しう愉快に感ぜられ候申す迄もなき事ながら此上一層御勉學遊ばされ天晴月桂冠を頂いて故鄕に錦を飾り給ふ日笑うて此悲しみを語る時も候はんと夫のみ樂しみ居候何を申すも御地は學術に交通に萬事國家の粹を集めし處にてみる物きく物につけ驚かさるゝ事のみと兼て承り居候へば何卒御地の摸樣お知らせ給はりてせめて井蛙に天の一隅を窺はせ給はらばこよな

く嬉しう候かしこ。

○友の許に　　鍾町代志子

御父君御逝去との御報承はり候折は只夢見る心地致し候て御慰め可申言の葉も知らで候ひき、假初の御病とのみ承はり居候身の斯悲しき御報耳に致さんとは露程も思ひよらず以は皆々様の御心盡しの甲斐もおはしまさでか、時しらぬ無情の風のいよゝ恨めしく感じ申候御許様は申も愚、御母上様姉君様の御歎きの程も嘸やとしみ／＼御悔み申上候、生ある者の一度は斯る悲みは見侍る可き世の道理に候もせめては御枕邊近うかしづかせ給ひて御心の限り御みとりし給ひなばいかで御あきらめのよすがとも成らせ給ひし御事ならんを、海山百里の都の空に明暮故郷なつかしみ父君の御上案じ居給ひし君の御心のうち、‥‥さこそ、と同じ境遇に暮し居候妾轉た同情の涙關止あへず候、噫御慰め申上んと存じ候言の葉は却つて御歎き增さす悲しみの種言ふも益なき繰り言よ只此の上は御あとねんごろに弔はせ給ひて世におはさぬ御父君の御冥福只管祈らせ給はん事をとこの一言のみを。

小包にて送りまゐらせし花籠御承知の未熟なる技にて御目に掛るもはづかしながらこは文讀むひまをよべ一夜まどろまでよう／＼作りあげ候元より香もなき花に色も見るかげなう候へども心ばかりの御手向け御佛前の傍になと御供へ下され候やう。

流す涙の薄墨にしどに亂るゝ筆の跡かへり見る暇もなう御悔申上ばやと斯くは。

○絶えたる友に　　紀伊　前田みね子

先きつ年、おなじ學びやにかよひ申候折は、はらからもただならずむつびかはし、うきも樂しきも共にいたし候ほどに、かく海山とほくへだて候ふものから、花鳥の折をすごさず音づれいたして、かたみにたのみすごし候ふものゝいつとはなしに遠ざかり行きて、いかにおはすともうけたまはず、いかに暮すとも知らせ奉らず、すごし候へど、さら／＼心にへだてありてのわざにてはこれなく、いつもいとまなき身の今日よ明日よと送りやりて、かくは久しくなり申候。

おほかたすみだの堤も花ざかりならんと推しはかり候が、いかにながめたまふにや、御様子こそうけたまはらまほしく候へ。私はかはりなく父母の膝下にて家事の手傳ひやら弟妹の世話やらに日を送り申候。小學校にありし弟の中學校へまゐり、幼稚園にかよひし末の妹は今年はじめて小學校にかよひ申候。夜々親子兄弟うちつどひ候うて様々の物語りに時のうつるも覺え申さず候が、いつも妹が片言ならべて學校にて聞きたるはなしのおさらへいたし候ふに笑はされ申候。一昨年の春、共にかざして寫眞とり候ひしが八重櫻もちりそめ候につけて、ありし昔を懐しく思ひいで申候いまちり來しを一ひら二ひら封じこめて送り上げ候。あはれ御暇もおはしまさば御返りをたまはり度、朝な／＼小川の岸の柳かげにて郵便の來り候ふをたのしみまち暮

すべく候まづは右申上度、あら〳〵かしこ。

○僕が判決　尾張　曾川文子

近頃時ならぬ風波御手紙により承知實に驚き入りたり、餘命いくばくもなき老人無理ならず、さはいへ村の名物伐り倒さんもいとをし、お母さんのお説も御もつとも、お爺さんの東京見物余の數年來の希望姉さんの仕度金多からんも希望するところ大庭園の幾分をせばめてお爺さんお母さんの希望を滿てらるべし、さすれば、余の卒業を期して作らるべき大庭園に二百年以上も年を經た大松を主人公とし得るにあらずや。

（小野秋子様の兄上様の御裁判を讀みて）

○友への返し　德島　住友時子

匂ひやかなるみ言葉の花、さらぬだにこひしき御住居千草露に笑むみ園の、いやなほなつかしうなりまさりて候。

「すぎし昔の思ひ出にかをれる花の朝露につらねし袂ぬらさばや

とはげに嬉しきみ心の程に候ものかな。

なよ〳〵たる女郎花、女心の藤袴、けだかき白萩、奥ゆかしき桔梗…色さま〴〵にさきほこる…淸き月の小窓に、折々やさしき虫の音に耳かたぶけつ、歌かき給ふみ姿の目に見るやうに覺えて、ひとりほゝゑみ候ひしよ。

もはやたへがたき胸のおもひに、明日こそ、人まつ虫の音をおどろかしまゐらせむ…その折にこそ、花の香ゆるゝお許が書齋…やさしきみ聲に、日頃ひめたまへる妻琴をしらべたまへや。

御庭の景色！　妙なる音！

いかに心情の動き候やらむ…。

あな明日の日のこひしきことよ…、かしこ。

新刊紹介

▲生理衛生講話（杀左近講述）　早稻田通俗講話の第四編にして衛生上の談話に經驗ある杀左近氏が學生の爲に一般の生理上、衛生上の心得となるべき講話をなせしものなり目次の一部を擧げると血、口から肛門までの道中記、骨に就いて、危機一髮、適度な氣候、天授の衣服、長齋の一夜物語など（正價六拾錢早稻田大學出版部）

▲地文鑛物講話（橫山又次郎、石川成章講述）　同じく早稻田通俗講話の第三編なり、地文の部が橫山博士、鑛物の部が石川學士、前者に太陽系統、地殼、火山、地質山、河など地理學上の一般の知識を收めあり後者は著者が東北地方を旅行せし時の紀行文に於て鑛物學上の知識を解釋せり談話體に綴られて凡て實地の見聞なれば讀者も知らず〳〵興味に引かれて新見聞を得る利益あり（同上）

▲初音草（安孫子よし子著）　本誌の讀者は長野縣の安孫子奚子の名を記憶せらるゝならん本書は女史が新体詩、短歌、短篇小説などを蒐め、寸珍の美麗なる一册子となせしものなり（定價三十錢長野市元善町金華堂發行）

▲源氏物語忍草　袖珍百科全書の最近刊の分は源氏物語忍草を收めたり本書は木版にて世に行はれたれど活字になりしは初めなり源氏物語をつゞめて其大要を簡約に書きなほしたるものなれば源氏を讀む手引として甚だ便利なり文章も雅馴、重寶とすべし（定價二十錢神田富山房發兌）

抒情文

文學士　沼波瓊音先生選



天

○歸省の前夜

三河　ふさ枝

ランプを吹消して床に入ると、恰度一時が鳴つた、夜も短かい此頃の事とて、日の出る迄にもう四時間とはない、明くれば一番の下りて、妾は三年振て故郷に歸るのである。

長い間お世話になつた先生を始め、お友達の許へもお暇乞に出たし、荷物は纒めてあり、土産物も調へてあるから、大方もう仕殘した事はなからう、俥も頼んであるのだから、起きてほつれ毛を搔きあげさへすれば、直ぐにも行かれる。

愼子樣、啓子樣、悦子樣は、御親切にも新橋迄お見送り下さるさうな、ほんにあの方達はお羨ましい、猶都にお留りなすつて、上の學校へお入りなさるとの事、妾もお父樣か兄樣でもあつたなら……否、そんな事は思ふまい、思つたとて何にならう、身に授つた程の運に安心して、働けるだけ樂しく働けば、それで妾の務は濟むのである。けれども、明日お別れしたら、御寫眞ならでは恐らくまたお目に掛る折もあるまい、逢ふが別れの始めとは、聞いて居ないでもなかつたが……。

三年同胞のやうに睦びあつたのに、明日は愈々、同じ梢の葉が野分にばら〳〵と散るやうに別れ〳〵になつて了はねばならぬのか。あゝ、お名殘惜しい、一葉さんのゆく雲とかいふ小說にもある通り、別れて居れば忘るゝともなく忘るゝが人の常、去る者日々に疎しとさへ謂へば、あの、美しく暖かであつた交りも、何時となく虹の輪の薄るゝやうに、冷めて了ふのであらう!?

別れると言へば、ほんに此部屋も明日が見納め、こゝも三年の故鄕なり、去らばどんなに戀しからう、自炊に疊を汚して、おかみさんに叱言を言はれたのもこゝである、友達と行末を語つて樂しんだのもこゝである、過ぐれば稻妻の疾きものであるが、三年は可成に長い月日であつた、其間、机に向つて勉强しながら未來の樂しさに胸を躍らした事や、旅の悲しさに夜半の枕に涙を落した事や、あゝ、今から思へば皆夢のやう、

西向の窓に凭り、夕日の空を望んで、お母様を慕ひ、故郷を懐しみ、翼あらばと身を悶えて、幾度となく人知れず泣いた事など考へれば、更に〳〵淡き夢の心地がする。

こんな身でも、一人限の子、お母様はどんなに待つていらつしやるのであらう、程度の低い某學校を出たばかり、錦を飾るなんぞとは固より思ひも寄らぬが、小いながら免状もあり、殊に無事な顔をお目にかけたらどんなにお喜びなさるのであらう、あゝ、其お顔が見える！早くお話がしたいこと！妾が家を出る時、お母様はお笑ひながら、お前がお歸りの時は、好きな鮎の御馳走して待つてるよッて、そつと涙を拭きなすつたッけが、ほんにお忘れなさらずに御支度して待つてゐらつしやるかも知れない。けれども、もう餘程お年が寄つたのであらう、お髪だつて、白いのがまじつたかも知れない、お一人で長い間、寂しいお暮しをなすつたのだもの、ほんとにお氣の毒な、是からは思ふ様大事にしてあげねばならない。

門の紫陽花は色も褪せたらうが、裏の百合は未だ床しく匂うて居るのであらう、妾が植ゑて置いた桃も、今年は實がなつたとの事だから、妾よりも高くなつて居るかも知れない、妾が去年病氣した時、お母様が跣足詣をなされたといふ、鎮守の森はもう眞暗い程青葉して、晝も不如歸が啼くのであらう、門の小川は、今も相變らずさら〳〵と玉を轉ばすやうな音に流れ、夜は星と紛ふ螢であらう。いとこの光ちやんは七歳におなりて、學校へ入つたつて言ふが、まあどんなに可愛くなつたか、あのリボンと繪本とをやつたらさぞお喜びだらう。親類の誰彼も皆健かだとの事だから、お迎ひに出てくれるかしら。それよりも村の人！一般の村人は、旅から歸る妾をどんな様子で迎へるのであらう、村から女が東京へ出て居るのは妾唯一人、生意氣だといふ人もあつたさうなが、矢張昔のやうに暖かに……屹度然うであらう。

お母様が其儘にして置くと仰つしやつたから、書齋は昔の通で、柱なんぞには未だ樂書が殘つて居よう、此室には別れるけれども、古巣は妾を待つて居る、こゝで寢るのも今夜限だが、其代り明日の今時分はお母様と枕を並べて居る、あゝ嬉しい、早く〳〵星が消えて、日が出ればよい、あ、今鳴つたのが二時、未だ二時間餘。長い間汽車に揺られるのだから、一寸でも眠つて置きたいけれど、妾は何うしても〳〵……。

〔評〕意到筆隨。

○車力の家庭　　尾張　香久子

七つ下りの琉球を布いた、六疊間の眞唯中に、ちよこ

んとお銚子が一本立つて、茶碗と箸が二人前、小さいコップが一つ、夫に半丁計りの奴豆腐と、糟味噌漬けの香の物が一皿。行水揚りの主人の助さんは、褞袢一枚で上坐に、あぐらをかいて渋團扇を使つてゐる。九尺の間口に、風鈴が下つて、軒下から蚊遣りの煙が細く、壁には様々の繪紙が行儀よく張られて、上の方には手製の額に貴顕の御肖像が掛つてゐる。中々小じんまりとした住居である。



姉上のスケッチ（選外）　尾張　吟翠女史

『お代や、明りを點けんなあとにして、まア此所へ坐つてお酌ウしねえか……』と云へば『あいよ』と輕く返事をして、妻君は助さんの前に坐つてお銚子を手にした。かうして夫婦仲よく一日の勞苦を世間噺の中に語り合ふのが、助さんの常である。ほろ醉ひの、助さんは、親切に蚊を追うて呉れる妻を相手に

『……昨日きいた安間の息子は、到當五千圓持ッて逃げたので、親爺様は心配して血眼んなッて方々を探してるとよ、負け惜みの様だが貧乏人が一番氣樂でいゝな、お代……』『ほんとさ、死んで錢かねえ持ッてくべえてなし、山十の旦那が妾ぇ持つたッて、あそこでも今日大騒ぎだッたよ、お前様でもお金があつたら男はみんなあゝだと思ッて、わたしア車力の女房んなッたのが仕合せだともッたのさ……』『今日様は有難え、一文なしの助六も三十何年病氣もしねえし、飢もしねえで、欲しいくと思つた子供も、もう二月たてば生れるし、あッはゝゝ』と笑ふ。お代は七月の大きなお腹で、毎日足袋縫ひの賃仕事をしてゐる。

あゝ、彼等の生涯は、仕事も、考も、飲食も、凡て深く、滿足と感謝とて充たされて……、羨しい程平和で……。

〔評〕氣の利きたる筆、但し寧ろ敘事文のものか。

○可愛いゝ憎らしい二人の孃ちやん

麻布　高島八重子

「靜枝ちやん、可愛いゝ」、又しても厭な春ちやん、可愛いゝ可愛いゝ而して憎らしい春ちやんが、折角今しがた机に向つた計りの私を引張つて行かうとする。見れば春霞の御召しに水色の帶を矢の字に結んでとき色のしごきをたらした、まあ美しい姿、うつとりと見とれると、バイオレットの香高い兩の振り袖て追ひ立てる様に……行かうか、よそうか、でも行きたいなあ、お隣りの妙ちやんは行く様子、だけどよそう、眼をつぶつて、耳を蔽つて眞黒な机にしがみ着いた私は、

春ちやんの落して行つた、八重櫻の簪を窓ごしに眺めて、其れて滿足した、もし滿足しなかッたならば私は大試驗をしくじつて了つたので有つた。憎らしい春ちやんが、月の世界へでも行つて了つたてあらうと思ふ此の頃、そろ〳〵夏ちやんがしたくにかゝッて居る、今朝も、きつとおつくり最中なんだよ、あの敷きつめた青疊の上に、おしろいの雫が一滴、二滴、こぼれて居た。あゝ此んな事を言ッてる間に、直に來て、例の御自慢の、美しい涼しい團扇てあふいて呉れて……又私を白河のボートレースになんぞ連れ出されると、それこそ大變！夏ちやんは私の大好きな大好きな人だけれ共、矢ッ張り憎らしいわ。

春ちやんも夏ちやんも、私の親友だけれど、可愛いゝお友達だけれど、好きな人だけれど、あゝ私は憎からなければならないんだもの。

○おば様

石狩初子

月落ちて蟲の音繁き秋の夜は更けた。何となく寂しい夜半の唯ひとつの慰藉ともなる詩集の愛讀にも倦んて、母上逝きまして、同胞なき身のつゝみ得ぬまでの愛慕の情はたゞひとりの叔母上のみ。

親とも慕ひ姉上ともかしづいて、永の月日をひとつ文机に文を讀み、枕を並べて安らかな夢を共にした昔が懐しうて。右手にかたく〳〵握りメて、あかず〳〵眺める其姿繪、寂然とした夜に何とはないつきせぬ思を心に語りつゝ瞶ると、弱い心のいつも忍び泣く姿に、限りない慰のお言葉洩た其御唇、涼しい御目もとなどのこぞと變て晴れ給はぬ面ざしの、さては雨に惱む海棠の花の様、まだ若い〳〵三つ上の叔母様、今年二十二の花ざかりを、人の妻と成たならば、此のやうに鬢るゝまで心に憂きふしの多いもので有うか？、叔母様は日頃から快活で僅か斗りな事のもつれなども、笑つて流し給ふ程にお心だてのすが〳〵しい其のお方が……。

きのふの御文に叔父様の御いたつきも、日を追て益々募りゆき給ふとやら、噫叔母様のお胸のうちはそも怎麼て被在るだらう、夫にあの……お母様が……叔母様は仰有らないけれど、嘸ぞ御氣むつかしからうものを。

「おば様、お辛いてせう……」思はず怪しい音を響せてなつかしいおうつし繪姿と斗りかい抱く打顫ふ手に、熱い滴り。

誰の思を傳るものか、庭の草むらに泣く蟋蟀の哀な其の音の、一しほ此胸にこたふるので。

○幸福か不幸か

岩代笑子

私は幸福でせうか不幸でせうか、親友のお京さんは、貴女は眞當に幸福な方ネと、被仰るのです。そりや、彼の方は三つの時父母に亡くなられたさうてすもの、それより見れば私は、兩親を二人宛持て居るのですから幸福かも知れませんが……。人は未だ乳を欲しがる四ッの折、父母の膝下を離れ、七人の姉妹に別れ

て此處へ養女となつた、私は幸福でせうか、不幸でせうか。母は血を分けた叔母ですが、生の父母は戀しいものです、血を分けた姉妹は、懷しいものです。母人に甘える友達の誰彼を羨ましがり、姉妹揃て行くのを見ては、羨ましく思た事は幾度でしたか……。他の方なら喜で飛び出す飴賣りのラッパの音も、私には涙の種で有ました、此の外乞食の憐氣な姿を見たり寢られぬ宵に尺八の音を聞いたりして、出來た小さい日記(野菊)は、折々本箱の隅から表はれます。併し年月の逝くのは遲くないもので、私が漸く小學を卒へた時、養父は彼の世の人となつたのです、愈々親一人子一人となつた私は、不幸でせうか、幸福でせうか、其後一しほ、母は私を杖と賴み、私は母を柱と賴んで此の年迄、家業に從事して來ました、私は、幸福でせうか、不幸でせうか……。

○唄の主　尾張　梶田愛子

妾が友の兄君、甚く呉服の御家業を嫌ひ給ひて東都の某私立大學に在するが、先つ日夏期休暇にて御歸省遊ばしぬ。

誠に御見外れ申程御變り遊ばせしよ、未だ御年も御二十一と申に美しい庇髪の御寫眞十四五枚と、優しい女文字にて愛とやらん戀とやらんの文字澤山の御玉章二束も御秘藏遊ばして妾が妹君の御部屋に居ると、いつも御持ち遊ばして、御品評に餘念も無い御無邪氣さ、折にふれたはむれたまふ餘韻がいつも御隣家迄も響くとぞ。

此頃も爽[illegible]の君と秘曲八重垣を温習つて居たら、諸聲に唄ふ美しい聲の何處よりともなく仄聞ゆるに、覺えず手を止めて耳を澄ませば、其は彼の君の御書齋よりなりけり。

かゝる君を當世の才子と申すにや。

○あゝ我れ郵便函　美作　孤[illegible]

夜は更け渡つて草木も眠りに就いたのかそよぐ音も聞えぬ、晝の間はさすが人の往來も多かつた街道も寂然として人影絶えて、只皎々たる月が大空に輝いて居るのみである、淋しさにつけても先づ思ひ起すのは我が身の上、つくゞゝと越し方を考へると去る年初めて此の辻に立てられてからは、如何なる雨の夜風の朝も休むことは出來ない、先づ新玉の年の始となると人は羽子よかるたよと長閑に遊ぶに引換へて、我れは一年の内でも此の一月が最も忙しいのである。

やがて垣根の雪も消え果てゝ花笑ひ鳥歌ふ時ともなると、老若男女貴賤をとはず此處の堤に彼處の山にとうかれ遊ぶも、我れは花の衣ならぬ墨染の衣を着て同じく此辻で往交ふ人を見てゐるばかり！春も過ぎ夏となれば苦しさは一通りではない、荒金の土さへ裂ける樣な夏の日人は瀧よ海邊よと涼を逐ふも、一日やすらふことさへ叶はず終日嚴しい日光にさらされつゝ勤めるのである、秋は夏と違つて暮しよいが草叢にすだく虫の聲いとあはれに月白う照る夕などは實に淋しさに堪

へられない、それから霜月ともなると木枯が吹きすさんでだん／＼寒さが烈しうなる、晝の間はまだよいが夜になると淋しさやら寒さやらで堪らない、耳にするものとては、遠寺の鐘犬の遠ぼえのみである、折しも雪を冒して高く呼びつゝ通りかゝる辻うら賣りの乙女がこれも我が身と同じくあはれの身の上でかゝる夜をもいとはで賣りあるくのかと思ふとまことにあはれで夜毎に袖をぬらした、人影たえた此の辻をかへり見勝に歩み行く姿を見ればさすがになつかしくてかくさゆる夜の二なき友と思うて居た。

あゝ實に過ぎ越し方を顧れば苦しみ多くて樂しみの少ないまことに哀れな身の上である、我れ昔深山の奥に住まひし頃は枝さへ葉さへ生ひしげりさへづる鳥の塒ともなり高嶺の月や谷川の水の音など自然の美を友として樂しう月日を送つて居たに、今は月花を他そに羨む身となりはてしよの悲しさ我れを塒とせし小鳥今はそも何處の空に翔るか、我が斯くはかない身となつて居るを知らぬてあらうか知ゝならばきつと尋ねてせめて一言慰めて呉れるてあらうに、など思ひ續けて居ると晝の勞れの催して何時の間にやら眠りに就いた程なく我が側に何物か來て聲慘しう「函よ其の歎き理なり雨の夜半霜の朝は云ふまでもなく三伏の夏の日も務め怠らで働く樣の殊勝ささはれよく思へ汝が誠心は人皆知る如何なる密事を認めし文をも憚りなく差入るゝならずや如何に苦しき務なりともかほど人に信ぜられ世に重んぜらるゝはうれしきことならずやさらば函よ何事も浮世と覺悟して廣く世の爲め人の爲め如何なる辛苦も忍べよや」折しも吹き來る涼風に端なくも目はさめた怪しさに邊りを見まはしても何の影も見えない、あゝ我が迷ひの雲は今の夢で醒めてしまつた何故我れは愚にも歎いたのであらうまことに夢の中の敎への通り世の爲め人の爲めには如何なる難苦も何の苦しいてとがあらうぞ、さるにても我れを敎へさとしたのは神てあらうか……。

空を仰げば有明の月山の端を照らし影は見えねどほとゝぎすの一聲。

◎美代ちやんの日記　岩代　丹治春見子

八月六日　月曜　天氣　晴

朝、喜美江さんと、野原へ散歩に行きました。

今御日樣が、漸く東山から離れた許り。明け殘つた半輪の淡い月影は、鎭守の森に傾いて居ます。

野原を見渡すと、澤山な草葉は、皆、水晶玉の樣な、綺麗な露を頂いて、ぴか／＼と光つて居ます。夕べ作つたくもの巣は、丁度、羽二重織を張り擴げたやう。彼方此方には、ききやう。かるかや。をみなへしなどが、さも涼しい樣に、朝露に浴びて、咲き亂れて居ます。暫く二人は恍惚として、眺めて居りましたが、喜美江さんは「あゝ！よい景色だこと」と叫びましたの、そしてゐる中、草葉の露の玉は、ほろり／＼ところげ落ちました。涼しい清らかな風は、そよ／＼と妾等の顔や袂を、

あゝまるで天國へでも行つたやう。

八月七日　火曜　天氣　晴

兄さんは、此間から御病氣で二階の一室に、寢て居なさるの！　お一人で、さぞ寂しいだらうと思つて、行つて見ると、兄さんは今、すや〳〵と樂しい夢を見て居なさる、そして時々にやり〳〵と微笑むの、枕許にある花瓶のあぢさゐは、哀れに萎れて居ますから、何か美しいお花を挿して上げようと思つて、足音を立てない樣に、靜かに二階を下りて、庭の花壇から、あふひ、千日草を折つて來て花瓶に差して上げましたら、少し物音が響いたのか、兄さんは目を醒しました、あッ惡るかつたと思つたけど仕方がありません、その中に兄さんは花瓶の花を見付けなされて『これア綺麗だ！　有りがたう』と御禮を申された、其時妾は、なんとなく嬉しかつた。

八月八日　水曜　天氣　曇

頭が痛いので朝から寢て居ましたら、おかあさんは、『どこ痛いの、澤山病いの、お醫者さんを賴むかい？お藥を飮むかい？』と大層にご心配されました。此時妾は妙な感にうたれました。

十一時頃少しよいので、起きて粥を食べました。晝から、秀ちやんと竹ちやんとが、遊びに來ましたけど仕方がないから、妾はお斷りしたの！。

八月九日　木曜　天氣　晴後雨

秀さんと、忠雄さんと、英さんと妾と、四人して葡萄棚の下で、まゝごとをして遊びました。あきてから、背戸の小川へ參りました。水が玻璃の樣に透つて見えるので、底の小石まで數へることが出來ますの、空の色や、雲の影や、柳や、白百合の淸き姿などが、水面に映つて、碎けたり、流れたりします。妾等は餘念もなう、汀に佇んで、白百合の花片や笹の舟などを流して遊んで居ましたら俄に空が曇つて雷が鳴つて來ましたので、あわてゝ家にかへつて來ました。



都の雨（選外）　本所　江原とり子

夜。芦澤先生の處に遊びに行つて、『ヂョージスチブンソン』の愉快なお話を聞きました。

○うつむく百合

松山　山脇幸子

朝からなさけない伯父樣のお言葉、なんぼ妾が御厄介になつて居るとは云へ、操をやぶれとは餘りなことよ、ア、猛夫樣さへ生きて居て下さつたら…．否々猛夫樣は國の爲めに立派な戰死、せめて御兩親さへ御健在な

れば：：思へば猛夫樣が御出征遊ばした時、無事の凱旋を祈らんとて、御兩親共伊勢へ御參詣遊ばされての歸り、海路を遠州沖まで來たとき、計らずも暴風雨の爲めに船は沈沒、御兩親まで儚ない御最後、剰へ此機に乘じて家扶のために財產は皆無にせられ、遂に伯父樣の御厄介になる事となつたが初の親切に引きかへて此頃のなさけないお言葉、けれどもどうして妾が伯父樣のお言葉に從ふ事が出來ようぞ、妾には猛夫と云ふ名譽ある夫があるのだ、それに遺子まで擧げて居るのに：：聞くさへもいやらしい再婚、なんぼ伯父樣に義理でせめられたつてどうして〱其樣な事が出來ようぞ、妾は敏雄を抱いたまゝ幸なき身の悲しさにあふれ出る淚を止めあへず、スヤ〱と寢て居る敏雄の頰にハラ〱と落した、敏はワッと泣き出した。

妾は敏雄の可憐な顏を見つめながらヒシと抱きしめて乳ふくませつゝ庭へ下りたが、フと目に入つた姬百合、籬の桐の下に、廣葉を傳うて落つる露に打たれつゝうつむいて居るあはれな姿、盛り過ぎて見るかげもない其姿を、容赦なく落つる雫に打たれつゝ、無限の恨を呑んで終焉を待つて居るさま、何たるあはれな風情であらうぞ、妾は自分の身に引きくらべて、同情の淚ををしみ得なかつた。

今障子を開けて椽側へ出た伯父樣「玉惠さん今日はお前を見に來ると云ふからお化粧をしてお出でよ」「エエ：：」妾は事の意外に身も魂も消えなん思ひ、思はず身を震はした。

敏雄は又ワッと、さつと吹く風に百合の露はハラ〱と亂れ散つた。

○あゝ美津ちやん：：：

仙臺　夏草女

ふたゝび主エスの下ります日、めさるゝをさなご御國にて。

み空の星とかゞやきつゝ、主のみかむりの玉とならん。

あゝ私は、此の讚美歌を聞くと、いつも、美津ちやんを思ひ出すのてす：：美津ちやん：：!! これは、私の親友の、美代さんの妹てす。美代さんも私も、美津ちやんは大好き：：！活潑な處にも、どことなく氣高く、やさしい處があつて、：：本當に春の女神のやうてした、あゝ：：お話するのも、淚の種てす。恰度去年の今頃、美津ちやんが七つの時：：！　一寸した感冒が元て、とう〱腦病になつたのてす、美津ちやんの家はクリスチャンてしたが、この四百二十三番の讚美歌は、美津ちやんの一番好きな歌：：て、眞白き寢臺の上に橫になつて、いつも歌つてるのてした、枕邊には讚美の本だの、基督の福音などが積んてあつて、讀んては、悅んて居るのてした「病氣に惡いから本をよむのはおよし」と始終お母さんが言ふのもきかないて、あまり書物を讀だのが、障つたのか、或夕方病氣危篤と云ふ、ドクトルの話てした。あゝ美津ちやん：：！

リンゴの樣な愛らしい頰の肉は、殺げて青白く、ばらの薔の如き唇は、紅失せて物悽く、愛くるしい切長の二側眼はとぢて開かず、私と美代さんは泣いて〳〵淚の盡きる程泣きました。すると美津ちやんは、パッチリ目を開いて不思議さうに、四方を見廻すのでした。おつかさんが「美津ちやん！妾だよおつかさんだよお分りかへ」と云ふと、美津ちやんは、ニッコリ笑つて、「あたし今臥るとネ、天使が奇麗な雲の上に乘つて、兩手擴げてあたしを、よんだのよ、あたし斯樣して坐られないわ、今天國へ行くのよ、あゝうれしい、あれ又、音樂の音が、……御母樣、御父樣、姉ちやん、夏子さん、お分れの讚美歌歌ひませう」とニッコリ笑を湛へて、四百二十三番を歌ひ乍ら、永久にねむつたのです。何といふ神々しい臨終でせう‼私早夜に天を仰ぐと、美津ちやんを思ひ出します。あゝ此塵の世をさけて、美津ちやんを、數多の天使とうち連れだつて天國の花園の中で樂しく音樂を奏てつゝ、下界を見下してるでせう。

○幸運

堺市 竹雙文子

村の叔母樣の家に寄宿して居る時であつた、ある夕ぐれ村をそゞろ歩いてふと野に出たが、幼い六つ七つ斗りの少女が「父ッちやん、父ッちやん」と嬉しさうに微笑んで駈けて行くので、振り向いて見るとチリンチリンと鈴の音を凉しさうに夕風になぶらせて五十位の男の頰冠りしたるが、氣昧好う肥えたる荷馬を引いて歸つて來る、「父ッちやん」少女は又呼んでその顏を見上げる樣につと手綱に手を掛けた。「おう、危ねいよ、お母ァはまだけえ」父は赧らんだ顏に笑を湛へて問うた。「あゝまだ」と答へて些と振り向いたと思ふと「止ッ止ッ」馬は大分疲れたらしい。自分は何となくこの父子の家庭が羨ましいやうな氣がして、家も餘り遠くあるまいと思つたのでその後に從つて行つた。もう日は暮れて月の光が淡う照らして居る。暫らくして馬とその父子は路を曲らんとした時、白い手拭を姉樣冠りに徽聲で唄をうたひ乍ら、後からは若い男が鋤鍬を肩に……。「おゝお歸り……とめもお迎へか」母であらう。「おゝッお前も今か……」「母アちやん」父子は答へた。「兄ちやん恐いよ」少女は母に駈け寄つた、「止ッ」と聲かけて親子四人は道を折れた。もつとその親子について行きたかつたが道が曲つたので自分はそれで歸路に着いた、けれども何うしても先きの光景が一の畫の樣に一つの詩の樣に胸に寫つて忘れられぬのである。眞に幸運なのは彼等の家庭であらう、あゝ美くしき家庭、幸運な家庭として自分は永久に忘れられぬ一つであらう。

○戀しき妹踏子　　　牛込　松江子

おくれじと思ふにしなぬわが身かな
ひとりや知らぬ道をゆくらん　道命

久方のみ空に浮ける白雲の行方も知らずたゆたふこそあはれなれ、あるは東にまた西に、思へば妾の運命にも似たるかな、嗚呼行く雲！春は南の暖きそよ風に送られ、霞たつやよひの花ともろ共に、樂し嬉しと皆人の歌に謳はれむ、さはれ夢の間、もの憂事のかずかずや、心悲しき秋風に吹き分けられて右左、思は四方に散り〳〵と彷ひめぐるぞ實に憂はしき限にこそ。

嗚呼思ふまじとは思へども思ひ出するゝは思ふにまさる思なりけり、妾が父君は世に悲しきめしひ、月雪花と浮かるゝ人の聲聞き給ふも御恨なる、母君は、いふも涙、妾九才の春の晩、まだやう〳〵に五才なる妹と共に捨てられて、また逢坂も此世には、嗚呼。

天地の間、杖とも柱とも頼むは、父上唯御一人、妾等二人の姉妹は泣ける涙の跡絶えず、かくても隙行く駒の足疾く、玆に數へて七歳よ、妾流れに水汲めば妹は野山に柴拾ひ、一人の父に仕へつゝ暮らし來ぬる哉。

噫、妹、かたみにたよりたよられて親子三人の此團欒笑も泣くも唯三人、鼎の足の我家を、など、など去りしいましの愛せし此家、この父、この姉を、など打捨てし。

露子よ、いましをかくも果敢なく散れよとては名付けざりしを、僅か三四の菫の花、美しく咲けよと眼に見え給はぬ父君も、育み給ひしものを、桐の一葉に訪づれし初秋風に果敢なくも葉末の露と碎けて消えしぞ

　すゑの露もとのしづくや世の中の
　　おくれさきだつ例なるらん　　顯　昭

浮世、塵に汚れしこの浮世、いましにはふさはじ、そを厭ひて天國はるかに逝しか、かくも汚れし世の中に、などいましの戀しき父君と妾とを殘しゝぞや、

つぶれば殘るいましの幻象、莞爾と笑めるその眉目妾に、父君に、心殘りのせられて、我家を訪ひに來しか、嗚呼なつかしき妹よ、人はいましを死にきといふ、さはれ妾はあらじと答ふ、いましの形骸はよし毀るとも、靈魂は永世に亡び消ゆる時はあらねば。

さはさりながら妹よ、逝にしいましの悲と殘れる妾の嘆きとは、何れ思の淺からむ、いましこの世に在りし時、かほど妾を愛せしに、唯悲しめと憂の世に、妾と父君とを殘しゝぞ、など諸共に伴はざりし、いまし天國の花の下に永世の快樂を樂しまん、神の御膝に安らけく眠るならん、さはれ下界に妾と父君と、長き生餘の悲嘆をかこたんに。

戀しき妹よ、世に唯一人なる妹よ、いましの花の吻は、妾此世にある間、遂に開く時なきか、姉よと一聲、唯一聲、漏らせ、妹よ

嗚呼しれはしの妹、いましを措きてまたと世に、姉妹の愛憐は、得べきすべなし、噫、悲しいかな。

　埋火のあたり長閑にはらからの
　　まどゐせし夜ぞ戀しかりけり　定　信

あゝまたこの樂しみも夢なりけり、現にはまた見んうもなし、たゞ形見に殘しゝいましの鏡のみ。

うつりけん昔の影や殘るとて
見るにおもひのますかゞみ哉　新少將

許せ妹よ、露子よ、妾の悲みはいましの悲、生くると死ぬるとに、別はあらじ、いとし妹、いましは永世に幸きかれ、まさきかれ、御空より遙かにいましのいとしき父君と妾とに、祝福を祈れかし、妾はあり難き、明治の大御代に、人と生れし、神の御恩を報ゐんため、大君の爲め、國の爲め、女の守る一道をいましの殘せしうつしゑを膚身放なたず、いだきつゝ、いでや進まん、戀しき妹よ、妾が天職を盡し果てゝ老にし後は、其時は、遙かに仰ぎ見る輝きの御國より迎に來給へかし、妾は父君の御手を取りて御伴を仕らむ、嗚呼、なつかしき、慕しき、戀しき、妹、露子よ、永世に幸きかれ、此契を夢な、忘れぞ、愛らしき妹！

いまし偲びて、堪えかねて、暮れゆく春のけふつもごりの夜、降る春雨にちる花の音、淋しう響く窓の下、いましの寫眞にさしむかひつゝ涙を水に筆とりて、泣くなくかくは　静江誌

○亡き友を思ふ　德島　坂野白露

軒端の風鈴頻りにひゞきて暑き夏の日も暮れ行けり、風は衣の裾をはらひていと心地よく蚊遣火の此所彼所に見えし時我が家より程近き、助任橋のおばしまに身を寄せたり。明月の登りてよりは夜の景色に一しほ趣きをそへ彼方の岡、曲る堤の松かげなど水に映りて、何となく身は塵深き世を離れて天國にさ迷ふの感ありて此美しき眺めに憧れたり、斯くて長き日の勞れも忘るれど此れに反してわれは忘るべからざる過去の思ひ其より此れと縺れ行きて心はさながら亂るゝ雲の如し、げに親しき初子の君と行く末を語り樂しみて友とヴアイオリンにて「荒城の月」を合奏したるはこぞの此夜なりき、さるに友は如何なる前世の業因にてか腦充血てふ恐ろしき病に罹かり晩れ行く秋虫の聲の絶ゆると共に冥路に旅立たれパラダイスに趣かれしなり、われは友の死の聲を聞きて終日泣き暮らし斷腸の念をなせしは今も尙記憶に留まりて月を愛で花にあこがれてはうたゝ亡き友戀ふる心にわれを忘れしことの多かるにぞ嗚呼亡き友は定めし此頃は苔むす下に蟬の聲、松風の音など聞き玉ふらん姉よ妹よと互に誓ひ手をとりし初子の君は歸らざらんか噫死なるものゝ恐ろしさ、われは思はず初子さんと口走りぬ。月高く登りてより夜はます〱靜かに更け行き綠葉洩るゝ翠の音は誰が月に憧がれの清奏か、何とも分かぬ清香は風のまに〱漂ひ來るなり、いつしか涙は袂を霑しぬ果敢なきは人

電車に乗りませう



（選外）名古屋　紋子

生にて生あれば死ありとはあゝされどされど、恨めしきは人生なり花散る夕風吹く晨時として亡き友を戀ふる心は消ゑやらで淺間しの世に立つ我が身…折から紡績の汽笛に不圖我れに歸れば卅子の川を下る櫓の音水に響きてかすかに聞ゆるのみ。

○貳錢

愛知 柳枝女史

町はほの暗き軒ランプの光に暮れぬ。妾は尾々ケ崎に散歩して歸りつゝありたるなり。忽ち十歩の後ろに、願ふが如き人の聲す。振返れば、電柱をはさんで兩人立てり。一人は卅四五、色青白く、脊高く、頬より顋にかけて、髯の痕青々と横はる男也。古き臺灣帽を横に冠り、絽の夏羽織を着、左手に赤皮の皮鞄を持ちたり。一人は四十前後、色黒く眼するどく、口唇厚き車夫躰の男也。木綿の白襦絆に同じ半股引をはき、素足に草鞋穿てり。暫して臺灣帽はつか〳〵と歩み出だせり車夫は額を拭きつゝ足早に從ひて、

『旦那もう貳錢やつてくんねい。』『臺灣帽振返りて立止まりぬ。』『もう二錢？己らあ貴樣に寄附する爲めに雇つたんじやあ無い。』『だが御約束丈け。』『約束通なら、彼錢ていゝんだ。』『があれじやあ八錢なんじやあ御座ゑましねい。』『八錢！其れていゝぢやあ無いか。』『御約束は十錢の筈て…。』『串談じやあ無い。』『確に。』『おけおけ雲助の二代記なんか有難くもねい。』『雲助…。』『ゆすつたつて多目だ。』『何！』車夫は進みよりて、『ゆすり？』『うむ分らんか、理由無しに金をねだるのをゆすり、と云ふんだ。』『誰れがゆすつた。』『とぼけるな、斯う見ても滿洲の土を踏んだ人間だ、ぐづ〳〵こくとたゞしちやあ置かんぞ。』『フン、貴樣が軍人なら俺武士だ。』『何を、車夫の癖に。』『車夫なら車夫ていゝ、其れて何だなー、貴樣は其の車夫をかたつて、二錢の金をちよろまかそうと言ふんだな。』『何！』『何じやあ無い、かたりとは貴樣のこつた。』『雜言を吐くか簓棒奴。』『願ふなら相手に成らねこともない。』『猿。』臺灣帽はムツと車夫の胸を捕えぬ『しやれをしろぐな。』手强くつかれてよろめきながら、

『猿!!!』

再び躍り來る手をつかみて車夫は、

『猿！がちいとあきれらア、簓棒奴、貴樣の樣にな、軍人軍人と軍人を棒に振つて、明治の世の中がやつて行ける位なら、鎧を變へて洋服にしやアしねい、武士を廢する必要は無い筈だ。軍人なら軍人らしくしろげ、車夫の錢をちよろまかすのか君に忠か、人をかたるのが國の爲めか、一寸はたしなみやアがれ。』

一人止まり、二人止まり、今や堵の如き人は兩人を閭みて街頭を塞げり。

忽ち某警察署の提灯ハヲ〳〵と高く搖れて、人波右手の方に崩づるゝと思へば、物思はしげに梶棒をとれる車夫、巡査の後に、とぼ〳〵とつき從へるが見えぬ。群衆は只どよめき、立ちて見送る有り、後へにつきて歩む有り、腕車の塗青く街々の灯に照らされて、轍の音淋しう聞えぬ。

文學士 沼波瓊音先生選



天

○京の戀

下野國小山町神島谷 新井琴子

繪師は若かりき。

小さけれど美しき京は、朱欄金柱の堂塔、彫刻の精巧なる、流石に古き木匠が靈こめしとて、鉋の韻に響ある清水、友禪の曙めきし朝を清き流は太古の唇くりかへして、花影に咽ぶ鴨の川、蒲團着て寢た東山のたゞずまひ、綠の衣打被ぎて微笑む優姿、さながら光琳の蒔繪に似たる地に生ひ立ちたれば、色白く姿優しう、公達めきし雅男なりき。

繪師は戀したりき。

浪華は淀の川ぞひに、床しき館しつらひて住める、納言の大臣が愛姬、雲の鬢、霞の生際、玉の眸、花の唇容色の美しさ云はずもがな。生花は遠州とや、琴は山田の名手、舞も極て堪能の聞え高く、身を飜して霓裳羽衣の曲をなせば、金の小扇風に舞ひ、七色の大和舞衣かゞやかに、催馬樂唱ふ風流はさらなり、香茶の道も淺からず、殊に丹青の道にはいたくも心をひそめ給ふとぞ聞く。

繪師の名高きをなつかしみ、姬は花鳥を美しう繪絹にそめて、花はずかしの二八乙女(姬が侍女、名は楓)にもたせて、繪師がり訪れさせぬ。

繪美しく、主の心はみやびやかなりと、繪師はいたくも心動かして見ぬ戀に憧憬れぬ。想像のまゝ筆とりて姬の姿かきて返しけるに、いたくも姬に似たればとて、姬は又しても歌一つ記いておこせ給ひぬ。

繪師の胸には熱き〳〵血潮湧き出てゝ、いたくも狂ほしうなりたれど、さりとて位高き姬に……あゝ繪師は見ぬ戀にあくがれて病めりとよ。

姬は繪師を愛したりき。

さはれ戀ならざれば、いつも〳〵繪師の胸を焦さしむるのみにて、はては玉の緖の絕えなば絕えよとばかり繪師の歎きし宵も多かりしとか。

楓は繪師に戀したりき。うちかけにはもゆる血もて

そめたるか紅葉の色鮮かに、流水をあしらひ、文金の高髷、平打金簪、留奇木の香り床しく、文使の折は一しほ化粧の裝ひを凝らし誰に見よとの嬌態ぞ！繪師は思はじの戀に惱み、楓は姫戀ふる人に戀せしをはかなみぬ。

月清き鴨河の夕、京は四條の橋の下に、虫の音の悲さを胸に秘めて、限なの苦愁を永久に葬るべく、繪師は繪筆繪皿をなげすて、、其身も七草の茂みを分け、水晶溶かせし如き水の中に躍り入りぬ。

美しき戀を胸にして神の御手に逝きし繪師の肉躰はしばし〻て優しき笑みを含みて浮上りしに、又してもーの死躰は三條あたりより流れ來て、浮きつ沈みつ。戀せられし姫は繪師の情を知らで、世の噂する鴉の心中を信じ居給ひぬ。早う楓の我に告げなば、二人の戀を叶ひ得させむものをと、深き憂に沈みて、思出多ければとて繪筆焚きすて、琴の緒切り、有髮の尼と行ひすまして、朝夕の看經おろそかならざりき。さりとて繪師の本意ならざらましを。

（評）地も美し人も美しその赤心も美しく死せるも生けるも共に美し浪影の畫卷物を見るこゝちす。

○凱旋

周防 岡部佐保子

黒雲が固つて落ちたかと疑ふ様な大岩を回ると、黒苔に埋つた石地藏が、獨淋しさうに眠つて居る、此峠の絶頂に來る。

春とは云へど、唯昨日まで所々に雪の見えた此の山奥、まして夜の寒さ淋しさは、陳々として骨にもしみ入るが樣、而て、唯どう〳〵と遠雷を聞く様な阿武隈川の不斷の叫喚は、夜の更け行くまゝにいとゞ増してあゝ悲哀とも悽絶とも……。それに、眞黒に生ひ茂つた鋒杉の森は、或は恐ろしい魔神が、冷たい死の手を擴げて、よき餌もがなと待つて居るかの樣にも思はれて、何とも分らず、唯みしり〳〵、譬へば饑ゑて疲れた一の大熊が、一歩々々我身に近寄る樣な、極めて物淋しい音がする。

怪し！、萬物皆死んだ此陰に、唯一人の軍人が立つて居た！。病に疲かれて重々しい體を、やそら一本の杖にゆだねて、譬へば深海の底に沈んだ貴き玉が、夜な〳〵青く凄く輝く樣な兩の眼は、强ら南の方に注がれて居る。十日餘りの寂しい霞んだ月は、今西山の一角に傾いて、最後の薄紅い光は、白い雲の縁を取つた。

暫くすると彼は沈む樣な溜息と共に、どつさり草の上に座して了つて、又起きようともしない。あゝ、畫ならば、饑に疲れた貧兒、死に迫つた老

が、悲鳴叫喚を擧げて狂ひ走るもあらう、又た山のに彼處の森此處の丘に疎木は切られ、野の草は枯れて、殘つたあばら屋も、柱は傾き屋根は落ちて、目も當てられぬ悲慘の狀も目撃するてあらう、此の一帶の地も怪しや、靜かな夜の帷幕に包れては、天も地も野も山も、凍つて固つて唯寂寥の一塊に、化し去られたかと疑ふ樣な、其靜けさ其寂しさ！。

彼は再び眼を開いて、靜かに起つて、而ていた〳〵しい足を引ずりながら、闇を分けて森の奥へ辿らうとするのである。

思へば、あゝ幾歲、石を枕の露營の夢に、如何に彼は故國の事を思つたてあらう、父母は健全か、妻子は無事か、出征して間もなくふつゝり文通の絕えたのは我身を安心してか、將た生業の忙しさにか、等と吹雪に包まれての夜の進軍にも、或はびた〳〵濕つたきび穀を燒いては飯を炊く其間にも、心は常に母國の空にさ迷ひ、指を屈へては樂しい凱旋の日を待つて居た彼は圖らずも野戰病院に送り返された其日、國から着いた新聞の片端に、恐るべき文字を見出して以來病は頓に重くなつて、死なば共にと互に契つた戰友は皆故鄉へ錦を飾つた今日今宵、彼は身に譽ある勳功を輝やかし作ら、歡呼の聲に送られた此の峠を、今孤影淋しく歸つて來たのである。

豐年（選外）　輕津　古結とき子



＊　＊　＊　＊　＊　＊

此處を北へ畧半里、滔々として千古の恨を叫び行く阿武隈川の畔、そこには昔彼が涙ながら微笑んで袂を分つた、老夫婦の家がある。然し雨の朝風の夕、よく健やかに水馴棹を取つた彼の老翁は、今も尚健やかに居るてあらうか！。

夜は深々と更けて行く……。

(評) 堅忍なる凱旋。

○女優　麹町 柴崎富美子

霜に痛まず、色褪せず、其香いよ〳〵高く澄みて獨り咲き誇る白菊にも似たるは女優守住月華にあらずや。身をお狂言師時代に起して、今日まで變遷極まりなき劇界に棲みつゝ、百敗屈せず豪氣撓まず、舊劇に、新劇に、其縦横の腕を揮うて絶妙の技を擅にし、新派専門の青年を壓凌ぐもの、素より久しき素養に因ると雖も、しかも彼が一際勝れたる熱心勇氣の致す所たるや斷じて疑ふ可らず。彼にして悠々進歩の心なくば、何を苦しんで他派に走り其老たる身を勞すべきや、勞せざるのみならず、疾くに己が勝れたる技倆を恃み、是に誇り是に滿足して身の安樂を貪るべきなり、斯くては技、只數十年の熟練に依りてのみ聊か見る處あるべきも遂に普通女優と異る無くして終るべし、流石に着眼尋常ならざる彼は時機を見、手練の術を應用して時に九女八を懐中に秘めつゝ、泰然守住と成るを惜しまず、卒先して新派に加はる、是れ實に容易ならず、若しひと度失敗あらんか返す可らざる藝術上のなやみは、終世双肩にかゝりてたやすく免る能はざるなり、機敏なる彼の始めより其決心無からずや。此れ有て能く斷行して働らく者即ち我れの彼れをいふ所以にして九女八の九女八たる生命なり。繰り返す。腕には素養あり心に抱負あり理に見識あり、七十の高齢なほ安逸を歡ばず、纖弱なる女性の餘命幾何もなき身をいよ〳〵勉むる不斷の勇氣は實に一般藝術家の永き記臆を價すべく、分けて後進女優の絶好摸範たるべし。

(評) 余ひそかに思ふ九女八は現代劇壇に於てたゞ女優のみの泰斗にあらざるを。

○小供の一時間　鹿兒島 柳 子

今日は裁縫でもしようと、思つて南に向ひて居る、六疊の座敷に、仕事を選んだ。小さい庭を隔だてた向ふは、畑である。今しも菜の花がきれいに咲いて、蝶はかろくまひ、日は長閑に照してゐる。今しもこゝに來た秀雄は、「姉ちやん」といつた。‖秀雄は今年六つで顔の白い目の圓い、口のしまつた子供で、私の甥である‖。「なに」、「あのね時計の針が上の方に行つたから、ご飯やね姉ちやん」、ともつてきたおもちやの汽車を、なぶりながらいつた。「まだ少しはなれてゐるでせう、もう一度まはると、こんどはご飯だからね」、「さう」と、もぢ〳〵してゐたが、おもちやを示しながら、「姉ちやん汽車つて石炭をもやして行くの」、「さうですよ」、

「どこへ入れるの」、「其煙出しの下の方へ入れるのよ」、「それじや僕あけて見るからね」、「それはおもちやだから石炭ははいつてゐないよ、其紐を引て行く汽車だからね」、「ほんたうの汽車の樣に、見せるためにつけたの」、「さう‖なんて煙り出しこしらへてあるだよ」、「さう」とやつとわかつたと見えて庭に出た。「ねえちやん〳〵、かたつむりがゐたよ、小供のかたつむりが」と、しばらく經つてから、ゑんにかけてきた。「それどこにゐたの」、「あのね笹の葉の中にゐたのよ」、「かあちやんの邪魔になると、思うてはいつたのだらうね」、「さうでせうよ」、「姉ちやん、かたつむりつて手も足もないのに、どうして笹の中に、はいる事出來たのだらう」、あまりのをかしさに、私も笑ひました。しばらくたつて、「あらかたつむり、どこかへ行つたよ、‖僕の邪魔になると思うてやらうね」、「さうでせうよ」、「かたつむりつてえらいね」、「さうだけれど僕にだまつて、行くつていかん」と、いひつゝ庭に出た。私は裁縫をはじめた。ものさしが、どうしても見つからない、どうしたのだらうと、顏を上ると、ちらちらと櫻の花のちる菜畑で、これをもつて遊んでゐた。しばらく見てゐると、菜の花をむしつたり、草をそれでたゝいたり、又それ等をほつて、小蝶をおつかけたりして居た。

「秀ちやん」と小供らしい、聲がした。まもなく「姉ちやん辰ちやんのお家へ、行つてもいゝてせう」と、かけてきた、「あゝいつていらつしやいよ」と、いふかいはない中に夫をなげてかけ出した。私は無言で後姿を見送つた。姉が晝飯を報じた故、裁縫を止めて茶の間にいつた。まだ秀ちやんは歸らないのかしら、とおもつてゐる所に、足音がきこえて、「ねえちやん只今」といひながら、はいつてきた。頰は林檎の樣、ひたひには、汗まで出して。「なにをして遊んでゐたの」、と、いふ中、十二時が鳴つた。

（評）無暗にいろんな事を聞きたがる小兒の癖を直寫して讀者をして微笑ましむ。

○ステーション

近江　宇野民子

こゝはステイション壹等待合室の一隅てある。西行きの列車は今着いたらしい、改札口が開くや否や我先きと押入る押出づる客、プラットホームを走り行く音、階段を昇降する音。

プラットホームの方が靜かになると、待合室の方は一時に水を打つたやう、後に殘るは自分と同じく次の列車を待つ、若紳士の一團に、學生の二人連一人の商人躰の男は早や鼾をかいて居る。

間もなく瀛笛一聲、汽車は西に走り去つた。

徐に室を見廻はすに、建物こそ古けれ、東京を西に切つて、稀の大停車場といへるも宜べ、廣さは彼れ此れ三十坪もあらう、それに薄暗い電燈が二つ、腰掛けの壞れ損じたのが此處に並べられ、蜜柑の皮、煙草の殼、

紙屑竹の皮など散亂して居るのみ、一つの暖爐もない、外は弦月の淋しさうに、人力車の影も見えない、人の減るに從て冷さは益々迫る樣だ。

すると赤帽が廻て來て手にハンケチを高く示しながら「誰か、ハンケチを落した御方はありませんか」と注意して出入口の戸を閉めて行つた。

赤毛布出て行き、兵士入り來り、今は一室に殘るもの四人、大抵腰掛に寐轉んで、折々わざとらしい唸きを漏らす者もある。

「ガタン、ガタ〳〵、ストン」

突然隣りの室で大きな響きがした、何か一大騷動が始まつたらしい、續いて、

「七百五十八、横濱、吉田」「エト、ソレカラ、七十二、伊東運送店」――などゝ頻りに呼び立てる聲がする、これは荷物取扱の一室、今配達の手分けをして居るのだ、先に出て行つた赤毛布の一隊が上機嫌で歸て來たが、直ぐ寐てしまつた。

自分は靴をはいて居る故か、指の先が頻りに冷えて、寐ようとしても寐付けない、發車の時刻まで未だ四時間餘ある。

あゝ長時間を只一人如何して過さうか。

夜は彼此二時、窓のガラス板には、今霰が降て居るらしい――。

（評）奇爽想ふべし。

○湘南紀行（二日目）

埼玉　荻島かすみ

江の島は見たし、鎌倉は見たしと久しく前より志せし妾は、今二人の友と、綸の如き江の島を前に眺めぬ。時は四月の中旬、長き棧橋は虹の如くに架せられたり、浪はむつくりとふくらみ來り遂に雪山の崩るゝが如く、橋を齒み滔々としては去る、そを渡りて數知れぬ石段を登り、御社を拜して西南の一隅に出づ、雨しめやかに降り出でたり、山も見えず、里も見えず、たゞ荒浪の岩に激する轟々たる響を聞くのみ、あゝ今日しも晴天ならば、富士の高嶽遙かなるも、烏帽子巖の波間に浮ぶ樣も、大磯小磯の浦々も一眸の内に眺むべきに、急なる石段を降り危き棧橋打ち渡り、岩窟の辨才天を見る、怒濤窟中の岩を呑み吐いては去るその恐ろしさいはんかたなし、道に稚兒ケ淵を望む、百雷の響を以て寄せては碎くる大波小波、その昔を尋ぬれば、盤渦せる碧潭、嗚咽せる松濤一として悲哀の恨を存せざらむ、やがて惠比壽屋に投じぬ、食後の散歩にと外に出づれば、嬉しや雨は名殘なく晴れ渡れり。

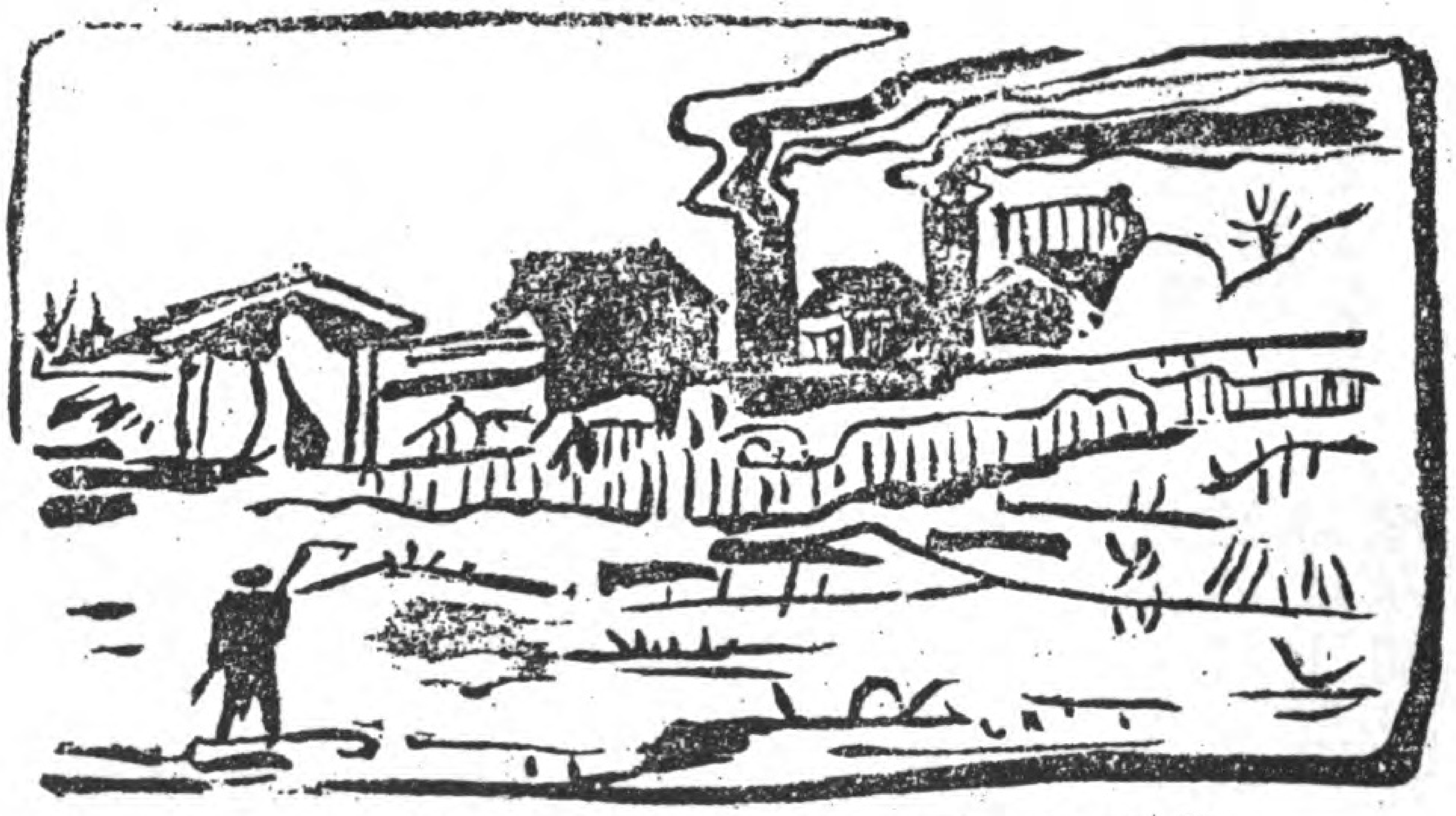
幾度か同じ貝屋に入り名物の貝細工、あれもこれもと家づとに買ひ求めぬ、折ふし西洋人の貝具求めむとゝ

て語通ぜず困じ居たるを、一行の露子の君通辯氣取りしも詮なくしてをかし、宿に歸ればまづ欄によりて海の面を見やりぬ、やがて櫓の音ほのかに聞えて、遠近のいさり火かすかに見ゆる程に、月は鎌倉山のあたりにさし昇りぬ。共に湧き來る高潮は、寄せて、捲きて、碎けて、散りて、黄金の波となり、白金の浪となり、眞珠の濤となり、錦綉の瀾となり、雄大玄深なる、天樂を奏す、皆々いと興ずる程に、靜枝の君のハーモニカとり出してふきすさぶに、共に歌ふ水上の曲、或は高く、或は低く、……海面に漲らす金波銀波、あゝ得たりや得たり、江の島の月、山水の美、さては自然の妙。

（評）首段雄渾。

○秋の午後　石見　神の子

何といふ美くしい眺めだらう。右も左も見上ぐる程の峯が聳えて、其間を衣川が流れて居る。秋の末であれば、水は痩せて大半あらはになつてゐる河原の、磊々たる石の間を、淋しい音をたてゝ急いでゆく。常磐木に交つてゐる櫟、櫨、栗、銀杏などが黄、淺黄、紅、色こそ異なれ、何れも秋の心を見せて倒に水に映つてゐる。眼を拭いて眺むれば、流は毀れかゝつた板橋や、土橋の下をくゞり、村を縫ひ、野を去り、うねりうねつて、末は遠く／＼見えなくなつてゐる。其先きには殿様山、海重山ずつと續いて石見富士が濃く淡く藍色に染まつて、碧空を限つてゐる。廣い平地の上には、こゝに一村、かしこに、村散らばつて、藁屋根、白壁、赤い鳥居、寺の御堂などが森越に見える。畑に耕す村人は手にとるやうだ。水車の軋る音、牛の聲、たゞしは人々の興をやる野良歌が混じ合つて聞える。それが四邊の靜かな村―晩秋の暖かな午後の日影がさして居る村々から起るのであるから、誠に長閑に、面白く感ぜらるゝ。右手に美くしい谷越に聳ゆる古城山の裾を畠は傾斜になつてゐる山腹に、一段々々と層を造つてゐる。稻塚は蜜蜂の巣を据えたやうに、あちこちに散在して、雀はその周圍に



精米所（郊外）　紀伊　保田みゆき

噪ぎ合ふ。道は此島の間を通つてゐるのである。塵の多いこの道を、白手拭を冠つた村の乙女が、三四頭の牛馬を、一人で手綱もとらず、靜に驅つて行く。

（評）[illegible]。

○妾の庭　[illegible]きく子

つくりなす自然の築山、庭の面遠く眺むれば高き低き若葉青葉の影濃かなる翠の小岡を見下し其山脚の盡くる處は碧潮洗ふ巉巖となりて寄せては返す男波女波の潮の泡沫花と咲く、遙けき海の彼方は飯島の影淡く雲とまがひて白帆の見えかくれする樣畫の如し。妾が庵は野間岳の中ふところ薪拾ふ賤の女の茅屋にはあなれども庭の雄大なる眺めは四時にかはらず四方を眺むればいづちも同じ新緑の影若葉の匂ひ詩人住みまさばさぞや名だたる作ものし給ふらん。されど妾は呱々の聲を擧げし初めより此の自然の懐に抱かれしもの、なれし目には海の美、山の美、物嬉しうも感ぜず只折々にかはる月雪花の眺めこそこよなう樂しけれ。さる日の事なりき、妾は夏着の裁縫にも倦みてければしばし庭の面打ち眺めぬ、手水鉢のほとり今を盛りに燃えんばかりのつゝじの麗はしさ白き蝴蝶の何處よりか來にけん花に入りては出でつ舞ひ狂ふ、彼方の垣根夏草の茂みの上に白き蝶の舞ふに瞳轉ずればあなゆかし淸く靜く天の女神の如き白百合の咲き出てつるなりなつかしくそと庭に下りて花の下に立ち寄ればげに淸楚なる理想の花よ!!つく〴〵打ち眺むれば淸けき匂ゑならずゆかし、花近く寄れば俄かに飛び出る白羽の蝶!あゝ妾は罪犯しけるよ穢なき花の臺にうまゐして花の香に醉ひし汝のあたゝかき夢驚かしゝはげに妾なりしよされど蝴蝶よ妾を露怨み給ふな妾はねたくて御身を覺せしにあらざれば……あなおぞましや。二つの胡蝶は白百合の花去りがてに飛びつ舞ひつ上に下に醉ひては狂ふ。折柄青葉の蔭より老鶯の聲澄みて山家の寂寞を破りぬ

（評）綺麗。

○野の秋　羽後　櫻花女史

ぽか〳〵となま暖い秋の日の光を、背一ぱいに浴びて妹の君ちやんを片手に、自分はあてもなく家を出た。時は丁度三時下りの淡藍の色の、今にもこぼれさうな澄み切つた青空には、塵ほどの雲の影もみえず、蟲はあか〳〵と海向寺の鐘樓からかけて野面を一面に照らしてはゐるものゝ、追がに秋の氣色はあらそはれぬもので、鬢の零れ毛を嬲る風が唯何となく淸々しい。山居の裏へ來たら、彼の懐かしい鳥海山が目に

入った。いつもながら秀麗なる山の姿は天外に巍然と聳えて居て、それにさながら化粧でもしたかの樣、初雪を戴いて、茜さす日の光にキラ〳〵と輝いて薄紅色に匂ふ櫻の花びらの樣。「あゝ美しい！鳥海山の初雪」

自分は我知らず、恁う叫んだ。

千萬頃の田畝といへば誇大に失するが、稻や粟は重ざうに、金色の穗を風にゆらめかして、大根や枝豆が、皮も張りさけん許りに、肥え太つて中に頻りと働いて居る三人の女、右は母らしく、中央は桃色の襷をかけた銀杏返しの娘で、左側は大丸髷、それは大方お嫁さんなのであらう、何か樂しげに語り合ひつゝ時々思ひ出した樣な高笑である。

其後から喰へ煙草の頬冠爺さんが、束ね置かれた稻や大根を車に積んで行く

こんもりと茂つた竹藪の南では、血氣盛りの若者が玉なす汗を拭ひながら田を打つて居る。振り上げる度に農具の鐵がピカ〳〵と日光を反射するので、餌を拾つて居つた鷄が怪しげに首をかしげて眺めて居る。妾は此自然の大活畵を都人に見せたら……と興じながら暫時行くと向ふの木の上に小鳥がチヨコ〳〵啼いて居て、靜かな小川が其の下をも流れて行くのである。草のしげみから飛んでいつた、鶺鴒の方に目を放つと肥えたる馬の水飼ふ邊に、朽ちながらギー〳〵廻はつて居る水車へ散る紅葉の一ひら二ひら。嗚呼なんと云ふ趣味深き眺めであらう、まるで一篇の詩ではあるまいか、誠に秋の風色はいひやうのない程、詩情を覺ゆるものである秋の神の私話は、眞に詩人の胸に響き渡るのではあるまいか、げに詩人は秋に於て殊に田園の秋に於て、最も其感想を深めるのである。妾は、もう秋の神の肺腑の精神を打込んで、我なる一箇小體を沒却してしまつたやう。

ふと氣がついて見ると、いつの間にか野原に來てゐてパット秋の夕日が淡く映つた草花畑、やさしい野菊、色のよい桔梗、愛らしい雁來紅、氣高い白芙蓉さては尾花や小萩がみんなそれ〳〵美の神の裳を綾どるかの樣に咲き亂れて居る。餘り遲くなつてはと思うて、自分は君ちやんを呼んだ。「君ちやん最う歸りませうよ、遲くなるとお母さんが心配するから」「さうね、もう暮れるから」と君ちやんは來た、手にせしものは艶の好い桔梗と小萩……。

酒田街道へ出たら、いつの間にか日は山陰に隱れて、夕風が夢の樣な白靄をつれて來たかと思ふと二分、三分、野原の全面はみる〳〵うち町傍れの白壁も忽ち薄れかゝり畊に急ぐ鳥も見へぬので驚ろいて歸路についた。共に〳〵他愛もない話しに打興じつゝ……。

（評）縱橫自在の筆。

○月夜の古城が岡　福島　小川なみ子

古城斜めに月おちて、つはものどもが夢のあと。白き髑髏に花さきて、木かげに寂し鵂鶹の聲。頽れし石垣に苔蒸して、玉とちりばむ草葉の露も偉人の涙とし思はれ、鷲の翼にひとしき老樹に、怪鳥の叫びを聞きてさへ、そゞろ疇昔みの榮華を偲ばるゝ古城が岡に、ある運命に慰めを持たぬ妾しは、寸時たりとも眞實しづかな天地を送りたいと、月のある夜、塵俗の巷を逭れて、この古城が岡に、夏の美しい、涼しい月を眺めた。

ッヒ下に見る權勢に誇る大厦高樓も、建ちつゞく幾千の棟も、營利の奔命に疲れて齷齪と巷を織る車馬の喧しさも、是れには何かの囁きがあらうと思はるゝ、脚もとにひゞく工場の鐵槌の音も、遠くの森も山も、あらゆる總てのものが、今はたゞこの藹然りとした、悠やかな光りに照らされて、詩化された。

仰げば瑠璃の穹窿に、希望の星燦めきて、顧眄へればかなた水や空、際涯しもなき大海原、一としきり烈しう寄する怒濤の凄まじう、晴碧の巨巖に碎けては散りしく潮の花、微妙の音をもちし梢をわたる松風。ちよいとした事にも氣にかゝる妾しも、この崇高なる自然の樂の音に、胸にある雜念を、いつしかこゝに洗はれた。

露を吸はんとてか、夢のやうに尾を曳きし螢火の二つ三つ四つ、物さびしき枯柳の影をかすめて、岡を繞る樺色の美くしい、さゝ川の草むらに飛びめぐるしほらしさ。

月は中空にかゝりて、遠くの森も山も、際涯しなき海原も、あるは眼下の大厦高樓も、幾千の棟も、ぼーッと霧につゝまれて、たゞもう夢のやう、ふと孀娥の神がこゝに天降り給ふにや、藹然りと悠やかな光は此の岡のみに照らされて、いつしか夜は更けた。

一杵、二杵、三杵……。

何處からともなう鐘樓の鐘の音は、こなたの森に落ちて……。

「失戀の子よ、煩悶の子よ、やすかれ」と、幽遠な餘韻の波動は、夏の大氣をうごかして、樹々の葉かげから得もいはれぬ、涼しい風が吹いて來た。妾しはそゞろある感興に、暫らく默想の人となつた。突然！悲壯の喇叭のひゞきに深夜の寂寞は破れた。

（評）文に自ら月のひゞきあり但し物足らぬ所あり。

○漂流談　静岡　福井道子

今日迄中村の岩井堂に宿つて居たが、晩は歸るべくお暇を告げて出たのは午後六時であつた、あやにくの雨天で、肌着一枚となり高く端折り、風呂敷包を背負つて洋傘をさし、麻裏草履の濡れたのを片手に持つて、

南風の横雨に曝されながら、洗足でビショ〳〵急いだ處は、人が見たら驅落とでも見えたてあらう、行く先は何所、今日は舊曆二十三日、舟見山太郎坊大權現の御緣日なので、今夜はそれへお籠りをすべく急いだのてある、一里餘の路を七時頃下內田村へ着いたので、先づ籠堂へ風呂敷包みと洋傘を置いて、權現樣へ參詣し、燈明料を貳錢あげ、和尙に今晩の御籠りを願つて又元の籠堂へ戻つて休む、はや暗くなつて、本堂には赤白の大提燈や洋燈が點く、お庭の燈籠へもみ明しがついた、妾の所へもランプをつけた、時節柄多忙の時おまけの雨天て御籠人は無いのてある、貳間半に六間の二階造りの籠堂て、村の少年少女は其疊の上て、猶鼠や盲鬼の遊びをして、飛んだり跳ねたり非常に騷しいが、語るに友なきたつた一人の妾は何も面白くなかつたが、妾の顏を見てはひやうげる少女連を見ては、時々微笑むを禁じ得なかつた、妾は洋燈の下に緣の缺けた火桶を控へてかしこまつて居ので甚だきまりがわるい、するとお籠人らしい女中が二人互に兒を背負つて妾の傍へ來た、本堂の方では村の百姓衆が農作の話を頻りにやつて居る。軈て御經が始まつたので妾等も本堂へ行く和尙の太鼓の音につれて、皆々唱へ言を唸る。聞けば此權現樣は二躰に御姿を現じて、朝は地藏尊、朝の四つ過ぎより天狗になつて御山へ登り賜ふとか、唱へ言は馬鹿々々しければ略す、だが鰯の頭も信心柄とやら、一心になれば利益はある、やがて御經も唱へ言も終つて村人は家々に歸る。妾等は二階へ寢かされた。先の女中は矢張此下內田村の人てあるとのこと。いつしか人聲靜まり、雨はまだ降つて居る、かけひの水音俄に高く(七月十四日)



植木や（選外）　大和　堤安子

午前四時頃皆起きて、顏を洗ひ、四方を拜し、權現樣へ參詣し、さて出立すべく、女中に別れを告げて跣足で端折り、昨晩の身なりになつた、和尙樣もまだ起きないが、此邊の家々まだ夜中のつもりて寢て居る、さて妾が行く先は何處ぞや、いつしか掛川へ來た、二里許りの路を、七時過ぎになつた、雨が降るのに小さな洋傘て風呂敷包は濡れた、大變空腹に感じたので、思へば昨晚六時に御飯を食べて、それから十三時間と思へば俄に一層のひだるさを覺えて、傍の蕎麥屋へ飛び込んだ、それから伯母樣の家へ持物を預けて、朋友を訪うた、新曆の盆だからゆるり遊んておいてと

おつしやつたが妾は用事があるから、と云ひのけて、只土産を置いて暇を告げた、實は伯母樣の家の方が我儘一杯でよいのだから、よも山の噂に時を移して晝飯を戴き、御暇をつげて、午後は掛川半僧坊大權現へ參詣した、此所は小高い山なので、老木生い茂り、掛川を一目に見下して、景色の善い事妾のやうな拙い筆では、到底書き及ぶ所でない。風は止んだが雨が時々ビシャ降りするので困つた。あゝ明日は野良仕事する身で、大分遲くなつたから急いで家に歸つた。隣家のばあやに土産を呉れたらば、それは〳〵喜んだ(同十五日)

＊　＊　＊　＊　＊

思へば趣味も香もない、一の滑稽談にもならないが、あまり漂流し過ぎたので隨筆帖に書き留たのである。

(評) さら〳〵としてよろし、誤字なきやう注意ありたし。

○良ちやんの日記　大阪　越智滿壽美

何時もの樣にお日樣が上つてから目醒めた、姉樣に着物變へさせて貰つて茶の間の方へ行くと、恰も履修兄樣が起きてお顔を洗にいらつしやる所なので、「良も行かう」。つて兄樣と一しよに裏の井戸に行つた、朝顔の花は紫と赤とが澤山々々、良は數へられない、美しかつた。

歸つて來ると茶の間で、祖母樣、叔父樣、叔母樣、兄樣、それから謙ちやん、望ちやん、姉樣と良と、ずらりと並んで御飯、良と姉樣と丈けはお客樣だから別の新しいお膳なのだ、里やはお給仕。

御飯が濟むとすぐ、昨日お友達になつた隣の佐市ちやんを誘つて前の山へ遊びに行つた、いろんな草を摘んだり、花を折つたりして居るうちに、長い草があつたから、こら面白いと思つて、ギユーと引かうとしても中々抜けないで却つて良の手に血が出て痛かつた、びつくりしたが泣いちや佐市ちやんが笑ふだらうと思つて我慢して居た。

歸つて見ると車作から杉本の姉樣が來ていらしつて、良の姉樣と椽側で籐椅子に腰をかけて何かお話をしていらしつた。「よくいらつしやい」。をすると靜枝姉樣は。「オヽお悧悧ですね暫く見ない間に大きくおなりなさいましたこと」。つて頭を撫てゝ下すつた。「もう貴嬢、惡戯ばかりいたしまして仕樣が御在ませんのよ」。なんか姉樣は言つていらつしやる。

お晝飯が濟んでから兄樣とお午睡した、目醒めると兄樣はいらつしやらない、何所へいらしつたかと思つて探しまはると奥のお書齋で勉強していらつしやる、良もお机の前に座つて。「兄樣書書いて頂だい」。つて言つたら英語の本――乾度、エ、ビ、シ」だらう――を見てゐらしつた兄樣は、それを片づけて、何をかゝうと有仰る、兵隊さん、旗、軍艦、大砲つて言ふとそん

なに一時に書けないつて石盤に日の丸の旗と兵隊さんを澤山書いて下すつた、嬉しくつてたまらないから、それを持つて走り廻つて祖母樣や姉樣達に笑はれた、夕方お湯に入つて姉樣二人と良と村のはづれの畷道をぬけた所の小さな橋の上へ凉みに行つた、恰ど半分のお月樣がきれいであつた。

（評）子供の情よく寫されたり。

○柳の雫

河内　松尾　むらさき

妾は淋しう櫻の下に佇みました。

一ツ二ツ……九ツと數へたお寺の夕鐘が今止んだばかり。淡黑い夜の幕がそろ〳〵と降りて來る。

フト目を上げて泉水の方を見ると、正ちやんてす、だらりと水面に枝を垂れて居る柳の木の下に、涙の眼で輝いてゐる星をジッとながめて居ります。

あゝ居候の身の悲しさ、妾は辛棒して居るけれど、幼い正ちやんはさぞ苦しい事だらう、又なにか叔母さんにいぢめられたのてせう。あゝ、お父さんかお母さんかさへ在らつしやれば、妾だつて正ちやんだつて…………。

チビンと音して柳の靑葉から雫が落ちた。水面には波紋が起つて星影がゆれる。

「姉さんッ」といきなり妾に飛び付いて、ワッと泣くのてす。

「僕いやだ、姉さん、母ちやんの處へつれてつて頂戴よ、え、母ちやんどこに居るの、僕母ちやんとこへ行きたいや」マア、こんなに死なれた母さんを慕ふのですもの、あゝ母さんは今頃何處てこの正ちやんの語を聞いていらつしやるてせう。

妾はビシと正ちやんを抱きしめました。

チビンと又雫が落ちる。

少さな星が長い尾を引いて東に飛びました。

あるかないかの優風に、チビン〳〵と續け樣に雫が散つて、しきりに星影がゆれる。

あゝ、柳の雫ばかりでせうか。

（評）よくある情景なれど柳の雫の大に働きたるが嬉しくて。

○秋の花

上總　御園生かつら子

菊

置く霜深く、野邊の千草も枯れはてゝ、いと淋しき野べに只獨り紅白黃と咲きいてゝ、艶を競ひ媚を呈しさながら花錦の如く、寒さをしのぐことげに君子の操あり。されば畏くも帝の御徽章はこの形をとらせ給ひ、楠公も亦之に水を加へて、紋章とせられしも宜なり、されど翅破れたる秋蝶の露を吸へる樣はいとゞ哀れに覺ゆるものなり。

萩

朝、わが庭に咲き出でたる白萩の花によべの星露と降りて、恰も眞珠の如き光りを放つ樣いと美し、されど

荒れ果てたる隣りの屋敷の跡に、一株二株咲き出でたる萩の花は、あはれに涙のさしぐまるゝを覺ゆ。

尾花

茫々たる野原一面に生ひしげれる尾花、そよ吹く風のまに〳〵場所ならぬ波を起す樣、げに哀れ深く、そが根元に蟲のかなしげに鳴くを聞きつゝ、旅僧の獨り足重たげに破れたる菅笠を負ひて、とぼ〳〵と辿りゆく樣又一しほ哀れなり、されど庭の大なる置石のもとに二株三株立てるいとゆかしき風情あり。

女郎花

松の根もと淸き流れの岸によべの露をふくみて黄色く咲き出てたる女郎花、いと艶やかに美しく、式場などの美しき花瓶に松竹と共に、うや〳〵しく生けあるいと心地よく、學びやの歸りに、今宵の月見に供へむとて、五六本手折りて持ちかへりけるに、家につきける頃には早萎れゐたるいとにくし。

桔梗

一と朝疾く起き出でゝ野べに散歩せし時、ふと道ばたに見付けたる一株の桔梗、よべの露にぬれて一入紫濃く見ゆるが、首うな垂れたるさま、哀れに優し、されど本能寺に主を討ちにし明智光秀の旗標は桔梗なりと思へばいとゞ憎き心地せられて……

（評）敍を以て始まり敍を以て終る。

○ふる里

栃木縣 岸 よし子

妾は今日五年目でなつかしい、自分の家へ歸つたのである、父上は今より八年前妾が九つの秋、重い病で僅かに三日わづらつてなくなつた。後は母樣が一人で妾と五つになる弟を相手に、暮して居たのだがもとより豐かでない我が家の、一層哀れに細き煙をたてゝゆくのであつた。それで妾は五年前、十二の時に東京なる叔父の許に養はるゝ身となつて、相應に學問もさせてもらつて、今日歸つたのだ。今朝上野を出て、王子、大宮、蓮田、古河を過ぎ、小山の停車場に着いたのは十時少し過ぐる頃であつた。それから一里あまりの道を車にも乘らずに、暑さをしのんで歩んだ。森や、靑田や、其處此處の靑葉がくれに見ゆる茅屋根までが、昔のまゝなので、何とはなしに涙が出た。椎の實を拾つて遊んだ鎭守の森は、あとかたもなくきりひらかれて、いかめしい西洋風の家が建られ、菫、蒲公英、蓮華草などの花つみ戯れし芝生も、いつしかくづれてあともない、昨日の淵は今日の瀨と變りゆく世にさりとても懷かしきはおのがふる里である。やがて昔ながらの狹い土橋を渡つて、我が家に着いたのは、十二時に間もない頃であつた、先づ眼についたのは弟の大きくなつたのである、妾の家を出る時はいたづら盛

りの、母様に叱られたのが、今では小學校の高等三學年だとか。やつれなさつた母様と、初めて顏を合した時は、挨拶よりも涙が先にたつた。

＊　＊　＊　＊　＊

日はもう太平山に落ちかゝつて、涼しい風が吹いて來た、妾は清い流れの黒川に渡してある、例の狹い土橋の上に彳んで空を眺めると、低い空は金色に輝いて、北へ／＼と飛んでゆく。青田の上を渡る涼しい風に、鄙唄が遠く聞えて、東の空には月色淡く、星も一つ、二つ、見えそめた。

（評）質朴なる筆。



故郷の夏（選外）　函館　小雪女

○はんどん

麻布　八重子

「おゝ暑い」汗でぬれてひつ着いた、とき色の襦袢の袖をまくつて、頸を拭いて。見ると流石の春子さんも頰を櫻色にして蒸された樣な顏付、白い額に前髪の短かい毛がべつたり、「ちつとも風がないのね」兩人は又元の無言の行になつて了づた。丁度、一時何分、おひ樣は私達の頭の上から照りつけて被在る、惡魔でもひそんで居る樣な白いねずみ色の光つた雲が彼方にも此方にもかたまつて、丁度惡だくみでもして居相な、山王のお山からミーン／＼とやかましやがど鳴つて居る、電車の線路がギラ／＼光つて眼がくらみ相、公使館の例のライオンと云ふのが口を開いてヒー／＼言つてる、水まきは通らないし、砂ほこりを歩くので春子さんの靴は眞白に、私の足袋はねずみ色になつて居る巡査がさも／＼厭さうな顏をして立つて居るかと思ふと電車のポイントメンが時々前へ倒れさうになつて、びつくりして四邊を見廻して居る。可笑しいやら、氣の毒やら、其のくせ自分はどんな姿をして居るかわかりもしないのに。あゝ此んな時に立派な馬車が地から湧いて來て、乘せてつて呉れゝば好いに、而して氷で張りつめたお宮の中へでも…行きたいなあ。「ハイ／＼」びつくり、傍へよけると、自轉車の美人つッと、まるで燕の樣に飛んで行つた。と、涼しい／＼風が…ローズの香りを傳へて…。

（評）風ならぬ風この文を結ぶに足る。

論文

文學士　沼波瓊音先生選

○操觚者の地位

京都　白的女史



能く云ふもの必しも能く行はず、能く行ふもの必しも能く云はず、或は二者を兼ぬる人なきにあらねど、思想家と事業家とは必ず相分かるべし、事業界に於て大なるもの偉人たり、思想界に於て大なるもの亦偉人たらずんばあらず、操觚者にも種類あれども、いづれも文筆を以て思潮を代表し、文運を皷吹し、世事を論じ見識と思想を供へて、萬人に代つて言ふもの也。寧ろ事業家の上に立つべきも決して下るべき者に非ず、然れども、人は皆活動力を有するもの也。赤兒が體内のエネルギー有り餘りて無暗に手足を動かすが如く、人は長じて世に立ち働らかんと欲する也、筆をとりて枯座するよりも、直に社會に事業を印せんと欲する也。されば、動もすれば、觚を操るを氣力なしとして之を賤しむも、俗人の情なるべし、且つや事業をなすものは位も出來富も得て、現世の榮耀多きものなれば、才力あるもの、動もすれば彼を棄てゝ此に就かむとす、觚を操るものは位なく富なし、且つ人爲の階級なく、大文豪も觚操者なれば、新聞の雜報書きも操觚者なり、殊に終年矻々として常に精勵を要し、贏ち得る所はただ無形の名譽にして毫も現世物質上の榮耀なし、功名富貴を目的とする俗物の能く忍び得る所に非ず、されば博士とか學士とか肩書のある人が、寧ろ田舍に行きて村夫子と成り了はるも、安逸にして地位ある所に就きて、成べく筆を把るを避くるも亦自然の人情なるべし、然れども、操觚は一種の貴き事業也、操觚者の地位今の如く卑しくして止むべきに非ず、唯在來は操觚者未だ其人を得ず、一半はこれ徒に原稿を賣らむとする商賈にて、從て社會の信用もなく地位もなかりし也、起てよ、詩人、小說家、雜誌記者、新聞記者、著述家、彼の文壇の商賈を退け、其想を以て、其筆を以て、操觚者の天職をつくし、以て其地位を高むべきは正に今の時に在り、俗人は問はず、多少學問見識ある人が、なほ高等官何等何々敎授などを榮として、野に筆とりて斯道につくさむとするを厭ふの風あるは、我解せざる也。操觚者は事業に就く者よりも、名聲早く揚り易きものなれば、分辨もなき少年の士が、其虛名を慕ひ我才の適否を圖らず、一に文學者とならんとする如きは、我また取らざる也。

（評）文未だしきところあれど偸安者をして起さしむるの力あり。

○噫可憐なる癈兵　磯部山人

熱し易き者は又冷め易しとは古人の吾等に教ふる所なるが、今や之を具體的に說明するの事實生ぜんとす日露戰爭當時は上下を通して熱烈なる愛國心敵愾心を喚起し國民の後援事業も全國到る所に創められて傷病士卒を慰藉するの方法は殆ど遺憾無きに庶幾かりき然るに平和の克復せらるゝや世は次第に華美に流れて戰後の大計は全く忘れられたるものゝ如し夫かあらぬか世の紳士なる者平和克復後なれば最早遠慮なしとてか避暑を名として尙暑氣の酷からざる以前より海に山に悠遊せる者尠からず然れど思へば國難に赴きて兩眼を失し兩手足を斷たれし癈兵は暑しとて團扇持つ手なく避暑せんとて單身何處にか到り得べき夫れも將校ならんには手當も充分にある可ければ同不自由の中にも附添の人ありて何かの用達も出來得れど兵卒に至りては失明者にして尙且ツ一時に百廿五圓の手當を得るに過ぎず而かも世人は何故か此如きの不具者に對して冷々淡淡漸く之をかへり見る者だに無からんとす避暑旅行に巨額の金圓を費すの餘裕あらば先づ第一部を割いて此の可憐なる癈兵を慰藉す可し凱旋將校の夫人連は確に卒先して奔走するの義務(道德上)あるなり何んとなれば此等の人々は一般國民が戰時稅の重荷を負ひたる時に於ても諸稅を免除せられたるのみならず戰時の增俸すら受たる者なるをや若夫れ「一將功成萬骨枯」の歎聲を聞くあらば邦家の將來を如何にす可き更に吾は同胞の若き婦人が此尊敬すべき癈疾者の唯一の慰藉者として進んで其良妻たらん事を切望す將校には最近の例として盛岡女學校の卒業生某女が失明中尉芝内魁三氏に嫁したる美談あれど兵卒に嫁せる者に至つては未だ之を聞かざるを遺憾とす。

（評）熱誠の論傾聽すべし。

○日本人と梅花　岐阜　渡邊つゆ子

古來日本人の心を比して、敷島の大和心を人問はゞ、朝日に匂ふ山櫻かな、と詠じたるが如きよく日本人の心を寫せりと謂ふべし、然れども此は日本人を敎育するには不適當の比喩なり何となれば吾人の特質は性急にして一時を競ふにありて忍耐力に乏しく辛抱し難きは其短所なり故に一度時事に感激するや恰も怒濤狂瀾の如く迅雷烈風の如く殆んど當るべからざる勢ありてその後は火の消え風の死したるが如き有樣なり即ち櫻の花の滿開にあたりては爛々どして百花を壓する勢あれども須臾にして落花泥に和し枝頭蕭然たる者に似た

り、若し此花を以て人心を敎化し來らば益々性急的氣質流行的氣風を增長する虞れあり若し此弊を防がんと欲せば櫻花に代ふるに梅花を以てするを可とす、夫れ梅花は櫻花の如き一時の盛色は無けれども能く寒を破り雪を冒し百花に先だちて開き而も永く花期を有するものなれば花中の最も忍耐辛抱の力に富むものと謂ふべし、今後此花を以て吾國民を感化し來らば幾分か其の氣質の短を補ひ缺くる所を滿す事を得べし。

（評）昔は仕事が小さかりし故櫻花主義にてもかたが付きたれども今日は仕事大きくなりたれば梅花主義ならではならぬやうになれり。

○無題錄

[illegible] 辰井ふみ子

○

悶えある者よ惱みある者よ、活眼を開いて大自然を見よ、そこに何等の僞善ある事なく虛飾ある事なし。叉夕べの空を仰ぎ見よ、爛々たる明星は暗黑の裡にも尙光明の存するを啓示するに非ずや。

○

弱き者よ神の御手にすがれ、神のみ懷に眠れ。靈は不滅也、昨日の溜水の今日なきは眞の無に非ず、象をかへたる也。

されば節操を售るものよ　小時冥想して來世を思へ、慄然として身の毛のよだつを禁じ得ざらん。

○

妓女に戲むれ飲酒に耽けるものよ、一度白百合の淸姿に其目を移せ、そこに無限の自然美ある事を知らん、一度其唇を潔めて、白き花瓣にキッスせよ、そこに無限の甘露あることを知らん。

○

僞る者よ汝は先づ、千年の老杉蒼鬱たる森林に歸臥せよ、そこに神の聲を聞く事を得ん。

（評）好說敎。

○女學生觀

兵庫 文子

世の女學生諸孃に告ぐ或る一の階級を終ればとて或る下等の學校を卒業せばとて之に甘じ之を一の名譽として誇る勿れ、名譽と名稱との字義を誤解する勿れ名譽と名稱とは其語甚だ克く相似たれ共其實は然らず、元來名譽なるものは人物の眞價に伴ふものにして眞理の傳達者或は實行者たるの品位なり是れ神佛の外何者も何人も之を人に與ふると能はざるものなり、內大臣近衞大將は重盛の名譽にあらず、彼の名譽ある所以は、君父反目の間に身を容れ父の惡逆を諫め忠孝の兩道を全うせしにあり、之に反して父淸盛は位人臣を極め權位盛なりしと雖も後世の評淸盛却て重盛に及ばず、是

に由て之を觀れば女學校卒業の名は一聞美にして名譽の如くなれ共女學生の紫の袴は一見美麗にして高尙なる如くなれ共彼の淸盛と等しく名實相伴はざれば何の價する所なし或學校を卒業せばとて何の名譽かあらん紫の袴を着けて意張るとも何の價値かあらむ今の女學生の袴は飾りに過ぎず飾るも敢て不可と言ふにあらざれ共飾れば之に伴ふ品位を備へざるべからず卒業の名はよけれども其名の下に活動し名に伴ふ丈けの眞價を顯さざれば何の値もなし卒業せずとも袴は穿かずとも正義を踏み眞理に從ひ實行者たるの見識と品位とを備へ從容自若として其職責を重じ孜々勉勵克く其終りを全うせしものを是之を眞の名譽となす。

（評）女學生のみにあらず男學生に對してもこの戒を要す。



女學生（選外）

倉野たまヨ

○練文法

愛知縣　うばら女史

廿世紀の國民は男女に係らず、社交上處世上各自の思想意識を完全明亮に告白し得らるゝ辯舌と文章との技倆がなければならぬ。之丈の覺悟と修養とがなければ社會にたちて自ら活動し若しくは活動せしむることが出來ぬのである。ことに女子は公會席上に雄辯を奮ふ機會が少ないのであるから、格段に作文の心得がなければならぬ筈である。言ひ換ふるならば此點に於て女子は男子よりも更に練文の必要を認めねばならぬのである。

話すにも書くにも、第一に其話すべき問題、書くべき種子が入用である。或人の如く金言美辭の一二を拾ひ來て夫を骨として文章を書くことは大なる誤りである、金言美辭は決して問題若くは種子其物ではなく、只夫を立派に說明し布衍するために引き來つて飾りとなすべきものである。故に文章を書かんとせば先書くべき問題を見付けて其骨を摑ふることが肝要てある。茲に於て我らは先構想上の練習に、よき習慣をつけねばならぬ。

諸嬢が發表したる「詩文を作る時」を見るに、殆ど千篇一律夜がいゝ朝がいゝ森の逍遙がいゝ、紙が何筆が何と云うてゐて、大切なる構想上の事が少ないのは定めし撰者も遺憾に思うた事であらう。夫て此新らしい想

を得んには二三の諸嬢の言の如く床の中や、散歩の時もよからうが、絶えず先輩の著書を讀むことを怠らない樣にすること、自分はこれが搆想上の第一義であると思ふ。

次に想が浮び稿が出來ても再三自ら訂正改削せねばならぬ、讀者を感動せしむるは言ひ現し方の巧拙による事が多い。題隨意の懸賞文抔を書くには先夫々の題を定めて後、ゆッくり搆想に取係るのが順序である。

(評) 尤なる論なり末段作文の時といふことと搆想といふこととを混同せられたるは惜むべし。

○勢力

茨城 中堂子

現今の人は頻に此の勢力を願欲しつゝある也、然れ共彼等の多くは勢力の何物たるを解せず只徒らに容易なるものと誤解せられて居るが決して己が足を擢む樣な譯には行かざるものなり。

抑も勢力とは如何なるものであらうか、即ち社會多數の賛成である、爾うして社會多數とは又何んであらうか、『二千六百萬多くは此れ無智の人なり』とはカーライルが彼の時代の英國を評したる言葉ではない乎。

されど其の時英國の多數は若しや無智の人であつたら乎、これ吾等は大いに研究せざるべからざる所なり。

帝都に在つては淺草の觀世音に見よ、議事堂に見よ、而して此處に來る多數の顏貌を撿べよ、然して彼等の賛成を得るは何等の勢力なる乎、又一星亭君のために其の事を左右せられし國會議員諸氏を見よ、彼等の賛成を得るは釋迦、ソクラテス等の哲人が名譽とする處であつたらう乎。

然り眞正の勢力は多數の賛成を得ることではない、眞正の勢力は智者賢人の賛成を得る事である、云ふまでもなく一人の智者の賛成を得るは萬人の無智の人の賛成を得るに優るのである然れば愈々世界に發展せんとする吾等は誰の賛成を得るべきであるか、帝國議會の賛成を得よう乎、ミルトン、クロンウエルの賛成を得よう乎、今日の偉將東郷大山等の賛成を得よう乎、昔の公平を愛し、平民を愛したる偉い日本人の賛成を得るか、此れ大いに考ふべき事實なるべし。

(評) 主張見るべし文理の整然たらざるを惜む。

○落梅集

茨城 石塚靜江

一

鉢栽ゑの梅七つなりてありけるが、今朝――五月雨の朝――二つ落ちて五つとなりぬ。落ちし者不幸か、殘れる者幸か。元はこれ等しく春まだ寒き二月の空に、鶯を歌はしめ人を喜ばしめたる美しの花なりしよ。あはれ蕾ながらに落ち、あるは咲き出てゝ疾く散り果てしもありけむ。實となりしものも二つは落ち五つは殘れり。殘れる五つも明日は知られぬ運命なり。あゝ世

にありとしあるもの何れか運命の手の中のものならざる。花も人も。されど。

花は年毎に清き笑ひをもらせり。これ己を知りて運命に安んぜるにはあらざるか。かくて人貧し鳥歌ふ。あはれ。人々よ喜びも憂ひも、つらきも楽しきも皆運命なり、人の力の如何ともなし難きを悟り、その運命に安んじて神の賜ひし己の業を勤めよ。さらば其時人の力や偉大なり、遂に第二の良き運命を作る。

二

泣き得るものは幸なり。そは涙あればなり。冷え行く人の心、悶えに荒びたる人の心を濕し温むべき熱き情の凝りて結べる誠の雫の如何に人世に力あるかを思はずや。而して女はこれを能くす。

三

愛しき姉妹よ。悲みたまふな、愁ひ給ふな、世の道廢れ人の情薄らぎぬと。夜光の璧は肉眼に認め得ざる微光を反射してまばゆきにあらずや。われ等が清き〳〵心のやがては、光り輝かざらんやは。

四

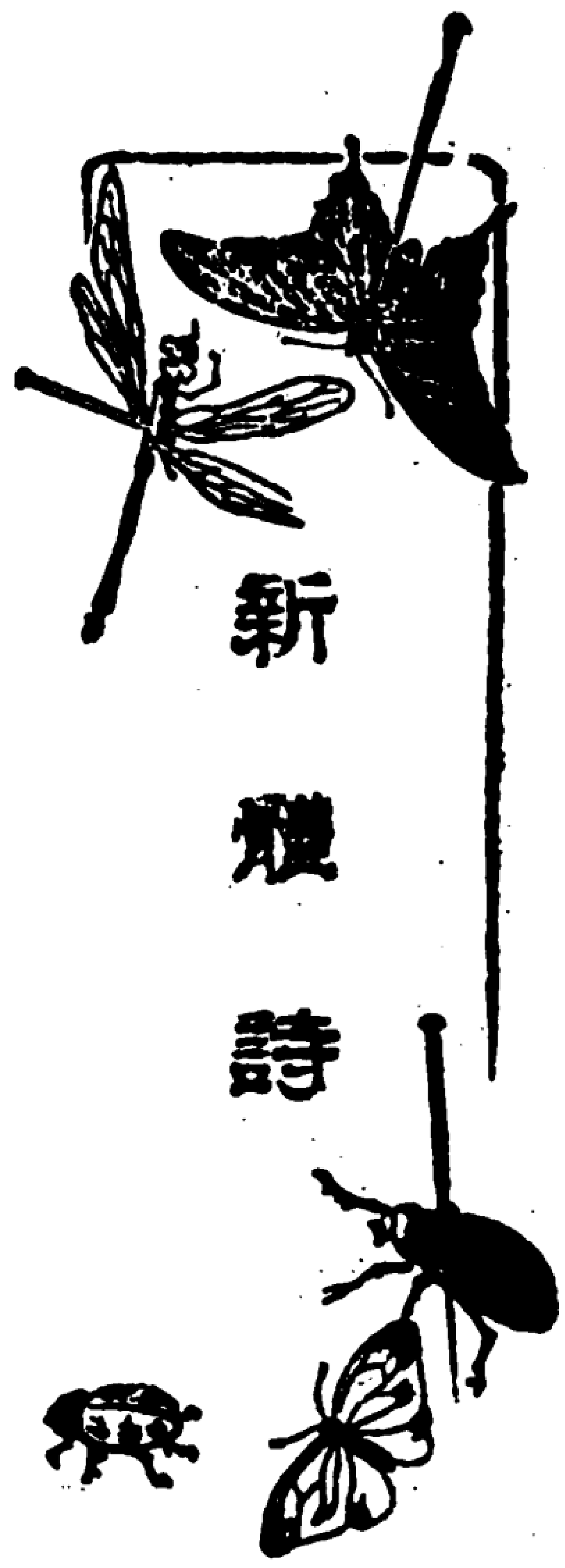
女はつまらなしなど、かこつ女達の心のえこそわからね。大方の男子達の如く横行濶歩したきにや。胸に勳章の綺羅を飾りたきにやあらん。分を知れ。分を知れ神が吾等女性を生まれさせ給ひたる御旨を悟らざるで、虫の身に負ふ大切なる殻を荷にし、そを脱ぎ棄てて天に昇らんと企て、遂に風雨に斃れたる話あり。こは作り談なれども、よく吾等を戒むるに足らん。願くは心を平かにして、隠れたる女性の功の如何に花々しく現出せるかを味ひ見られよ。

（評）この類の論の漸く多くなり行くを喜ぶ醉醒むる時は近づけり。

○女らしかるべき説　近江　小枝女

女らしかるべし。語や卑近にして何ぞ陳腐なる、されど卑近なる、却て眞理に近き事多く、陳腐なる、却て世人に忘らるゝ事あり。卑近にして陳腐なる此語、果して唾して委棄すべくや。

凡そ物には特色といふことありて、これを失はずして始めて其物の眞價は揚るなれ。新聞紙が古き事のみを傳へ、少年雑誌が政論などを掲げたらば、是れ全く其の特色を失ひたるものとして擯斥せられんは論なかるべし。況して世にある程の人、男は男、女は女、或は長幼職分などの別あれば、それ相應の特色を鑑みて萬事に意せでやあるべき。分けても女は優美、柔和、綿密、慈愛など、その重なる特色なるべければ、起居動作言語の末に至るまで、深く意を用ひざるべからず。些事となに言ひぞ、一事が萬事といふこともあれば、粗暴なる擧動を爲す女に婦徳を備へたるもあらざるべく、豈……べけんや、さうさ、斯うだなど、好んで文にも作り言葉にも顯す方の心根も推計らるゝなり。今の世にあゝ、女らしかるべしとの陳腐なる語は、依然今の世にも必要の語なるを如何せん。感ずることありて、此の説を作りぬ。



新體詩

河井酔茗先生選

天

○濱に遊びて

麹町土手三番町二二 山下里子

静かによする秋潮に、足したしては自から
遠き思ひや湧きぬらむ、光に満ちし此濱は
神の御領とあらはれぬ、白鳥遊ぶ沖島に
歌よむ人や夢むらむ、あこがれ心地貝ふみて
始めて見にしやどかりや、ひろひし貝の數かずに
かはさし世ざま悲しみて、われもこゝにはもの懐(なつか)しき

穏雅の詩風、おとなしく過ぎて、今少し深い意味も欲しいやうに思はれます（酔茗）

地

○夕の磯に佇みて

石見國濱田町五町 牧岡恵子

浪にたゆたふ眞紅の入日、君戀ふ胸の血しほの凝りて
運命と戰ふ最終の狂亂、天の手力かぎりをつくし、
百計詮なきあはやの刹那、飛行自在のまばゆき女神、
紅衣のみ袖に猛者をいたはり五色の天路を馳せ入りませば
み髪さばけて黄金の千條、紫雲は迎へぬやすみの國へ
今、靜寂の天地をわたり、幽玄影なくうすれし際に、
休息の天使の神秘のみ手を、星、榮光の瞬きしげく
不思議のうたを讃しつ天の、輝きある日の希望を笑みて
静かにめぐるよ夢の環なして。

最高度の文字を使ひとなすに、下手ては出來損ふて見られませんが、是ほどの手際に行けば、將來のある方なる事が立言し得られます（酔茗）

人

○秋を送る

堺市大濱通四丁二八 竹叟文子

秋姫が抱ける甕(かめ)の 美酒の果實(このみ)は盡きて
興さめし花の少女は 月草や桔梗、刈萱
女郎花、蘭や野菊や 一向に宴(うたげ)の席を

抜け出て日々に寂び行く　秋姫は深き悩みに
甕れぞ果てゝ　今はたゞ慰楽も無き
煩悶の胸を抱きつゝ、　世を去る姿傷まし
我等は家路にたどるべきを、
とるべき路をも忘れ去んぬ。

秀逸

行く春の詩は多いですが、行く秋の詩は少い、秋の方が勿論作りにくひ、行く春には既に詩的の好い意味がつけられてあるので、秋の方は未だ新詩人の歌ひ得てうなづかれるやうな模範作に接しません（評者）

○金閣寺を逍遥ひて

京都　大澤白的

椎樫白樫くぬぎ林
漆の小枝よ栗の幹よ、
返照横さに金をひきて、
神領なりやと惑はしむる。
自然の清興胸に湧きて、　山ぶみ殆んど歸るごとく、
姉弟感謝の言葉知らず、　よろこび極まり涙ながる。
實落ちて裂けたる苞に盛るも、三つとは更えざる酒に酔ひて、
土窟なる洞に騒ぎあへる、　小猿よ生れて何の幸ぞ。



湖畔晩景　（選外）　愛知　平野俊子

○都富士

京都　堤とく子

山紫に水清き、
都の夏の夕まぐれ、
此所は名に負ふ鴨川の、
流れも涼しき橋の上、
遥かに望む比叡の上、
都の人は此を指して、
都富士とは呼びならふ、
自からまとふ神の衣、
白薄赤に七重八重、
いとも崇高く仰がるゝ、
神の守もれる此の山は、
都に遠き白川の、
花賣るをばを友となし、
幾千代かけて水干さぬ、
近江の湖水を見下ろして、
美くし、直し都富士。

○百合と蝶

小石川　吉田斐子

小さき蝶のあと追ひて、　坐ろ出てたり百合の園、
清き其香はさながらに、　我れや迎ふる美しの、
微笑みとこそ愛でにしか。

さにはあらじな花々は、さゝやき交し笑み交し、
蝶が羽風にゆらめきて、興ありげなるその樣や、
かたへの我さへ忘れ顔して。

○岩　　茨城　石塚靜江

昔は天の歡樂や、君松風のつま琴に、
歌はやさしき波の音、夢みるやうな朧夜を、
青春き血汐のおどりては、融けんか君が熱き接吻。
はかなや震ひし唇の、妬き魔神のいましめに、
ゆかしき君がみ息にも、凝り固りてすべもなし、
戀の焔に身は焦げて、眞黑き岩と永劫に默せる。

○朝雲　　芝　秋山欽子

青海の雲環望みつゝ、朝の戶に立てり我れ、
あゝ霸氣充るひんがしや、紅炎もゆる雲はいま、
神の銀座を浮むとや　海原遠く舞ひのぼり
天に額づき高き默思、
日の神今や出づるよと、紅炎の雲一ゆらぎ、
大翼つよき金翅鳥、狂ふやの高揚り、
あなまばゆ紫電亂發、かくて日は牧に立ち、
峽霧晴れ行く大空に、雲の徽みだれちる。

○帆　　西多摩　坂本貞子

人生の帆あげぬ　如何に神よ
我等の進む其先は　黑暗々の道ぞかし
荒き恐ろしき　海路に
帆上げしは　幸か不幸か
天に浮る彼の雲は　右に左に北西に
風のまに〱　行つ別れつ合つ
人の路も　斯く送るや
神よ神よ　御手にて我を導きて
海の上に　帆あげしめよ

○祉の扉　　周防　笹舟子

霧深き若葉楓の、雲の如萌え出し中に、
ほの見ゆる小さき祉の、固く閉ぢたる神秘のとびら。
玉垣めぐる白鳩あまた、廣前に歌さゝぐれば、
あなたふと扉は開きぬ、照りそめし朝日にむかひて。

○桂濱　　神奈川　花舟子

美神一夜の歡樂を、下界の上に覓めんと、
錦繡、綾羅、靡ひかせて、美にあこがるゝ童神と、

天つ乙女をうちのせつゝ、
只一度もかへりみず、
ながえは下りぬ桂濱。

千松島山、清水潟、
玉輦、空をかけりきて、

○友のる船

伊東 曉子

玉藻の花の白きを分けて、
潮の香のゆるくたゞよふ、
白き絹ぎれ高くふりつゝ、
默して立てる友の片頬は、
海鳥の群れ今羽ばたきて
友のる船はやがて消へ行く。

友のる船は今漕ぎ出でぬ、
海邊に立ちて見おくる心地、
聲をかぎりに打呼はれば、
夕榮に紅う染め出されぬ、
五々島山に夕靄うすう、

○沈み行く船

越後 なかむら子

寥しき影に夕陽は、
今西海に落ちんとす。
檣、舵も、とも綱も、
搖られ搖られて、漂へり。
夕陽のごと破船は、
久しかるべき影ならず。
嗚呼雲いりて星出てゝ、
しづかにせまる暮の色。
陸風帆索をゆるがしつ、
あゝ〳〵濤のどよむかな。

名殘りの光力なう、
碎けて破れし船一艘、
沈まば終らん運命よ、
夕日は波にかくれけり、
瑠璃なす船は沈みたり、

○はづかし

神田 谷文子

かなた粧の室にして、
精とも見えて細々と、
我に舞へとの啓示かや。
懸想してより一とせを、
只はづかしう君が目を、
まだ日も淺き足拍子、
いうぜん長き振袖を、
いとゞはづかし未熟さの、
たゞ水仙の精靈の、
擲ひまつると少さきいつはり。

奇しや生けぬる水仙の、
夢の如くにかぎろふは、
習ひ染めぬる舞の手の、
忍び〳〵の舞衣。
さす手ひく手のたゆたへや
あな見出てつと捕へられ、
君に見られし苦しさに、
細々登るかぎろひを、

○夢

但馬 菫子

昨夜夢にみし白百合の、
黄金銀金くろと赤、
我立つ邊り廻りつゝ、
やよ乙女子よ現し世は、
奇き運命ははじめより、
いやしきおもひは打絶ちて、
どはに安けき山村に、

魂か美しき姫胡蝶、
彩るつばさ最かろう、
いと聲細うさゝやきぬ、
高面振りぬされど子よ、
汝が邊りにまつはりぬ、
運命の神の司どる、
美しき詩の子と成らずやと

○夏の朝

相模 霧生かめ子

靈嶽の頂に、
濃靑濃綠ゆるがせて、
低き吼に笛の音や、
三つ四つ七つ小羊の、
花の樹蔭の戀語、
野に行く乙女歌うたふ、
咲ける野の花ま白百合、
輕う刻める跫音には、

○夜の路

天に幸ある夕映の、
行衛も知らに光消えて、
夜色忽ち深まりて、
冥府よと呪ふ心地して、

○罪の子

見よ美はしき星のかげ、
光に世をば照すかな、
花をかざして乙女子の、
我をば見たる眼の如くゝ
見よなつかしき雲の色、
常世の時を知らずかな、
おゝたらちねも兄弟らも、
ゐろりの中の火の如く。

霓裳羽衣の天つ兒が、
朝涼風の萬斛や。
流は白く目路靑く、
やがて露より生れ來る。
胸血の狂とめかねて
後姿の影ゆらゝ。
香漲らふ草小道、
亂れて戯はる露の玉。

麹町　舜ごろ宴

はや夜の幕につゝまれん
木立の繁り暗を配りぬ、
杜鵑の叫び冷やかに、
寂しき胸のおぞけ心や。

越前　新保勝子

とはに變らぬ情ある、
たとへば夏のあさぼらけ
露をきあまる芝草に、
朝な夕なに色づきて、
たとへば冬の寒き夜半、
系みてぞ語る團欒の、

さなり無限の蒼穹は、
光のとはに充つれども、
涙と夏とをたけびの、
おゝ末流にあるなれば。
若き命のあさぼらけ、
幾山川を眺むれば、
おゝうら淋し木の枝に、
暫し止むる戀の花。

○菜車

小雨いと〳〵降りやまず
三つ四つゆきて靜なる
若き夫婦にひかれゆく。
眉てき夫は轅とり
姉樣冠り艶やかに
「蕪や、みづ菜やキャベツ菜や」

○ゆめ

閑麝薫ずる紅閨の中、
黃金の鈴は低うなる。
冬のふすまの暖う、
いかなる夢をばむすぶらむ。

○苦樂

とはに淸けきかぐはしき、
實に時世てそ悲しけれ、
聲と罪とに黑暗の、
小高き岡にたゞずみて、
我世の春は老いたりな、
かの佐保姫の名殘とや、

小樽　綠水子

黃なる傘、白き笠
朝の街を菜車が
あと押す妻は手拭を
カラリ、コロリの鈴の音に

四谷　河野槇子

緋色もえたつ小枕の、
しづかに眠る姬君は、

兵庫　森井せい子

世にも氣樂な君かなと
されど我にも苦勞あり
我はさとりぬ人の子の
神は左右に添ふものと
不幸なりとも愚痴云はず
我は我のみさとりつゝ

我れを羨む人多し
されど我にも不幸あり
生れて來るや苦と樂の
いでや希望に鞭打ちて
苦勞ありとも不平云はず
永しへ樂に暮さばや

山口　秋良さかえ

○小川の賦

世の煩悶に堪へぬ身は
若葉ぞ香ろさ森の
露汲まばと跳路を
小川のほとりさすらひぬ
水は流れてよどみなく
花は飛びちり泡は消え
たへなる音のせゝらぎは
かなづる小琴のそれのごと
我は思ひぬうたかたの
我世の悩善になかんより
消え盡き美しき
永久に過さん我世をと
嬉いとほしのせゝらぎよ
其行末や幸あれと
いとも清けきせゝらぎよ
汝と語りて夢見なば
偲びてそこになき伏しぬ
汝が落ち行く天苑の
萬の神に祈りつる
ゆめつきざれな長へに

香川　金星女史

○夕暮の歌

御恵深き天津女が
こゝろの夢をさますべく
見よ夕陽のかげ落ちて
西のみ空にみだるとき
利慾にまよふひとの子の
つくりましゝか夕暮を。
紅ふかき彩雲の
そこに快樂のひかりあり。
彩雲うすく色あせて
梢の森にさはぐとき
なく百鳥の聲たえて
すゞしき眉を開く時
かくもしづけき夕暮も
暗き惡魔の闇の手に
鳴求むるもゝ鳥の
そこに美妙のしらべあり。
天のみそのに新星の
そこに無智の啓示あり。
尊しが程にきえうせて
啟ばるゝこそはかなけれ。

尾張　水野　章子



月よき夜（選外）　奈良　白藤淵女

○星よ

大江のながれ秋の夜の、
興もそゞろの逍遙や、
水には月の額のせて、
流れも緩く下り行く。
仰ぎ見すれば大空や、
天の河原に星冴えて、
神々し火を下界になげつ、
塵の世、人をまとすなり。
あはれ國より捨てられて、
幸なき夢を結ぶより、
永劫に悟られぬ星の影。
なさけある眼をかゞやかし、
あゝ慰めよ星の影。

淋しき此所に來て見れば、
此所に樂しき園ありと、
遊ぶ、幸なく眠ゆる身、
思へば胸のいと亂れ、
榮へたる月の影落ちて、
もとの小路をたどりつゝ、
五位鷺鳴くをあはれときゝぬ。

錦　江　子

○夏の游

宮居放れて出でましゝ、
ほのめかしてよ水面に、
若き御神の面恥て、
龍の宮なる乙姫は、

靜に應へて笑み給ふ。
潮に醉ふらん濱松の、
訪ふ玉波にゆら〳〵と、
青葉涼しき夏の海。
あゝ果もなき瀬戸洋に、
白帆の影もほの見えて、
眠りはいつかさめぬらむ。

○夕のうた

山寺の鐘湖をわたりて、
汀に聲の風は見えたり、
堤縫ひ行く牧童の、
夜の帳のたれこめて、
滑き夕の湖に立ちて、

○夏の朝

なく郭公の亂聲や、
しばしと絶えし靜けさに、
風にそよぐ葉櫻の、
姫出でますか谷深く、
紅とかす旗雲の、
青葉若葉に輝けば、
山寺下る道者達、
霧たち登る山川の、

○旅立の前夜

更けて淋しき園の戸の
調べ優しきさゝやきを
幼なじみの友どちの
たゞ藍深きひんがしの

砂の上にうなだれつ、
うつらふ枝をさしのぶる、
多くの苫舟舞ひ浮ぶ、
翼に羽鳴らす水鳥の、

越中　北本歌子

夕陽斜に野寺にかゝり、
群れ鴉栖に入りては、
姿ぞ霧に隠れては。
星の光に慰藉あり、
詩人しづかに句に沈む。

周防　佐保子

峯々ひゞく鐘の音、
東の空は明けそめぬ。
その妙樂に醒はれて、
白き雲のみ漂へり。
幾すぢ空に打なびき、
そゞろ涼しき蟬の聲。
ふと錫杖の手をとめて、
欄干による姿かな。

久留米　濱子

枕になれし水の聲
聞くも今宵を限りなる
わが行く先きを問ふあらば
月てる方と答へてよ

名殘はつきぬ筑後川
汝に優しき一ひらの
今宵墓なきさゝやきに

○ふるさと

青葉や枝に契りけん、
ふるさとの夏にきてみれば、
ありし事ども偲ばれて、
昔ながらの緑葉は、

○戀

朝日登りつくれなひに、
草花籠に滿ち〳〵て、
雌雄の蝶の飛び來り、
知るや乙女子清き戀、

○豐年

鎭守の森のうたのこゑ
今年は平和の一年よ
聲の下には豐年の
やよなとめごよ早く行け
日頃のつかれ休めかし

○雷王子

鳳紫の帷の香
電姫が舞ひかざす
雷王子が打鳴らす
御手を辷りておちてゆく
二度空にのぼりしが
美し浮橋あらはれつ
音失ひしやれ鼓

瀬に聞きなれし水の聲
哀れと思ふ情あらば
わが悲しみを歌へかし

下野　山口美韻子

いと青々と茂り生ふ、
唯何となく人戀し。
夏のみ山べおとなへば、
かげいや深くなれる哉。

岡山　三宅馨子

草葉に置く露眞白なり、
乙女憩ひぬはたのみち、
ひらり〳〵と空を舞ふ、
如何に映りしなれが眼に。

横濱　千秋子

神樂の笛や太鼓の音
軍も勝つて閑の
國を幾千代榮えゆけ
鎭守の社さして行け
歌へや舞へよ人々よ

長崎　江上順子

溢れて雨と下界に降れば
黃金扇のひらめきや
鈸の紐のほどけては
眞朱の鳴りもの響いきて
わづかはかけて七彩の
そも亦やがて消えゆけば
抱へて王子は泣き給ふ。

○秋の胡蝶

金澤　山田政子

時は輝る日の夏も過ぎ
梧桐の落ち葉もひら〳〵と
折しも空にまひ居たる
清き流れを眺めつゝ
翼やさしき舞ひのふり
あはれ危き姿ぞと
末定めなき現世の

夏の多きあきのそら
風に亂れて散りて來ぬ
胡蝶の羽根や勞れけん
花の姿にあこがれて
運命も知らず香に醉ふや
見る間もあらず羽根濡れて
花にすがりて流れ行く

○あざみ

備中　佐藤郁花子

蝶舞へる野邊少女子が、
迎ふるらしき顏かな。
花は笑めどもいなまむや、
少女は鎌に力して、
刈りすてられし花あざみ、
浴びて少女はかへれども、
色やあせなむ露をも待たで。

草刈る唄のやさしきに、
鬼のやうなる姿よと、
退ちたりなと刈りすてぬ。
あかき夕日を脊の籠に
ひとりさびしく殘りては、

○別れ

和泉　白薔薇女

つきぬをしさに千みて、
忍びもあへぬわが涙、
みずや追ふ蝶ゆく蝶の、
分つにたえじあゝ君よ、
夕川邊にたゞずみて、
君ゆきぬれば明日よりは、
世にも幸なきわが身をば、
學びの業はしげかるも、

心の底はかたれども、
流れてしげき思かな。
心ある身は心なく、
分ちがたしや四つの袖。

○夏草

徳島　小川なみ子

かゞやく星は仰ぐとも、
何をたよりの我身ぞや。
せめて哀れと思しなば、
度々ふみはよせよかし。

ゆきのした

朝の氷雨もはれやかに
衣かゆべき若葉どき
春にして咲くきゆのした
しべにしら露そとふくむ
のぞめる蜂もうなづきて
繪はがき
姿はみやこに家居して
今朝つきませし繪はがきの
わかれし去年をそのまゝに
ともにゐならぶ心地して

お庭すゞしく風ふきて
夏たちそめてまたさらに
胡蝶の君もとひましぬ
やさしき花のほゝえめば
かなたの草にかくれたり
君はヒーターに戀の靈
夏なほさむき冬景色
おゝ懐かしき君がふみ
ふかきみ情けしのぶかな

○はつ心

伊藤秀紅

朝霧深き早苗取り、
紅き襷の似合ふさへ、
早苗取る手を少女子が、
頭を下ぐる頬の色、
今朝結ひかへし前髪の、
誰れおもはゆの心ぞや、
白粉つけて紅つけて、
若き男に問はれては、
花たちばなの香に迷ふ
顔紅らむるはつ心、

三五の少女恥じらいの、
今日初めての姿かな。
若き心に見つめつゝ、
水に寫して笑みもしつ。
花のさし櫛見たさにも、
姉樣冠り取りもせず。
誰れに見せんの姿ぞと、
少女心にくやしくも。
長き秋に面伏せの、
永久にとこそは祈るなれ。

○夜

武藏なつむし

日のおん神は金色の、
四宮ふかう入りたまふ、
輕びくすしき寬の子等が、
そはくろ靈よ一圜、

彩なす幔ゆらゝけて、
寬風一陣たちまちに、
集ふと見ればあなあやし、
二圜、三圜やう〳〵に、

濁ごりゆけば天地(あめつち)は、
暗ぞあやなき夜の領、
次第に光覆はれて、
あゝ百惑のすさぶ時。

○ねたみ

黒田すみれ

世の味知らぬ乙女子が
白きやさしき手をのべて
苺の實を採らんとすれば
ねたみの眼光らせて
甘き情を喜ひつゝ
唇紅に熟れまさる
うしや葉影に黒蛇の
寄らばかまんとかまえたり

○露

名古屋　西脇ちま子

朝草間におきそめて
身は白露のそれなるか。
あゝ吹く風の身にしみて
はかなきおのが迷命なれ。
こし樂しきも縋しきも
その露の身を如何にせん。
やがては風になるものを
暑つらかりしこゝみ哉。
夕べをまたて消えてゆく
つらしとかこつ思ひこそ
哀しくつらくはかなきも
消なばきえよと思ふにも

○秋の夕

服部初絲子

稲波うたす涼風の、
露をきあます秋艸の、
夕彩うつす白雲の、
岩間をくゞる眞清水の、
かくもやさしき夕暮に、
波がうるほう黒髪に、
翠りの袖をはらふとき、
葉よりこぼるゝ虫の聲。
わが頭せに匂ふとき、
美はし顔はさゝやけり。
悲しむなかれ乙女子よ、
星の光りもうつれるを。

○自然楽

上林桂河柳女

しづかにゆるく叉急に
千々にかなづるたに川の
催眠のさむるとき
いみじき糸をふるはして
自然の樂をたれかきく。
こがれのごときしらべにて
さんびをうたふもろとりの
或はたかくまたひくゝ
くすしくひゞく松風の
自然の樂をたれかきく。
情の琴をかなでつゝ
自然の樂をたれかきく。

○自由

和歌山　早川りよう子

など徒らに世をなげき、
松にや風をしたふべき、
わが世の絆たち得なば。
われたゞ空に月となり、
思ひはるけむ我ひとり、
わが世の絆断ち得なば。
空にや月をあふぐべき、
あはれ自由の劍もて、
われたゞ松に風となり、
あはれ自由の劍もて、

○眞清水

大阪　優子

天地分かれし昔より、
月も宿らぬ渓間の、
老い朽ちにける神木の、
或は苔むす女夫岩、
緑滴たる葉蔭より、
神の御息(み)にふとふれて、
二十重(はたへ)の葭におほはれて、
岩に戯る眞清水よ。
前にぬかづきそとよぎり、
音なく越ゑつ見かへりつ。
寝覺めて出てけん水魂の、
玉と滴る眞清水よ。

○初秋の野邊

湘南　富久子

草花の賤き野邊に
其さまやうるはしく
なゝ色のあや錦
下界のものどもいと寄て
その他とりどりむかへまつりて
こゝに音樂の集ひして
今静々と姫は下りぬ
秋の衣おん身にまとひ
あざやかに裾引きて
すゞ虫松虫はたくつは虫
其身々々の聲ふり立てゝ
我世と成りぬと共に祝ひぬ

○夜の胡蝶

宮城　蕙風女

春の女神がうたゝれの、
眠れる月の光なく、
夢の香ゆらぐ緑野は、
さ蘭に匂ひ幽なり。

ゆかしきちぎり架の、
失せにし友の後を訪ふ、
此の世の戀のつれなくて、
白蕊永久に蕭ずてふ、

○かはづ

春雨の夕、
あへなくもちる櫻、
殘る梢の青葉陰に、
小蛙鳴きけり聲を限りに、
雨を祝ひてか、　花を惜しみてか。

○曙　　石狩　初子

み惑おつき瀧田姫の
情の涙滴りて
微笑み初る秋草の
園生に我は佇みて
小さき胸に秘め置きし
戀のおだまき繰返し
希望の光は永久に滿つ
げに幸おほき身なる哉
眞白き雲は流れきて
怪しや自然は囁きぬ
『憐れ乙女子疾くさめよ
なれは清げき身ならずや
朝に匂ひ夕にちる
冷たき双手を捧げつゝ

○みどり子

なれが罪なき寢顔には
なれが幼きふるまひは

葦が宿をしるべにて、
うらぶれ胡蝶あはれなり。
春まだ若く身は老いて、
彼の世に甘き戀あらん。

新潟　姫百合

立ち出てゝ見れば、
落ちて流れて行へを知らず、

春の光りに萌え出づる
心の主よとこしへに

○あはれ君

君に別れて片羽鳥、
朝な夕なにたゆるなき、
三年の秋はめぐり來ぬ。
君と眺めし庭の萩、
君と分けにしゆかり野の、



秋（選外）

寛の手に眠る夢路より
花の香に醉ふ蝶ならず
儚なき戀にゑふ勿れ』と
感謝の涙地に砕く

岩代　春見女史

神のすがたぞ宿るなる
鬼もめぐしと微笑まん、

横濱　寺田圭子

淺間の山と化しゝとか、
雲は狂へる獅子に似て、
されば胸血のたちさはぐ、
熱烈しき戀に感ずるよ。

小草の如く濡らけく
塵に汚るゝことなかれ

明石　市子

さびしき宿の賤が身は
袖の白露しぼりつゝ、
染め出てにけり色深く、
尾花はやがて露置かむ。

○淺間山　　上毛　桑原緑子

ふと見し人の戀しさに、
まだうら若き少女子は、
白粉あつく粧ほひて、
甘きちぎりを願ひしが、
何の因果か、少女子は、
顏醜くきに捨てられて、
もだえ〳〵て死にけるが、
憤怒に燃えしそか鬣は、
見よや不斷に吐き出す、
戀の焔ぞ忍ばるゝ、
若き男の子の登山りては、



和歌

佐々木信綱先生選

秀逸

○夕ぐれの落つる日影に偲ばるゝ細くなり行く身の運命かな
鹿兒島　木原しか子

○小峯より霧吹きて來し夕風に笛の音のせて君に送りぬ
伊豆　伊賀かね子

○時めきしうたひ女病みて秋の夜を枕に近う舞扇みる
信濃　なみ子

○鐘やみぬ蓮花ちりぬ夕の湖古塔の影の靜なるかな
小樽　岩谷綠子

○琴の音のかすかに洩れて少女一人留守もる窓に秋の日長き
横濱　風間白妙子

○月のせて丹塗の小船ゆるう行く蛙蛾は水よし萩ざかりなり
鳥取　上山千重子

○急げども後れがちなり我脊子とともなひて往く菜の花の路
飛驒　武滿柳枝

○五月雨のそゝぐ山田にたをやめが玉苗植うる歌のやさしき
東肥　白菫子

○せきれいの歌に朝の霧はれて谷のせゝらぎ湯氣たちのぼる
新潟　笹川ひて子

○去年逝きし蝶の奥津城おとなへば夢も安げに百合の花咲く
大阪　霞子

○九洲路の浪路遠くも何かあらむ戀しき父に逢んと思へば
京都　橋本八重子

○夢うつゝそと窓押せばあけぼのゝかすみの奥に筑波山見ゆ
芝　紅萩

○大輪のばら亂れ咲くまばら垣ひなの少女の衣かゝる見ゆ
曉子

○さらばとて友は東にわれは西に分ちし袂ぬれにぬれけり
足利　飯塚よね子

○彩雲の流るゝ御堂の扉によりて獨り微笑む寧樂の夕ぐれ
福島　河野よし子

○目のあたりなき母上を見る心知妹がいけたる白蓮の花
品川　小林のぶ子

筑前　沖水子

○

ほの〴〵と山よりしらむ筑紫野や
沈默の國の夜はいまあけぬ　伊勢　村山里子

○

いましめの萩の縄古り朽ちんとす
露より外にさはり亂すな　下総　武田たき子

○

花實のあとを慕ひてそこ〳〵と
胡蝶むれ飛ぶ春の朝かな　岐阜　後藤英子

○

旅なれぬ此身虫なく草になげて
美濃は米取る鄙唄きゝぬ　麴町　淺井千鳥子

○

おん母のみ手に抱かれ美し國へ
ゆくと思ひぬ初秋の夢　下総　三橋浪子

○

筑波路尋ねて行けば日は落ちて
心ろ淋しき女化の原　播磨　阿山笹子

○

欄干に悶えある身をかたよせて
蟲きく宵を秋雨ほそき　下野　園子

○

待ちし人はさて近づきぬほゝゑみぬ
何よりわれはいざ語らはん　駒込　春子

○

北嵯峨の宿のあるじが羅の
袖に透きける小短冊かな　下野　新井浪江

○

賤が屋を漏るゝ灯に愧らひて
うつむく花に歌まゐる虫　下野　美韻女

○

釣をする鬼怒の松原右に見て
わがのる舟の楫音高き　東京　芝野水江女

○

夜明なば聞きつと人にほこらなん
夜深く名のる山郭公　東京　史子

○

みなかみは何處なるらん夕ごりの
雲の音ある山の瀧つせ　神戸　輝月女

○

聲低うなみだながらに母君が
かたりたまへる秋の夜半かな　千葉　林よね子

○

瓶に活けし白萩見れば友戀し
亡き母戀し旅の夕ぐれ　秋田　松田せい子

○

ぬば玉の黒髪山の小御堂
經よむ人のうらわかきかな　東京　夢守

○

秋たけて柿のあけ葉に風もなく
たゝ沈默に鳥のついばむ　和歌山　室谷保子

○

犬つれて狩人一人すぎ行きぬ
菅原一里日斜なり　伊勢　守岡みどり子

○

絹展べてしばしを畫師のためらひや
日當りの窓菊の香高き　高尾　金子楓蔭女

○

笑ふなる聲さへもれて木犀の
かほりにみちぬ村長が家

○　周防　芳　子

君は今はたちの戀やうらぶれて
　四年昔のしのばるゝかな

○　大阪　櫻木美智子

春逝きて我家訪ひ來る鳥もなく
　母の病のいや重り行く

○　熊本　黒瀬さわ子

紅の色香匂へる下蔭に
　讀み行く文に落花散りけり

○　讃岐　國越茂子

物乞の責や今宵誰が里に
　胡弓枕の夢結ぶらん

○　上野　得　子

戀詫てしなん命は惜しからじ
　哀れともだに君し思さば

○　米澤　鈴木紅葉

さゞれ水淺き小川に髮洗ふ
　柳の糸のふかみどりかな

○　鹿兒島　柳　子

おもひきや我名に負へる青柳を君のきまして植まさんとは

○　廣島　西川正子

有明の鐘の音さへ身にしみていとゞ淋しき旅枕かな

○　東京　保　子

村雨の名殘も見ゆる蓮葉の露に宿るか夏の夜の月

○　長野　山田くに子

紅の空と地とのかけ橋かあけぼの花に虹のかゝれる

○　伊勢　川原綾子

時つ風枝もならさず世の波も立たてさやけき池の松かげ

○　富山　と　し　子

流れ行く清水の音も靜まりてゆふべ涼しく飛ぶ螢かな

○　靜岡　佐藤かつ子

詩の文にはさみし螢そと封じ君に參らす五月雨の日記

○　磐城　佐藤榮子

亡き母と共に見しよぞしのばれんにはのさくらのさかり思へば

○　松山　白　露　子

暑を避けて宿るは涼し湖ぞひの繪師が家なり淡墨かほる

○　栃木　菊地つた子

螢ながら青葉がくれの岩清水掬ぶ袂には夏なかりけり

○　下毛　露葉女史

夕立にぬれてかへりてまた出てゝ夢かる人の心せはしき

○　栃木　菅谷とく子

朝まだきうつらうつらの我がゆめをさまさんとてか水鷄鳴くなり

○　靜岡　中村かをる

秋雨晴をさぎり立ちかふ廣野原小川せゝらぐ音しづかなり

○　下總　藤崎美奈子

昔共に涼みし人はまさずして思ひ出多き青葉蔭かな

○　上總　桐谷牧子

浪あらき離れ小島の夕闇を土牢出て蝙蝠の飛ぶ

○　府下　中島鯉子

霧を逐ひ霧に逐はれて九十九折露しとゞなる山みちのぼる

○　神戸　姫百合

わが宿の若木のえだの露ちりて青葉がくれに蟬ぞなくなる

○　下野　梅澤哲子

姉君の秘めしかたみの玉手箱あけてはかなき母のうつしゑ

○　大阪　富永政子

西比利亞の夏の木蔭に駒とめて掬びし水に寫す面影

○　越前　井田ふみ子

白き百合口づけしまゝ少女子は西へと走る雲に見入りぬ

○伊勢 濱田きみ子
うらぶれて荒磯波のゆるがまゝにまかせても見ん捨小舟かな

○大和 豊田晴登
五月雨にあふれし水や踊ひけん庭にのぼれる池の浮草

○神田 大澤さゆり子
裏山の蟬のなくねの絶え間をば彼の君來しか文の聲する

○福岡 むらさき
あゝ今宵みやび月見の人多しわれは露おく野路をたどらむ

○三河 澤田つま子
繪草紙の表に飽んじてをさなきは螢を獲れたり紫陽花の蔭

吸い事（選外）

○磐城 あやめ
世を恨む我身はうせて行かんとす桃散る窓に子守唄きく

○大隅 森山たの子
夕涼み少女をさなご打ち連れて下邊の河にとぶほたる狩

○大阪 平尾とき子
うらわかき尼が片手に菊もちて墓前に立てるすがた淋しき

○茨城 綿引波哉子
戀ひをば語ろふ友もなく蟬の音樂がくれに泣かむこの身か

○横濱 萬重女史
つれ〳〵に古りし文ほご取り出し音を聽ふる秋の夕ぐれ

○播磨 酒見村子
葦そよぐ入江一面の夕榮えや出づる白帆は繪にも入りけり

○陸前 平間道子
灯をかざす少女姿のたゝずめる庭のあなたに松虫の聲

○靜岡 たか子
我を戀ふ人ありときゝし其日より心おかれつ行くにかへるに



○岩代 服部水仙子
軒に吊さ葡萄の房のゆら〳〵に風呂の使は踊りより來る

○信濃 山浦楓月子
杜鵑啼く姨捨山の雲はれて田毎にうつる仲秋の月

○上毛 金澤民子
扇かけば涼風そよろ髪をなで庭の樹に蟬の聲きく

○陸前 尾形千代子
みのり祝ぐ秋の祭りに山小村謠ひ小踊る人にぎはしき

京都 東田操子

○大阪 かすみ子
いたつきの身を其儘に白菊の小窓に二九の秋もいぬめり

○相摸 山本久代子
夕榮えは浦の苫舟帆に染めて鐘渡り來る島の夏嶽

○岡山 三村純子
母君のかたみいだきて立ちよれば月まし入りぬ庭の葉櫻

○播磨 平谷古月
日は落ちて鐘の遠音のきこゆれば草葉の母のしのばるゝ哉

○長崎 文子
咲き匂ふ花の萩原分け行けばさはる袂に香こそこぼるれ

○神戸 藤堂濱子
去年鳴きしそれかあらぬか鈴虫のおなじ植にもらすひとこゑ

○本郷 梅子
ふたら山夕立すぎて谷川の水音たかきたびやかた哉

○加賀 松坂しづゑ
打ち靡く畑の末の卯の花の一村白し遠の山本

○信濃 孔深堅子
山路來て綠の陰に息繼げば道の袂のかゝる涼しさ

何處よりか洩れ來し笛の音たえて木影より洩る夏の夜の月
○　青山　小林よし子

青葉かげ涼しき風のめぐり來て蟬の鳴く音もそゞろなつかし
○　神奈川　鏡花子

よひごとにくしき夢路を辿りては病みだれ咲く宿なしぞ思ふ
○　豐前　清水みさを子

すゞまんと流れの邊りきて見れば夏も夢ぞと思ふばかりに
○　相摸　小林信子

榮えし世の日記いだきて秋の夜半運命に泣くか老の島守
○　信濃　成澤とき子

ゆく人もかへるもたえて月靜か京五條にほそき笛の音
○　播磨　松下すみれ

賤が屋の籬を這ひし朝顔のそよ吹く風に二つ三つ咲く
○　松山　孤蝶女

をやみなくふる五月雨のけふはれて青葉おくれになくほとゝぎす
○　遠野　松下つゆ子

夜の嬢子なくや假寐の夢さめて又しのばるゝ古里の宿
○　京都　矢田松江

海士の子の群がる沖に月見えて船歌ひくし夕凪の海
○　上總　林花枝

散りてなほ水にたゞよふ梅の花をしむ心をなぐさめんとて
○　陸中　若生すみれ

泣けばとて悲しめばとて如何にせん塵の浮世をいとふ母君
○　越　予

夕風に雲鬢はらひつ少女子のあまらが原に鹿をおひけり
○　大和　竹英女史

ときめきしうたひめ老いてわびすめる垣根にさけり夕顔の花
○　牛込　阿部きぬ子

朝日影深くも露のはつか草賤が垣根も色やますらん
○　鳥取　野坂みき子

歌ならずそゞろ戀しむ我窓に只か影見しおぼろ夜の月
○　弘前　佐野みどり子

亡き君のかたみのみ歌低う誦して夕べゆく野の風寒きかな
○　下野　鈴木いくの

故里にかへりて聞くもかはらぬはねやほどちかき蛙なりけり
○　露花子

里人のをしへし道もほとゝぎす鳴く聲きゝて又わすれけり
○　越後　雪女

朝ぎりやまばら松原ま萩原中の小家は故里に似る
○　本郷　朝井松子

小雨晴れて蝶のむつるゝ菫野に詩謡し玉ふ君を夢みぬ
○　茨城　福田ふみ子

かくれ行く沖の小島に思ひのせてたゞずむ夕波さわがしき
○　相模　清水晴子

風に鳴る鈴鹿の山の峯からてふるは櫻の花の白雪
○　周防　秋山たき子

故郷の青葉若葉を夢にみて又思ひ出す君のみ姿
○　上毛　むらさき

五月雨の後なく晴れて水玉の松に涼しき夕月のかげ
○　新潟　岩瀬まさ子

二人なき友は東に去りてより芭蕉の窓に世を恨むかな
○　下總　長川女史

石がきは半ば崩れてほり涸れて崩れし石にきりぎりす鳴く
○　新潟　梶澤女

友の文讀みて戀しむ淋し夜に雨しきりふりて暗夜更けゆく
○　淡路　紫浪女史

百千日旅にたづれて父を得ずかりやにれんに春の雨ふる
○　上毛　新井きち子

病む友に贈りし盆を送らんと添歌思ふ卯の花の窓
○　筑前　福子

夕暮を松にそよぎし潮風がゆるう頰吹くよき目覺かな

○　上毛　花瘟
なつかしき友の玉章くりかへす夕小窓に春雨けぶる
○　茨城　つくばれ
病ひます母をみとるゝ小夜中に沖邊遥に千鳥鳴くなり
○　八王子　布田藤子
入梅のしと〳〵雨の一人旅心淋しき山家道かな
○　播磨　吉田こむめ
蛙の音は小森の方に聞ゆなる月にさめたる人やかなづる
○　赤坂　井上ますを
かくはあれど何時までかくはあるものぞ君と唄へや燭消えぬまに
○　姫路　堀なを子
嫁ぎてし友の姿ぞ偲ばるゝ更衣せし四方の山々
○　柳河　ゑみ子
夢さめて枕をさがす闇の戸に笑みます君のかげうすく見ゆ
○　相模　相樂なでしこ
我が郷里は山家に水すみて秋のみのりもいとゞゆたけし
○　京都　欣子
櫻の園かと見しはそれならで松の梢にかゝる藤浪
○　陸前　猪股きつ子
心地よき門の青田の朝仕事まだ曉の露は殘れり
○　富山　三ツ江
鷄の餌をさがしつゝ山ぶきの花の下より雛呼びいてる
○　上野　梅子
足跡に春や殘らん梅が枝に掛けたる足袋に鶯の鳴く
○　千葉　米良錦
つれ〴〵に窓おしあけて眺むれば紫陽花さけり五月雨の庭
○　鳥取　倉光夏草
春の雨いで湯よろしき湯の舘木の芽する日を獨りこもりぬ
○　讃岐　安藤光代
はなし聲いつしかやみて兄君の睡をまもる燈火の影
○　奈良　稲葉千代子
をさな名をかたみによびて故郷の昔がたりの今日の嬉しさ
○　備後　村上きみ子
春の色のこちたかりしにひきかへて見る目涼しき卯の花の露
○　下總　百合子
そゞろゆく河添小道たそがれて風そよ〳〵と螢とぶなり
○　信濃　吉川ますみ
紅にあるは黄金に野も狹にぞ千々に咲きける百のわかぐさ
○　愛媛　高橋もり子
たれこめて幾日此のまゝ暮すらんなほ降りつゞく五月雨のころ
○　岩代　渡邊美輪子
賤が家の庭より續く花の原ふむ行く夜半にこほろぎの鳴く
○　下谷　田中ふみ子
文遺して夕顔めでてし君にあらずふみにし敷石のたゞつめたくて
○　山口　米田溪子
躑躅咲くそが巖影に旅僧の清水掬びて御名を唱ふる
○　本郷　山口千代子
空を涵す波あら磯に船も見えず燈臺くらう雲のこりたる
○　熊本　郭公子
いさゝ川岸べに立てる青柳の糸をたよりと螢とびくる
○　群馬　靜枝
五月雨や文讀む夕べ我が庭になく音淋しきほとゝぎすの聲
○　四谷　しらぎく
花かげにふと逢ひそめて忘られぬ歌人こひしゆく春のよひ
○　和歌山　大野幸子
思ふどち打連て來し野面散蝶と遊ばん日の落つる迄
○　下野　山口藤嘉
青あらし吹く夏山の杜かげに木の葉がくれの蟬のはつ聲
○　奥　大藤歌子
春雨の靜けき音にゆめさめて千々に心はもの想ひすれ
○　秋田　鮎川烈子
三年振り郷に歸れば母上のみ情の眼に宿る白露

○ 北海道 伊藤きん子
ほのくらき温泉のやどのおばしまにながめもきよきかたわれの月

○ 群馬 林 麟子
なつかしの友や見ゆるときゝしより夜半のゆめにも面影忍ぶ

○ 磐城 吉田時子
さわ〳〵と青葉若葉に音たてゝ夏を告ぐなる涼風の吹く

○ 岩代 伊藤よし子
故郷に歸りて打たむ小夜砧父いたつきに母老いませり

○ 宮城 藤原いわ子
春ゆいて春は來りて二十とせの哀れこの春君逝かんとは

○ 因幡 みどり子
春くれば花はゆかりに匂へども摘みし妹は逝きて歸らず

○ 紀伊 田中二三子
小雨ふる里の夕ぐれ何となく過ぎ來しかたの忍ばるゝかな

○ 麹町 山下里子
蝶見れば妹なつかし川見れば君なつかしき春の夕暮

○ 靜岡 くま子
春がすみとけて鳴なく時鳥淡三公のなきぞ悲しき

○ 備後 柴田實子
波わくや三角洲の緑草に牛牧ふ童群れ飛ぶかもめ

○ 筑後 矢部ゑき子
藪園をめぐり〳〵てゆく水に散りうかびたる山吹の花

○ 夏草
花笑ひ鶯うたふも何かせん戀しき君の世にいまされば

○ 大阪 櫻木美智子
花の夢まだ覺めやらぬ曉を夏は來ぬらし青葉若葉に

○ 安房 忍足しず子
ともすればまなびのことのみときし人その人つひに病になやみぬ

○ 淺草 葉津子
五月雨に柴の戸訪ふ人もなく一人淋しく日は暮にけり

○ 淺草 大沼さゆり
たをりなば月やこぼれんよしさらば筆にうつして家つとにせん

○ 麹町 芳野靜子
朝な〳〵來る花賣の少女子がものかたるまで里なれにけり

○ 富山 小川すみ子
山百合の花の根浸す溪の水に朝浴みせしと森の姫神

○ 新潟 上野志摩子
蝶の羽の花に動くを打見ればいづこも同じ春の日和よ

○ 米澤 福島藤枝子
今朝も亦花賣る少女に逢ひにけり學校に通ふ里の細道

○ 滋賀 こと子
五月雨の晴れまをまちてたどりゆく夕べ淋しきとぶらひのむれ

○ 茨城 美紫山子
あづさ弓春の別れを惜めども引きとめがたきけふの夕暮

○ 淺草 峰世子
須磨のうちに幾數く淡路島蔭のかなたに千鳥鳴き渡る

○ 筑後 田中壽子
いたつきのなかばは癒えて窓押せば柳の糸にかぜのもつるゝ

○ 廣島 芳子
亡き君を思ふ心のくだけては涙の袖にさくら花散る

○ 松山 とき子
小原女が都ぶりなる歌拍子ねむげに馬をひく夜は更けぬ

○ 群馬 飯塚美都子
はら〳〵と櫻花ちる下にたちてひとりおもふよゆく春のうた

○ 伊勢 濱口きみ子
世にも逢はで逝きなんとする己が身を吾たらちねは如何召すらん

○ 讃岐 岡能廣子
夕立の晴れ行くあとの凉さに鳴も勇しひぐらしの聲

○ 羽後 前田ひさ子
少女子が若菜を洗ふ夕暮に風運び來る舟人のうた

○ 陸奥 しらゆき
さびしさや黒かみ梳きてもと紫の濃きむらさきにうたおもふかな

〇　　　熊本　黒瀬さら子
簾なす草の葉に眠る兒が舊の顔に蝴蝶ひら／＼

〇　　　越前　かほる子
故郷の便り如何にとまちわびてかどべに立てば子規なく

〇　　　四谷　服部君子
岸を行く淨土の池のはちす花さゝ音ゆたか歩はやぶれぬ

〇　　　香川　吉田益子
きらめける朝日に榮えてばら園の花にむつれて遊ぶおとめ子

〇　　　福岡　古川春子
朝な／＼色とり／＼に咲き出てゝ見る目ゆかしき朝顔の花

〇　　　京都　白菊子
勇ましき御軍人のそが胸にやさしく匂ふ敷島の花

〇　　　山形　激鳳
花錦敷き埋めたる吉野山いづれの道を春はいにけん

〇　　　羽前　朧月
鹿毛駒に新鞍置きて軍服の人馳せ去りぬ青葉深き里

〇　　　山形　幸子
戦傷負ひし青毛若駒つなぐ屋に朝夕おとなふ軍服の人

〇　　　千葉　高橋榮鳳子
青春にまよへる乙女の立姿春雨にうたるゝ海棠のはな

〇　　　神田　佐藤柳子
病む母を家に殘して藥買ひに野はづれ急ぐ少女哀し



晩鴉（選外）　神田　曾我あき子

〇　　　羽後　岡部花子
水に沿ふて柳のつゞく田舎みち草食む牛にとぶ燕深かな

〇　　　石狩　五井かほる
誘ひてし友と夕暮野行きて嬉れしとばかり螢狩する

〇　　　上野　梅子
名殘げに晩れ行く谷の紅をのせては流す初夏の川

〇　　　伊賀　波岡入豆子
春くれど見る人もなき深見草いつか散るらんあはれ此花

〇　　　越後　とし女
里いでゝ都にのぼるひとり子が小笠にさむう春の雨ふる

〇　　　武蔵　登代子
何につけ胸悶えせる深き夜にあふげば何處や杜鵑啼きつる

〇　　　信濃　節子
み文だきて都戀ひ泣く夕暮を雨にくづるゝ緋牡丹の花

〇　　　豊後　後藤花枝
春の夜を手枕なしてうつゝなに鐘音きゝぬ嵯峨の花宿

〇　　　新潟　桑野那加子
母はいづこ酒召す父のみ怒に泣く妹をすかす夜半かな

〇　　　讃岐　香川玉舎
聲高かき馬子の鄙唄やゝに消えて菜の花十里春風わたる

〇　　　相模　鶴紅霞子
紅のもすそはえある晴衣を母は都に飾らむとては

○　伊勢　奥山冬子

緑影に涼みし人のはやさりてこぼれし酒に月は宿れり

○　三重　各務謙子

さみだれのをやまぬ空にひと月夜渡わけ小舟に水とりのなく

○　北海道　きし子

高殿に琴の音もれて若葉ふく風かぐはしき川沿ひの道

○　津　松尾花子

欄によりて門上し青葉の湯の山や雲眞白なり夕雨のして

○　浪速　鴫しば子

緋桃さく萱葺家の窓下を大原少女花に醉ひ行く

○　伊勢　小林敏江

よし君の病はいかに重くとも吹きはらはてや伊勢の神風

○　津市　服部米子

ふりかみに草ふみしだく霞む野に風にいなゝく若駒のこゑ

○　大崎秋子

秋の雨亡き人來ます宵の如思ひて泣きぬ衣ぬひつゝも

○　神戸　姫百合

さみだれにもの思ひをれば雲間よりもれくるこゑは郭公ならん

○　下野　梅澤哲子

報謝してそのまゝ門の扉によりて夕暮いそぐ尼君見送る

○　丹波　なみ子

あゝ今宵こよひ始めて夢にして母なる人の姿をみたり

○　澁谷　保子

降りしきる村雨やみて空青く日暮しなきて日は黄昏るゝ

○　伊豆　伊賀かれ子

詩人の詩にやせにし頬髭を濱風吹きて微吟消え入る

○　靜岡　中村かなる

青葉若葉茂り茂りし山の間を彩霞ながるゝ朝ぼらけかな

○　栃木　菊地いち子

暮れて行く沙路はるかに眞帆片帆舞子が濱に三日月のさす

○　美濃　傍島芳翠

さながらに眠りに似たる黄の蝶包みて埋めむ姫百合の影

○　因幡　げんげ草

山里の霞の中に寺ありて緑樹の奥に入相のかれ

○　石見　秋の子

秋高く吹く風消えき故郷の須田の牧場の馬は肥えたり

○　備中　佐藤郁花子

さまよひの晴れの小路に星殘つこぼれし如く野菊の匂ふ

○　仙臺　春曉

たらち根の母の呼ぶらむ心地してさむれば寒し高浜のおと

○　高知　明神ちか子

渦あみしつゝふと空見ればはづかしや夕顔棚に月はかゝれり

○　高知　野中すみれ子

山まろう春雨めぐる寺の扉のさくら木影に魂とならびぬ

○　土佐　野菊

じやの目傘人美しく池の邊にあやめ香りて色の雨ふる

○　日本橋　高柳みつ子

拾ひきし海酸漿を鳴らしつゝ磯の日記を書く夕かな

○　千住　まつかせ

ゆく春におくれて生ひし白き蝶の花やいづちとみどり葉のかげ

○　茨城　小泉はま子

詩人の生るゝ夜かや天の川川美う星流れよる

○　久留米　中島きよの

此夏もいとま賜へりいざや友清水のもとに行きて過さむ

○　兵庫　城谷濱子

朝目よく姿やさしき朝顔は露の干ぬまぞみものなりける

○　京都　多貝專月

羅二丈山徑こゝにはたと絶え岩の古室山百合の咲く

○　奈良　田村くまの

黄金色の雲はみ空に充ち滿ちて風もゆるがず夏の夕暮

○　牛込　河村綾子

たとへ我が袖の涙はひゆるとも變るべしやは君がこゝろは

○　栃木　美績子
亡き君の野邊の奥津城おとなへば誰がえがきけん夕雲の色
○　姫路　堀　濱子
とく來ませ城山近き我宿は青葉に暮れて時鳥なく
○　肥前　黒岩　きい子
雨晴れて常磐の山の松の色みどりいやます春の夜の月
○　茨城　野　菊女
朝な／＼垣れのすみれ出てみつ野べのさかりにゆかむと思へば
○　松山　岩崎　きよ子
雨しとゞ家の軒下佇めば籬に白し夕顔の花
○　美濃　津口　喜子
露にまたれ露に咲くらん朝顔は歎むも露のうちぞはかなき
○　福井　野扱　雅子
世の笑ひ人の誤り何かあらむゆくべき道をゆかむとぞ思ふ
○　羽後　ひさ子
血を吐きてなくてふ鳥に願はくはなくに泣かれぬわが胸をなけ
○　京城　原野　美貴枝
雨み山青葉の蔭に巣をしめてふし面白く歌ふ鶯の子
○　富山　三ツ江
色ふかく匂ふあやめのかげうつる水のもひくうつばめとぶなり
○　陸前　佐々木　清子
夕燒や水紅ゐの江のほとり主無き舟を浪は打なり
○　山城　水本　女史
笠すてゝ牛追ふ身とはなりにけり五月雨細く袖をぬらして
○　茨城　前原　峰子
音もせではちす花散る此の夕べかすかにひゞく山寺のかね
○　伊賀　平井　とし子
雨はれて月影やどす玉水のちりやしぬらむそよぐ涼風
○　筑前　横田　留子
若竹のそよぎうれしき朝の殘夢の行方の月ほのじろき
○　千葉　石渡　久女

湖に添ふてよきみやしろの見ゆるかな若葉青葉にうす靄のして
○　島根　中原　濱枝
青柳の糸も繰かぬ夕まぐれ霞のうちに春雨ぞふる
○　福岡　東野　歌子
戰國の鬼と呼ばれし兄君の月に吹く笛の調べゆかしき
○　中津　出水　玉子
おりたちて岸に少女が清水くむ袖にまつはる青柳の糸
○　紀伊　田村　かほる
降る雨に里の夕暮しのばれて今日も寫繪いだきて泣きぬ
○　三重　中村　てつ子
あはれ／＼赫と輝く日光りに清し露負ふ青葉若葉や
○　豐前　山中　敬子
夏きぬと目にこそ見えれうたゝねの手枕涼し夜半の庭風
○　備後　能美　律子
慮らず挽まず摘まん數へ草石に矢のたつためしありせば
○　福岡　雜賀　てふ衣
水樓の夕を君が笛に寄する吾が琴合はず絃亂るゝ
○　石見　三明　糸子
涼風の鈴の音襲ふ夕暮にみすまき上る美しの君
○　徳島　齊藤　菊子
瀧川の流るゝ水に影さして玉とまがふは螢なりけり
○　信濃　白菊
さしのぞく朧月夜をあくがれば銀笛ひゞく樂樓のかげ
○　佐賀　のぶ子
露をだにせめてかたみの藤衣玉にちらしなる塚の夕暮
○　大阪　溪子
村はづれ鶏飼ふ家の破れ垣に朝[illegible]しなれて寂靜かなり
○　武藏　浪子
杜鵑杜鵑とぞ詠じける人を慕ひて夜を明しけり
○　八月里　名久井　さゑ子
さみだれのはれぬおもひのたそがれにいぶせさ添ふるしづが蚊遣火

○ 長野 安孫子美子

夕霧や六十三里須磨寺の鐘の音長う秋のせて來ぬ
○ 大和 たちばな

おばしまに朝の露みる伶人の緋袴にさわげる青嵐かな
○ 島根 小松原鶴子

濱田潟ふけゆく春の月淡くあし邊さむくも千鳥なく見ゆ
○ 京都 松田たれ子

墨衣背の小笠に身をやつし四國廻る若き巡禮
○ 京都 ちか子

我が宿のゆかりの色の藤咲けりいざ來り見よめづる友がき
○ 南越 關よし子

波に入る日を見送りて岸に立つ旅僧の姿態に似たるかな
○ 靜岡 高木とく子

夕榮のそらうすらぎて古寺の鐘にこぼるゝ垣のうの花
○ 滋賀 西村悦子

月みんと思ふ心もあらずして三千里外のきみぞこひしき
○ 相模 相樂なでしこ

大海の波のまに〳〵たゞよへる小舟に似たる我れの運命や
○ 上總 秋葉英子

母君のいたつき守る此の夕べ庭の白萩風なきに散る
○ 千葉 吉田菊子

我が庵は木立茂りてまろびれの夢路に通ふ蟬のもろこゑ
○ 澁谷 しらぎく

錦きて歸りますべき故郷にむくろとなりて歸りますとは
○ 上總 小川くに子

鶺鴒の金波銀波の上なきて煙うするゝ潮添ひの村
○ 横濱 鳳岡康子

萬葉の歌集誦ずる夕窓を秋海棠に雨降り出てぬ
○ 横濱 板倉美子

ききみつる花の都のさくら花我が故郷の母にみせばや
千葉 大木家子

美くしき昔も今は音絶えて住まぬし跡も只虫の宿
○ 埼玉 吉敷量子

涼風にひるがへしたる紅の袖に宿りぬ夏の夜の月
○ 三重 木瀬白露

雨細ふ破れしやぐらの壁をうつ夜堀の流螢に水鷄啼くなり
○ 尾張 奥田久江子

憂き事の數々われは胸に秘めて琴ひきなれば鳴くほとゝぎす
○ 牛込 阿部きぬ子

たえ〴〵になりにけらしな虫の聲身にしむばかり秋の近づく
○ 羽前 豐子

月見ればまたぞかなしさまさるなる我身の秋と思ふものから
○ 美濃 加藤よね子

つれ〴〵の虫の啼く音にさそはれて東に出てぬ初秋の月
○ 香川 金星女史

晴わたる秋の山々麓べの杉のむら立雨あるに似たり
○ 紀伊 殿本はる子

君こひし思ひにたえぬ夜もすがら月になきすぐ山ほとゝぎす
○ 石見 若草みどり

青葉かげ白百合そへし乳母車小兒ねむりて花の香高し
○ 磐城 村田やゑ子

皐月窓夕日うすれて文机のあやめの花の白くもあるかな
○ 山梨 鹽澤春子

たゞひとり葉末に結ぶ露を見て父のみたまを偲びこそやれ
○ 廣島 前田菊子

袖かろき渚のすゞみ月低く金波にむつび千鳥馴れなく
○ 和歌山 室谷操子

虫干しに又古りことの夢を見ぬ君の送りしなさけある歌
○ 大阪 谷口加代子

散り敷ける庭の紅葉を吹き立てゝ軒ばにさわぐ木枯の風
○ 横濱 藤澤秀子

悲しげの山鳥の聲よ秋風よ嵯峨の遠野の夢の調べよ

○ 常陸 秋山園子
秋を語る虫の調のたえ／＼にきぬたさゆる川添の里

○ 遠江 鈴木美津子
雨に風に雪に霰にさらされていよゝ色増す姫小松かな

○ 横濱 齋藤とし子
母逝きて寂しき秋を我妹は佛いぢりの人とはなりぬ

○ 安房 安西八千代子
日は暮れて一人淋しき山の道鳴くまつ虫を我友として

○ 靜岡 彩雲女
夢かあらず現かあらず父君はまこと逝にしをあゝ如何にせむ

○ 福井 榎並保子 秋の月（選外）
鹿の音に秋の憂ひを覺えけり旅の百里を山篭にして

○ 横濱 古川香都子
尼の君の懺悔がたりに夜は更けて月もる壁にこほろぎのなく

○ 上毛 金子尙子
蜻蛉とぶ夕日淋しき破れ庭の萩の葉わたる秋の初風

○ 府下 鶴澤貞子
夕暮の鐘に暮れ行く嵯峨の奥今宵月見る人影もなし

○ 南湖院 相樂きみ子
手をとりて共につみてし菫草花はさけども君はゐまさず

○ 美濃 傍島美遊喜
少女子の斜に秋の日を浴びて羊追ひゆく川添野道

○ 金澤 長瀬美知子
水上に白菊咲かむ八重洲川すそくむそての香りゆかしき

○ 周防 鈴子
螢火もいつしか流れ機織の聲聞く時は初秋ぞかし

○ 安房 高梨代子



秋寒くなゝ子の音にひきつれて鹿のね誘ふ山おろしの風

○ 安房 金本文子
秋毎にめでゝ仰ぎて見る月は千代も老せぬ影にぞありける

○ 岡山 性全芳子
秋風に四方の景色のうつろひてはかなくきゆる野路の朝露

○ 麻布 五藤英子
綿の音は晝寢の人を覺ましゆきぬ夏蠶とざす河ぞひの家

○ 愛知 曾峰
ひとり寢のさびしき庵を芭蕉葉の破るゝ音にさ夜くだち行く

○ 伊豆 上原露葉子

岩代 平とり子
雨ふれば春は思ひぬ病む君が窓の下なる紅ばらの花

○ 上野 好月
かごさげて一夜は來ませ我宿に花野つゞきに虫なくところ

○ 秋田 TK子
御車の道途せめてのはなむけや花環の主を君知りますか

○ 越後 白菊子
すみ渡る月の鏡にてらしなば人のこゝろの雲もはれなむ

○ 上野 佐藤つゆ子
夕風に野菊亂るゝ畦小途案山子に秋の雨細う降る

○ 德島 坂野白露
夕榮のさす影ひくぅ秋の野の晩れ行く空に雁の一群

○ 下總 武田つれ子
聞きなれし鐘の音遠く黃昏れて夕立くらし川添の村

○ 下總 野々宮國子
人の世に友なきわれは悲しみて花ちる夜半を泣き明しつる

○ 德島 住友登喜子
おさな子が母のみ膝に頭なげて如何な夢路をたどり居るらん

○　上毛　五十貝蓮子
とんぼ舞ふ十坪の庭の秋風にそよ〳〵ゆらぐ白萩の花
○　芝　こてよ
舟にして笛ふく人や誰ならん港入江の秋の夜の月
○　香川　せゝらぎ
たづねきませながめ樂しき我山家清水わかして茶もまゐらせん
○　土佐　景石女史
いなづまやそらのかけ橋なか絕えてしどろもどろの露のみ通ふ
○　橫濱　波南子
母逝きて愛し子逝きぬ去年の秋庭の白萩見るにつけても
○　神戸　山下郁子
影とりて片破月のすごくして打ちよす波のアラ美はしき
○　靜岡　吉原靜江女
思ひ餘り見あぐる空のくらくして闇夜すさまじ木枯の風
○　攝津　和久叢子
こほろぎやそよ朝風に音をたてゝこぼしもやらぬ萩の白露
○　近江　杉原富美子
母君に文奉らむと筆とれば砧聞えて夜は更けて行く
○　上野　橫川まさ子
色あせし紫陽花折りてたてまつる吾れは吾れなり哀れとおぼせ
○　紀伊　田中文子
夕月夜流れもゆるき里川や蘆の葉かげに小波よする
○　和泉　あや子
なき妹の形見の寫眞取り出てゝながむる空に時雨ふりしく
○　下關　梅木よれ子
枝と枝かはす柳の木のまより洩れ來る月の影のさやけさ
○　臼杵　安田初子
一人行く山の中村日は暮れて月に文かく葉櫻の宿
○　羽後　前田比佐子
御手とりて共に泣きしと夢に見てひらく朝戸に萩の花散る
○　仙臺　川瀬萩の里
情もて君の惠まれし筆の跡涙に讀めば虫の音清し
○　福岡　千章
月さして潮もみちけり船遊び櫓の上にも涼風ぞふく
○　下總　保坂秀嶺女
暑き日も木の下蔭に涼むまは夏にしられぬ風かよふなり
○　兵庫　文子
稻の穗の浪は靜に音せれど里賑はしゝ笛と太鼓に
○　美濃　西村多賀子
少女子の落葉をかくもなりはひの爲としきけばあはれなりけり
○　麻布　五藤美子
萩の花散る扉によりてものおもふかゝる夕を君の來まさば
○　群馬　橫田よれ子
友垣の誘ふに任せ野に行けばスミレはあらで桔梗むれ咲く
○　飛驒　あやめ子
たのみにし君は在さずうらぶれて憂きを語らむ友もなき身よ
○　大阪　金森よしゑ
さえわたるこよひの月を我妹は如何に見るらん學びの窓に
○　久留米　てる子
やるせなの餘りにそよと針とめて戀の一字をゑがき見るかな
○　長野　四條うめ子
この花をのせては遠く流れゆきて君ます磯にうちよせよ波
○　長崎　素洋
蛙なく聲に心のみだされて今宵悲しき五月雨の空
○　伊豆　露子
露ふかき夜半の月影身にしめてもたれつなきぬ松の木のもと
○　廣島　笑岡すゝき
はりさくるつらき思の此夕人目しのびてうつしゑになく
○　神戸　福上きん子
ならひとは猶しりながら夕しぐれ思ひかへして袖しぼりけり
○　徳島　楠根信子
水清き小川のほとり三ッ二ッ飛びつ遊びつ螢行くなり

○　美濃　坪内清枝
蓮の花の中を分け行く盥舟紙の日の丸高く立てたる
○　小石川　木澤すみれ
怪し心なにを苦しむ悶ぞや遊ひに筆とる秘め歌ぞ憂き
○　奥田久江子
ことゝへばふるやの簾まきあげて昔をかたる須磨のうら人
○　上野　かへて女
磯宿やあくるに早き朝の戸を波がうつなり吾れ呼ぶ如く
○　飛騨　萬翠月女
妹を卒へて通る故郷の峠路にまづなつかしき杜鵑きく
○　美作　とみ子
紅殿の朧月夜のおぼろげににほへる花のかげぞゆかしき
○　京橋　若松翠蔭
朝明けや紫つゝむ寶林に佛童は臨ほとゝぎす聞く
○　新潟　中林ひで子
何となく君が手植の窓の萩つみてひめたる秋の夕暮
○　深川　勝山千代子
送り來し友に別れて一人乘る渡しの舟に夕日つめたき
○　土浦　清子
わが庵の軒に釣りたる玉の緒につゆのいのちの小蝶やどれる
○　大阪　赤松夏子
秋ならぬ秋を覺えて夏ながら夏をわするゝ舟の中かな
○　岐阜　山田はぎ子
病癒て歸る松原風なぎて節面白き日ぐらしの聲
○　栃木　さすらひ女
木がくれで年ふる寺の月かげにひとり法師のたく蚊やりかな
○　廣島　花藤紫枝
戀しさに乳母が古家とひ來れば昔をかたる門の小流れ
○　周防　秋貞榮子
友なきに深山路たどり故郷の母を訪ふべく急ぐ夕哉
○　牛込　岡田桂華
蟬のこゑはいつしかやみて夢さめぬ合歡の葉かげに月淡くして
○　鹿兒島　木之下直子
むしろ我泣きて恨みて火に燒きてこの身も共に消えて行かなん
○　安房　忍足しず子
わだつみの庭をゆきかふ眞帆片帆涼しき風に夏わすれゆく
○　石狩　五井香子
山とつむ思ひ心の亂れては涙ぐましき夏の月夜ぞ
○　下谷　宇都木瀟雨子
木の葉散る音も紛ひて昨日今日しぐるゝ冬と早なりにけり
○　栃木　清
生垣はまだありあけのさりやらずあか月高う小手まりの花
○　近江　杉原富枝
蚊やり火のけむりにつゝむ山本のふもとの里に牛かへり行く
○　丹波　白菊滋女史
生ひしげる柳も水にあやなしてみどりにこもるまどの内かな
○　伊勢　奥山冬子
五月雨のやう〳〵はれて夕暮に雲井の空をほとゝぎすなく
○　愛知　梶田愛子
母君はきのふこの世を去りしとやいたはし乳房したふをさな兒
○　牛込　阿部きぬ子
ふるまゝにたゆとふ舟のともづなはみだれぞ増る梅雨の頃
○　隱岐　ふみ子
行く雲に心痛むる夕ぐれや故郷にゐます母を思ひて
○　宮城　奥田榮子
世の君を迎ふる時は春なれど送りしあとは秋の夕ぐれ
○　尾張　木野華子
紅のぼたにの花に口寄せて睦言語る蝶うらめしき
○　麻布　加藤のぶ子
君は去る春暮れ行きぬ我が宿のたゞあくがれに今日も暮れるか
○　麴町　原田花華
中々にきらんも憂しや手植なる君なき宿にきく竹の雨



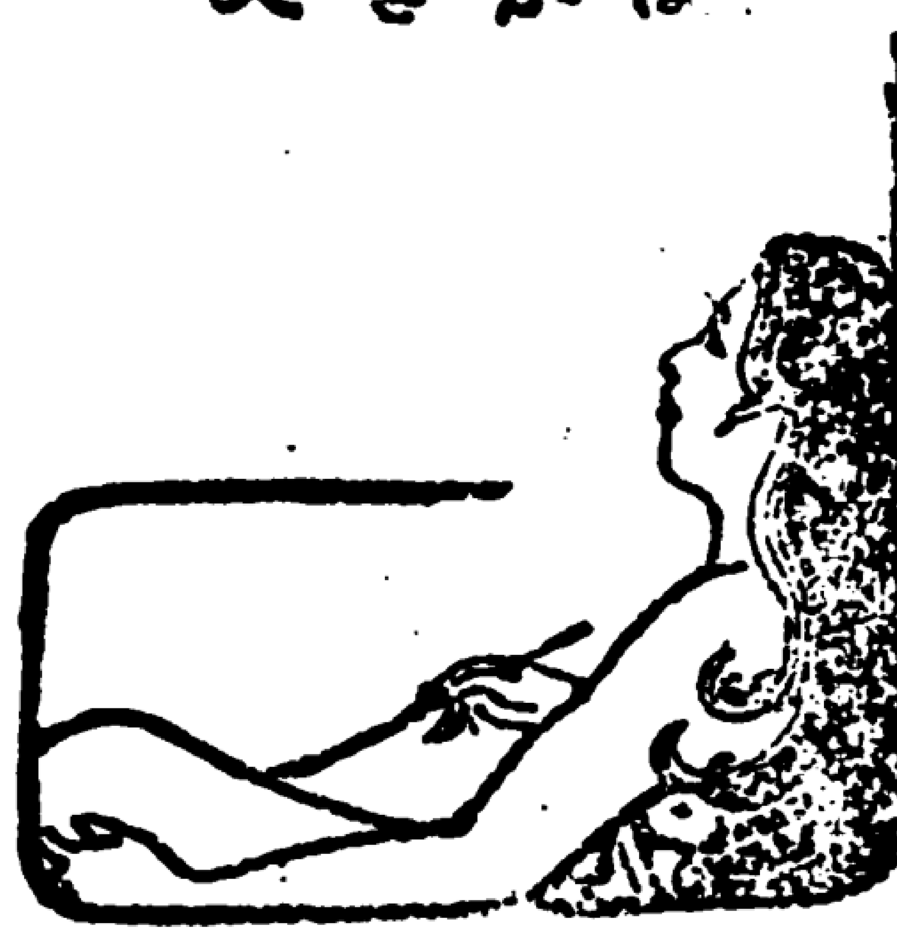
俳句

巖谷小波先生選

紅筆に雛の日記ものしけり　小田原　倉橋よしえ
老杉を掠めて見えぬ遠花火　飛騨　竹原小鶴子
ゆきちがう騎士と騎士とや風薫る　横濱　きみ子
普化僧の笛ひやしゆく清水かな　伊勢　妙香
木槿垣卑しからざる長屋かな　大和　樫根恒子
踊はてゝ淋しき辻の地藏かな　越後　藤原文子
蚊遣して軍書繙く男かな　品川　小林のぶ子
黄昏や蚊遣に暮るゝ藪の村　伊勢　上田富雅
菜の花や繪紙をひさぐ京の人　京橋　矢代あづま
日盛りや河原撫子咲いてゐる　越後　曾我みつぎ
春深き野邊の芝生に寫生かな　靜岡　みどり
韓人が牡丹に暮らす日永かな　弘前　てる子
弘法の寺開きたる清水かな　信濃　山浦楓月子
金響をふとおとしけり春の水　小樽　岩谷綠子
うめの上柳の上やはるの月　北總　白菊女史
緋牡丹に律院の晝靜かなり　石見　歌の子
禪寺の筧の音や落椿　安藝　靜萩會
鹽鯖の賣れよき麥の在所哉　和泉　小百合女史

春の海兎の木舟霞みけり　麹町　原田はな車
夕立や南を見れば雲の峯　印旛　霞川女史
はつ秋をしるや夜明の笹の音　下總　酒井ふみ江
吹き上げの雫かゝりし寒かな　下總　人見清子
旅僧の珠數を忘れし清水哉　紀伊　阪本春子
古樽や乾鮭ひたす水の溜り　香川　金星女史
初冬や都へ急ぐ薪船　埼玉　大塚にしき
古塚や卒塔婆にからむ蔦紅葉　相模　小林英子
今ぬいだ簑に虫なく草家かな　相模　伊藤靜子
明月を車たのまず戻りけり　上總　小川とり子
萩寺やひそかに踊る法師あり　羽後　伊藤幻
手燭して色失へる黄菊かな　秋田　黒丸TK子
女祈る鎮守の杉や三日の月　埼玉　大野斷琴
夏の月海邊に卓を移しけり　愛知　徑子
歸り花待ちし海路の日和哉　磐城　武者雪子
すゝぎする媼がそびらや桐一葉　土佐　景石女史
稻妻や頭上にくらき杉の月　伊勢　中西梅酒子
夕涼み月を課題の運座かな　下毛　菅谷山哉
撫子や馬よけし人にふまれけり　上毛　和田末子
月の夜の十六橋や人涼む　千葉　石渡赤星
桃散りて空家となりし茶店哉　臼杵　平川正子
青簾風鈴吊す女哉　横濱　風間笹泡子
米櫃や窖に藏す柿二つ　富岡　安部信子
涼しさは笛吹き交す舟と舟　伊勢　歌子女史
堤通る二人涼しき月夜かな　京都　錦衣女史

はがき文



編輯局選

天 ○胡蝶

上野國太田町入町金山の麓　大沼なみ子

「綾ちやん」私は花摘んで居る妹の名を呼んで、蕎麥の花が眞白に咲いて居る中に隠れやうとした、すると今迄見えなかつた白い羽の胡蝶が、五六對睦れ〳〵て舞ひ上つた、あゝ私は如何な夢を驚かせたのであらう。

金々先生榮華の夢。

地 ○花日記

長野市旭町　富田小芳

今朝は、朝顔がたつた四つ、明日咲くつぼみが七つ、それに八重百合が初めて一つ咲く、去年より十日もおくれて、松葉ぼたんの肉色と白とがうつりよく日のてらすのを待ち顔に見へる。

朝顔の起床時間など。

人 ○私のしごと

神田南甲賀町八番地　須藤元子

この間學校でほどいた一つ身の單物を私一人で張て生れて始めて一日にぬつたらお母様が褒めて下さつた私はしごとが大好、大きくなつたらお母様がよくしごとを敎へて下さるとおつしやつたからうれしくてたまらない。

ほんとうの事ですね。

秀逸 ○水晶を愛す

愛知　とし子

鑛物中にて妾は水晶を愛す群生せる一塊の中央に尖塔式雙峰をなして屹立する樣は羅馬の古城に彷彿たり針狀なる電氣石を包裹せる草入水晶は嫌なもの也妾は無色透明にして鉛鑿の如きを好む。

羅馬の古城を甲州に擱る。

○蝶の墓守

神戸　山本初子

今朝姉様のお墓へ詣つた、其時二つの蝶がお墓のまわ

りに飛び回つて居つた、私がお花を立てると直ぐ飛んで來た、そして私が歸るまでお墓のまわりを離れなかつた、本統に此蝶が姉樣の墓守を永く〳〵してほしい。

永眠の姉、安かれと。

○屋號　　金澤市　大地波子

古本屋の温古堂、藥種店の希淸軒、扇子商の僊風堂なども一寸面白いが、小さな店に駄菓子類を少し並べてある家の軒に、其蜩堂と書いてあるのは思ひつきてある。

時圖君被考の材料。

○私の幸福　　遠江　白菊

御父さんは中學の校長、兄君は大學の文科優等生、御姉上は女子大學英文科生、夏やすみには御父さん兄君姉さん皆御かへりになり、一家團欒して實に私は幸福です。

學者の血統。

○妾の希望　　横濱在　澤田かなめ

妾は今迄下田先生の樣な立派な教育家に成り度と思つて居りましたが見れば教育家は雲の樣に簇々出來ますからこれは一番語學でも研究して外交官の奥樣と成つて良夫共々海外で充分腕を振つて見度いと思ひます。

語學は佛蘭西。

○美音　　福島師範　磯村女史

我家の屋根が見えるので一心に急ぐと、青葉のかげから「相馬流山聞きたきや御出て五月中の申御野馬追ひ」鈴を振るやうな美音、彼女と妾の胸に沁みた、歌の主はと見ると彼の學校の御友達、思はず「アラ靜江さん」

東京出る時は涙で出たが……。

○偶感　　秋田　黒丸BN女史

妾より前に妾なし、妾より後に妾なし。妾を信ずるものは妾、妾を重んずるものは妾、妾を貴むものは妾、妾は妾を以て妾を護る、おのづからなる天地なり。　棄

自愛せよ。

○瀑布の前に立ちたる時　　赤坂　森ふさ子

急流を逆さにした如う、正面に視れば心も底深く落ち行く大瀑布の前に立ちたる我、物凄き水音の轟々たる間に破れて其飛沫の遠く蔦の葉をゆるがして胸に迫りし時日頃の野心全く消えて冷々たる心水よりも淸し。

淸きものは妄りに命を捨てず。

○賢書　　和歌山　佳月女史

今日は大變あつい、午後は妹の美津子ちゃんと書物の土用干をしました、其中に古い醫書が多くありました多分妾の家には醫者をした者があつたのでせう。

先祖は神農氏。

○好き〳〵　　静岡　大島ちさ子

お父様はうたひがお好き、お母様は何にでもお好き、姉様は書がお好き、弟は繪葉書が好き、妹は人形が好き、小さな弟は汽車がすき、私は音樂が好き、玉は鼠が好き。

そうじや　（選外）

一家美術家揃ひ。

○むらさき　　大澤白百合

春魁て佐保姫の乗り給ふてふ初霞と、女學生の袴と、ハイカラ黨と、希望と慰安と、戀の色とを代表したるは紫にて、可憐なるは春の菫、情趣深きは秋の桔梗、そして今私の縫ひ居るは大好な藤色の紋付羽織。

筑波紫、江戸紫。

○早少女　　佐世保　楢崎鈴子

綠波浴々たる中に、一帶の紅河流れたり。是田植時の早乙女の帶なりけり。

新錦帶記。



○王の樂み　　近江　宇野民子

波斯王は猫を蓄て樂み、埃及王は馬車に乗て速く駛くるを樂み、丁抹王は鳥の卵を集めて眺むを樂みとせり土耳古王は異種の荷車を集めるを樂む、露西亞皇后は熱心なるトルストイ伯の崇拜者を私室内に留め置くを樂むとかや。

閻魔王は舌を抜くを樂む。

○危機　　紀伊　一少女

休暇を利用して姉様と夏蠶を飼ひ初めた、蟻蠶の内から大切に大切に、手しほに掛けて居たのに、二齢三齢頃からわるい病に犯かされた、此期が一番大切だのに、噫々妾等も蠶と、同じ樣な時機が來るのか知ら。

大丈夫。

○日傘　　わすれな草

大姉様のお日傘は白綾で、今に私の姉様になる松平の

君子樣のが水色、仲よしの波子さんと私はピンク……お揃ひなのよ。父樣ほんとにお可愛想よ……紋も縞もないまつ黒で……。

白は色の始、黒は色の終。

○蝶　　讃岐　佐々木しづを

薔薇の花の白き處、都草の殘れる花の邊り尚戲れ飛ぶなる蝶々！汝は已に終焉の迫れるを知らざるか、あゝ可憐なる蝶！今秋の氣漸くこめて晨夕の風いとゞ冷さの増したるに汝の臥床は尚ほ暖かなりや否や。

翅の白粉も落ちたるよ。

○筑波のぼり　　茨城　とく子

時は三月二十二日進機先導にて一行四人吹雪を冒して筑波の峯に攀登した、男體山の絶頂に達した時忽ち雪霽れて遙の御空に燦々たる日輪を仰いだ時ほど愉快であつた事は未だ曾て有ません。

女體山にも上れ。

○秋は來れり　　仙臺　村瀬かをる

桐の一葉地に落ちて蕭條の秋は來れり、垣の木槿花漸く多く、鉢の鷄頭葉彌々紅なり、仰げば隣家の柿の枝に珊瑚の如き熟柿三ツ四ツ、歩して踏む處落葉に聲あり、臨寺の鐘響きて夕風寒く我薄着の袖を吹く。

文、亦金風の聲。

○私の望み　　徳島　坂野白露

私は高尚な學問や地位とか名望とかは望みませぬ、慾は言はぬが二十町程の田畑を持ち四時の花、珍らしい草木、舶來の植物、其れから鷄、羊、豚などを飼ふて主人公で氣樂に暮らして見たいこと。

羨むべき女主人公。

○蓮花　　大阪　優子

宮の鳩、霧の中を羽ばたきする頃、住吉の逆橋に上りぬ、池の面やゝ明く、紅、白の蓮は寂寞を破りて「ポー」と其れから其れへ開いて行く。

霧に浮ぶ高燈籠。

○活人畫　　東京　葛の葉

緞帳がスル／＼と捲き上ると三井寺の一室、文机に凭つて恍惚と脊景の月を見入つて居るは紫式部……「アラ吉野さんよ」「ホヽヽマアよく彼麼に澄して居れてね」見物の連中の口の惡いこと！

忽ち幕。

○小さい風呂に　　岩代　根本松江

久し振りで故郷の風呂に浴して、身體中の塵埃を、悉とく洗ひ去た心地好さ、暫し己を忘れて居ると、末の

妹と姉の兒二人とが側になつて來て、入れて頂戴よ。

歸省して我家の渦に入る時、人は天眞に歸る。

○かめやの工夫　本郷　菊子

「お孃樣、」雨戸を明けながら「あのお孃樣女子文壇が來てますよ」「あらさうどこに」私はいつもに似ずパッチリ目を開いて、勢よくはね起きますとかめやは、戸にすがつて口もきかないで、只笑つてばかり居るのですもの。

かめやに特別賞を與へん。

○宿屋　下總　武田たき子

妾と兄さんと筑波町のつかたやに宿ると夜雨戸しめなくつて、障子だけにしてあつた、惡人がをらないのかしら、全國に公德心滿ちてこんな樣に仕たいと思ひましたの。

都會は賊の府、恐び盡し。

○うれしさ　橫濱　あやめ女

女學校の試驗を受けたが、不出來なる事明かなれば、發表の日に、皆の來ざる中に見に行きしに、案外に我が出て居た、其ときの嬉しさ、未だに忘れず。

あんじるより產むが易し。

○海　岩代　岸野常子

世界の山々を悉く崩しても海は埋らぬ、世界の川々を殘りなく注いでも海は溢れぬ、幾億年間赫々とお日樣は照して居るが海は更に涸れない、妾は此廣い〳〵海原を眺めた時に、どうして斯小さい望につゝ身を獨り泣たかつて心に叫んだ。

海國少女。

○十五年　愛媛　村岡花月

今十五年經ば兄樣は三十五、妾は三十二、妹は三十、弟は二十五。そして、兄樣は父樣に、妾も妹も母樣に、弟は大學、と思ふと何だか、樂しい樣な、きまりが惡い樣な。

女子文壇十七卷何號を其子が讀む。

○平和　南總　御園生かつら子

小供は庭の隅で花莚を敷いてまゝごとをして居る。鷄は軒下で餌を探して居る。南の暖い椽で喞へ煙管で繩を綯つてゐた翁はコクリ〳〵眠り初める。澄みきつた大空には鳶が圓く輪を畫いて居て雀は頻りに木を啄いて居る。

鷄犬の聲。

○枝豆　上毛　新居輝子

表庭の泉水の廻りへ老母が豆を蒔ました始め葉ばかりの時は誰もこいてしまひなさいと云ひましたが此頃實が澤山なりましたら皆十五夜のくるのを待て居ます。

老婆心の功。

○綠　羽後　松田せい子

綠は理想の色である、其の高潔で奥床しく到底紫などは比較物でない。松の綠は吾々女性の特質を代表して犯すべからざる威風凛々、菫の如き薄弱洒落は妾大嫌ひ、何れ妾は世を悉く綠に同化させる精神なのよ。

天の色、海の色。

○下りる人々　羽後　前田久子

汽笛の一聲と共に終列車はプラツトホームに横はりぬ、下りる人々の千差萬別洋服のお役人あり或は商人あり外人の女夫連ありハイカラ然たる紳士あり或は男學生の歸省するあり待つゝありし妾の姉も共に下りぬ。

○汽車の窓　尾張　渡邊霞石子

『では用心して風邪を引かないやうにね』『は、有難う、皆さんにどうぞ宜敷く』『そうして淸心丹は鞄の傍に入れてあるよ』途端汽笛一聲、懷かしき弟の姿は窓をすべつて跡へ〳〵。

○黑い程美しきもの　相模　岩田小春

洗髮に香油をつけた日本人の頭毛、殿方の髯、いつ見ても愛らしい人形の目玉、硯洞文の筆の跡、染たての女の袴、其外儀式の時學校に着て行く七子五ツ紋の禮服、印度の美人。

○故郷の寫生　周防　山上照子

今朝裏の山に上つて見ると、遠く保木川が湖に入るあたり釣舟が二三艘近くは向ふの山畑で働いてる爺さんと婆さん、私が寫生を始めると爺さんが「婆さあ彼處で長井のお孃さあ何してるだあ」「オホ丶丶丶」。

○私のほしい物　大阪　花岡露枝

私のほしい物は人樣のとは一寸ちがつてない物がほしいのです、親の姉妹と慈愛深き兩親。

○なりたい　神田　沼尻きん子

大きなお屋敷の子になりたい、立派な着物が着たい、立派な兄さんや弟がもちたい、そしてやさしいお母さんと一所にいゝ所へ行つて見たい、そこで東郷大將の樣な立派なお父さんをもちたい。

○私の希望　本郷　ちか子

いとも恐らしき病魔の爲めに、身うごきもならず、くるしみ居る哀れなる多くの人々の、母とも姉ともなりて、我が力の及ぶ限り、親切になぐさめつゝ、一生獨身にて暮したいのです。

○じれつたいこと　鹿兒島　白菊女

折角お友だちがいらしつたからと、漸と作つて出したものをいやに遠慮ばかりしてたべない時、玄關に來てまつてるのにゆるりと着がへなんかするのを見るほどじれつたい事はない。

○竹ちやん　下野　菊地楓子

月はかくるゝ夜明の景色夢でありしや明がらす……今年十六の竹ちやん白い手拭を姉樣かぶりにして毎朝美しい朝日の光を宿した白露をふみしだき馬の口を引いて宇都宮に唄いながら通つて居る。

○歸省中　宇都宮　小森谷あき子

家の兄はおかしい事に何かと言ふと「命の洗濯だ」とか言つて朝なんか弟に蚊帳を疊まれるのも知らず寢入つて居るのです、其の時私は早く起きて御飯の仕度を手傳ひますと、庭先きの朝顏が白や、赤や、紫に笑つて居ります。

○偶感　秋田　大越みさを

私は他人の樣に立派な家に住まんでも美しい着物を持たんでもよくあり

ます、只夜はお父さんやお母さんと野良へ稼ぎに出、夜は女子文壇に向つて諸嬢の作を讀むのが一番の樂しみてす、そして筆と紙は私のお友達。

○蜜柑　越後　狐濱女

其の汁は殿父が殿ざめにこよなき惠みの露、其の皮は干して翌年の蚊やりに上乘、針持ち書を讀む一園之をたけば、蚊軍更に襲はず、けむからずして然もえ知られぬ香を薫す。

○さすまり　水戸　しげ子

早起して、裏の田や畑に露のかゝつたのを見て、朝食なし、母と兄と繭を乾燥するのをお手傳して、あとは書齋へ入つて、女子文壇を開きます。

○一時間　牛込　すみれ

あゝ一時間、英雄の時あり、文豪の時あり、發明家の時あり、しかも我其時をもつなり、如何にして我時をすごさんか。

○おみやげ　千住町　宮崎ゆき子

今年の夏休みには、自分ながら感心する程よく働きました、水も汲みました、ご飯も煮きました、茄子も南瓜も瓜もお芥も、皆こしらへました、てすから學校が初まつた時只手の豆三つ之が先生へのお土產。

○月姬の戀　南多摩　中島　耕子

夕のみ神が、つれなくも月姬をすてゝ西の端山に入りました、月姬はあまりの戀しさに綾雲にお乘りになつて、夕のみ神の跡を追ひ／＼て行きましたが、何時しか玉の眸子には美くしい淚が一ぱい宿りました、それが下界に降つて一夜秋草におく露となりましたとさ。

○祈　千葉　石渡村女

私が無名の土積に天地の大自然を眺めてゐますと、宵闇の眼がそろ／＼霽れて十六夜の月がおぼめき初め、甘く薫ずる樣な風が頰を撫て、云ふ

に云はれぬ好い心地てす、私は何時もかういふ時に神樣佛樣へ祈を捧げます。

○大松　山陰　しのぶ女史

妾が朝の六時半頃いつもの窓を明けて習字を致して居りますと前の泉水をへだてゝ一間ばかし先の大松が妾を勵ます爲かいつになつても枯もせず綠したゝる色をしてじつと見て居ます。

○友　栃木　まこと

學校に居る中、たとひどんな事があるとも、決して変は變るまいと、誓つた友も一度別れると、もうだめ、あゝ、妾は、眞の親友がほしくてたまりません。

○不解　尾張　野咲すみれ

今の女學生はよるとさわると屋たゞすみれだゞつて云ひますけれど一体あれは何の事なの？私にはちつともわからなくてよ。

○親の心　韓國　平壤　靜女

弟が二人寄ると直大きな聲て爭ふのよ、すると母はお叱りになる事はなるが陰ては其鎬なを喜んでゐらつしやるのよ、二人がおとなしくしてゐると母樣は身体のぐわいでも惡いのでないかと反て心配あそばすのよ。



月夜（選外）　名古屋　岩田壽々子

○目につくもの　東京　芝野　吉江子

大祭日の國旗と、脊田に白鷺と鐵に烏それからお友達の君子さんのリボンと書店へ行つては女子文壇、家に居ては姉さんのバイオリン。

○水力　靜岡　提坂みどり

二三日間の降り續きて大井川は滿水とのはなしてすから友人と堤へ登りて見る、上の方よりは所々に架設して在りました大橋が流れてきますやら林木が流れてくるやらそれは／＼水の力は非常なものでした。

○蟬と人間　　横濱　成田よしを子

油蟬は體が大きくてさわがしいから露國人。みん〳〵は奇麗で强さうだから英國人。日暮しは名の通り怠け者だから朝鮮人。「おゝしいつく」は小さくつて須走つこいから日本人。「じい〳〵」は先へ死ぬから老人。

○私等の時代　　駿河　松の露

私等の時分は、少しの害、恐も非常に感じる、て此感じる動作に依つて種々の變化がある、けれ共此時代は私等の希望の充満して居る時なのであるから、人間一生の中で、又とない、愉快な時と想ふ。

○結婚式の髪　　酒田　柳子

明日の式に祖母樣は高島田にと、母樣と叔母樣は丸髷に、兄樣と姉樣はこのまゝひさしがいゝと、私も此れがいゝけど實際はどれがいゝかしら！

○妾の希望　　羽後　菊池露子

兄さんは廿五で田舍の敎員、妹は十て叔母の元、妾は今師範生て日夜勉學にいそしみ、末は高等師範に勇進する覺悟、而して將來は判任は愚か、天晴奏任の月桂冠を得て、あゝ今のこの哀れな家庭を救濟せなければならぬ。

○曉　　鹿島　横田よれ子

濃紅色の霞は東天を飾り、次第に淡く黄に變り地平線を離れて時の間に魚鱗の如く空一ぱいに擴り、遂に何處へか失せ、閃々たる旭は馬子の頭へ斜になしげもなく光を浴せ、萬物初めて活動す。

○理想の花　　陸奥　國の花子

氣高いのは白百合の花、忠實なるは赤い薔薇の花、謙遜で可愛のは野邊に咲く小さい菫の花。

○投書　　千葉　林よれ子

妾の投書は夕星の樣にだん〳〵現はれるですよ、今までは沒書に沒書を願れましたけれど、倦まず撓まず投書しましたから、斯く發載の榮をえました、其のよろこびは何にたとへていゝかわかりません。

○秋風　　宮崎　波岡まつよ

淋しい秋風の玉川ヶ訪ずれた頃力のない夕日に此の哀れな姿を送られたのも、はや一年たつて、つめたい月の光しげき虫の音、そゞろ武藏野の秋と老いたる母を偲ぶ、オー身にしむ秋風、あゝ來年は何處で吹かれるやら。

○知る顏　　美濃　内藤みち子

私が此間隣村の鎭守の宮の前を通つた時でした、それは丁度盆でしたから、いつものあの可愛い姿で花賣に來る娘が盆踊りをして居たので思はず立ちとまつて見とれて居ますと娘の子も私を見て顏赤うして、うつむきました。

○時雨　　群馬　ふみ子

秋のさびしき時雨の一日机上の讀書に倦みて窓をながむれば大きな蜘蛛が一疋廂からなりてきた。

○女郎花　　下野　園子

親しき友と植ゑし女郎花、秋と云へば、黄金樣ゆう咲きたるを、眺め入りし夕の庭、通りがけの彼の君に一枝をと望まれて、さらばと參らせし其夜の日記、たゞ羞かしかりし夕とのみ。

○私の毎日　　名古屋　原田夢子

私はあのお別莊や村長樣の所へ日々雇はれて行くのです、そして御用がすむと其日に頂いたお錢の幾分でお酒を買つて歸つて來ると、丁度お父樣は仕事を終つてヤレ〳〵とお休みになつてゐるところです。

○光　　石狩　羽衣

晝のように明るく光るのは電氣燈の光、やさしく光るのは月の光、きれいに玉のやうなるは星の光、物すごくして心持わるきは電光、凉しくして人々に愛せらるゝは螢の光。

○とんだ眉剃　　本郷　朝井千とせ

今し浴みを了へて椽先で女子文壇を讀んで居ると「姉さん僕がお白粉を付けて上げよう」突然瀧元がチクリ、まア未だ新しい機剃だわして。

○七草　　靜岡　白百合

七草をとり揃へて机上の瓶にさし六つになる妹の松ちやんをよんでどれお一番おすきと云へば、暫しこれよと女郎花をさす。何故と云へば玉子のようだから。

○船の出入　　神戸市　[illegible]秀子

朝にアリナイツシユメール、晝はアメリカメール、夕にウヤマンメール入港すれば、早や翌朝影を見ず、又もフレンチメール、ウヤパンメールの入港と聞く、此間始終商船の出入あり、さぞ海の神はけむくあろう。

○胡蝶の夢　　[illegible]館　清子

或る日妾が學校から歸るさ、向ふの野徑にあまり奇麗な董が咲いてあるので、態々道を廻つて摘うとしたら、小さい蝶が一羽靜に眠つて居るので、妾は此の美しい平和な夢を破つてまで自分の希望を遂げうとは思はなかつた。

○姉妹の務　　安藝　池之子きよめ

妹は常にお臺所の受持、お座敷のお掃除は姉さまの受持なの、或日代つて姉さまが炊事をなさると何も乎もまづい事、妾の掃除したお座敷の隅には塵が殘つて居ますのよ。

○あゝ其のとき　　神田　高橋桂子

今まてまことの兄樣々々とばかり思つていた兄さまが、妾しの未來の夫と聞いたとき、あゝ其の時！妾しはどんなに嬉しいやら、はづかしかつた事でしよう。

○富士より　　小川柳[illegible]

六根淸淨の聲勇ましく七合目の石室を出て只今頂上致し候八月八日午前七時半近年稀なる晴天とか强力は申候有名なる日出を拜しこれより下山甲州御嶽に登べく同行者皆無事御安神下されたく候。

○妹の短冊　　横濱　吉川英子

顔な洗いに井戸端へ行くと、傍の朝顔の垣に紅い短冊が下つて居るので見ると『朝顔や水を貰つて有難う』と假名て書いてあつて下に露子としてある。後て露ちやんに其譯を聞くと、今朝朝顔の露て手習したら大變上手に書けたからと、ホク〳〵顔。

○なければ錄　　[illegible]島　小川なみ子

慾、煩悶なければ厭世の念なく、富、位なければ煩らるゝ憂ひなし、惡寛なければ蒼穹に月照るおもひ、罪なければ邊ぐらるゝ秘密なく、人の世永久に靜からむ。

○與作の鳴子　　岡山　[illegible]崎光子

與作が變な鳴子を肩に出て來て、香稲の穗首げの中にチヨキンと立てたサア出來上ると雀の綱引が始る、ガラン〳〵チユン〳〵〳〵ガラン〳〵チユン〳〵、オヤ又一羽。

○紅　　北海道　くれなゐ子

日の出の色、夕燒の色、生々とした小兒の頰の色、春の花、秋の紅葉、理化學的に分解してはいざ知らず、何れ私の好きな紅の色素が含まぬは無い、嗚呼何と壯んな色てはあるまいか。

○朝日　　佐賀　琼子

東天白みそめ太陽はたなびく白雲の中より金線をパツと水にたゞよふ浮草の其上に。仰ぎ見れば太陽はすでに見へずたゞ千條の金線のみ。

○幾日かある　　本郷　則本しげの

人生僅か五十年、夜半をのぞけば二十五年、又老少の時期を引けば十餘年、其の内事故疾病等に費さば、餘す所僅々七八年のみ、もしそれ其間に於て尙、寒暑を避けんか、眞につとむる時日はた幾日かある。

○申譯がない　　澁谷　白衣生

母樣が御臨終の際に私が手を御とりに成つて何卒弟の事を賴むと仰有つたが當時五歲の弟は間もなく母樣の跡を慕つて亡き數に入つた嗚呼私は何とあの世の母樣に申譯をしませう。

○父上のお顔　　埼玉　戸張とめ子

妾の父上は、今年の稲の出來に大喜びて、米がとれたら家内中そろひの着物をこしらへると云つて居ましたが、先日の大風雨に、ずつと以前の

しぶい御顔にあともどり。

○暖い日　　岡山　芳艶女史

金をもとかす三伏の炎暑も夢の間にと過ぎ去つて此頃は早朝などは空照る朝日が戀しくなりました妾は暖い椽側に出てお裁縫をして居ましたら今年生れた小猫が遠慮なく妾の膝に上りまして丸くなつて眠りました。

○勝山城　　岩崎きよ子

格子の窓から見ると花屋の裏の糸瓜が垣の外へぶらさがつて居る、眼を轉ずれば勝山城が油繪の樣に美しい姿で立て居る、餘り好い景色なので見惚れて居ると、後から姉さん……吃驚り、妹の花さんてあつた。

○徃來の瞬間　　京都　かすみ子

ソラ小僧のしりからげ、紳士の自轉車、合乘俥の駈足、行き過ひに女學生の三人連、其後から勇ましき軍歌を唱ひたる生徒の一隊、向ふから來るのは某家の若旦那。

○御土産　　長門　秀翠女

皆さんは故鄕への御土産としてオペラバツクはぎつしり、あゝ妾は其裏さへ持ちませんけれどちつとも悲しいと思ひません、然し妾にも御土産はあります、心をこめた、それは此健やかな身と通知簿の點と二つてす。

○私のゆめ　　姫路　森田まさ子

朝から夜まで繼母に追ひ使はれて一寸でも休むとたゝかれるやらぶたれるやら、苦しい内に寢る時分となり床に横ると私は誠の母樣に抱かれて天國に遊ぶ夢を毎日々々見ます。

○亡き母　　因幡　中村みのる子

女教師に美貌のは無いやうですね。だからお前もちと勉强して、でも橋本の花子さんは美人てしたよと謂ましたら、そんなからあんなにおなりですわと申された母樣は亡くなられて今年て三年私は勤てから丁度四年

○子供　　堺市　竹叟文子

お月樣の黑い所は兎のやうにも見へますねーツて隣のお友達に話して居ると、それを聞いた妹や近所の子供はもう輪を作つて、うーさぎうさぎなあにを見てはねるつて、歌つて居るんてす。

○荒神堂　　豐前　藤本千代子

苔蒸せし大廈を後に半崩れかゝりし荒神堂、廻らせる注連ふりて、捧げし黑髮の白う風に亂れ、折々怪しき鳥の木の間を翔ける聲凄し。

○私の理想　　熊本　白水

侍女は老人一人て家は和洋の二通り、配置間取共に宜く恐れ多いが庭の過半は吹上禁苑に象り殘りを運動場に當て、好きなテニス、ブランコをするつく、そこて運動を盛んにし决して人力車なんかに乘らぬ積りです。

○心配　　備中　みむら

心一つに見惚れて居た文壇を打伏せて、ふと我にかへれば、お飯は上迄赤くなつて居る、オヤまー如何しやう、先日もお菜に水を入れずに、父樣に怒られたのに、またもお本に現をぬかして、何んと申わけしよう。

○下宿屋　　美濃　西村秋凉

私の下宿屋は場所とちがつて居りますので、私の居間は一つもないので而から主人や娘さんと一緖にれるのです、其れても下宿屋の看板が上がつて居つたから下宿をしたのです、全く之れは茶屋てした。

○濱邊　　相摸　磯千鳥

私ひとりて涼に出ましたらば岩の上に腰かけて居たのは海軍中尉の軍服めした若い士官と十八九の美しい方てした。屹度奥樣よ丸髷てすもの。あゝ若い士官に美しい奥樣、波さんみたいな氣がしました。

○小天使　　福岡　増田一子

小兒は神なり、邪僞りなく、やさしき物ありとても、小兒に若くものはあらじ、雛もてあそべる小娘、むく／＼と肥え太つたるうるはしき洋犬を伴れて、千草の花に掩はれて、すや／＼と眠る子どもの顔を見れば、神を見る心地す。

○月夜の海　　横濱　山口直子

今し鏡のやうな月は、水が空か空が水かわからぬあたりから徐ろに浮び出ました、魚鱗のやうな漣波を照らしては御空の星とあやまたれ、踊る

海波に映じては走る金龍の樣に見えます、こんな夜に乙姫樣が海の上にお遊びにお出になるのでせう。

○妾の望み
上總　篠つな子

妾の望み、決して海老茶袴にリボンの大幅てなく又ハイカラ書生さんに愛せられたいてもない。只早く百姓の上手な夫々持つてよく事へ米の百俵に麥の五十も取て可愛い子供を養育し一生此樂しい田舍て暮したい。

○獨り言
下總　笑芳女史

こんと學士の位を得て歸りました高田樣の隣に富兵衞と云ふ翁は金や田はたくさんあるが學問をさせる事が出來ないて子供を小學卒業するとすぐ百姓につかッてゐますと高田樣が歸ッて來たので田地賣ッても學問さして敎員にしたかッたと獨り言。

○金坊
神田谷文子

『お待遠う樣』と臺所口て聲がすると金坊『ヤアお壽司が來た』と皿を持て座敷へ來る母の袂を引張る。母は耳に口『お客樣が歸つてからてすよ』『さうお客樣が歸ると赤いお壽司を金坊にお呉れよ。』と大聲。

○古里の夕暮
靜岡　深谷岩子

昔日は西山に落ちて、森々と暮ゆく、夏の夕空高く鳥は歸て影もなく、に變らぬ山々は、綠の色もいや深く、清水緩やかに、自然の美をばあらはせる、我古里の景色かな。

○徽章を頂いた時
兵庫　田中閏子

今日は學校の徽章を頂きました、その形は十字架の眞中に櫻花が一輪先生は、十字架は愛を櫻は大和魂を表して居ますから皆樣よく意味を覺えて何ても徽章と相談して學校の耻とならぬやうなさいと云はれました。



雨の日（選外）　羽後　波部みや子

○大好な物
京都　山川すみれ

木蔭の讀書友の音信給葉書交換活潑な女學生テニスにブランコそして虎やの御まんに甘納豆果物やの店頭に赤く艶々としてならんてる圓い物と此頃は氷けれども母樣の御好な裁縫が妾どうしても好になれないのよ。

○まゝ事
志摩　小林敏江

二人の妹上なるは七つ下なるは五つなり木蔭にて編物する妾のかたへに花蓆しきて睦まじくまゝ事して遊ぶ、「姉さんまんまま御上り」と、五つの妹の妾の前にさしだせし御馳走は赤き花びら三片と綠の葉二枚なり。

○蝴蝶さん
滋賀　宇野民子女史

白、黃、織り交へし此花園に、甘露すいつつ眠る蝴蝶さん、定めし花園日記には、淸き美しき詩文がありましよう、翩々と飛ていなさるお姿をして、我書齋にも來て一寸謳いなさいな蝴蝶さん。

○試驗
金澤　中泉綠子

小學時代＝面白し勉强はせずともよし平生さへ人並にてきれば＝＝中學時代＝心配なり平生はとも角此一度にて運不運を定めらるれば＝＝入學試驗＝大いに心配なり一生の苦樂の源なればなり。

○海
神戸　砂川眷子

嗚呼實に美しき景色かな波は碧く眞砂子は白し、松原の蔭より見ゆる白帆何處を指して行く舟ならん。洋々たる海原の波はさながら天より寄せ來るかと怪まれ水天一色にして恰も一大鏡を浮べたるが如くなり。

○私の願　　上總川島芳蘭

私の願は極安い事なんですよ。決して美衣美食を貪り、或は百萬の黄金を積むで、己獨のみ樂む事は望みませんん。どうか人間らしい人と成つて身分相當に、人を救ひたいと思つて居ます。

○こうしたもの　　大阪櫻木美智子

ピカツと光ツたかと思ふと生駒山のあたりでゴロ〳〵と大きな雷が鳴ツた、物凄い灰色の雲は大急ぎで進んで來る、豆大の雨は地軸も碎けよとばかり降ツて來た、アラ〳〵〳〵壁の乞食が驅け出した。

○忘　　和歌山林靜惠

忘も亦類多し。恩を忘るゝ者あり恩を忘るゝ者あり、分を忘るゝものあり身を忘るゝ者あり國を忘るゝ者あり。春を受くるもの謝らるゝ者信用を失ふ者恥をかく者笑はるゝ者皆忘れてぞかし。面白からずや。

○畦草刈　　信濃花溪女史

妾は母様から手を切らぬ樣にと言はれて父樣と畦草刈に行きました土用の最中兄樣と汗流して田草取した甲斐あつて稻はもう花盛り父樣は今年は豐年だ、御米を富士の山程御倉に積み込むんだつて被仰れた。

○年立ちて　　麻布すゝき子

年立つて忘りがちになるのは、友の眞詣て、同文通。年立つてこひしくなるは、亡き父母。年立ちて貴くなるは、御茶のゆの道具、人間なり。年立ちかへりて、つらきはおさんどん。

○母のたまもの　　横濱秋野子

分間たりとも忠實の二字忘るなとは母が書狀の末に必ず認めて下さるのです、私は又此二字は必ず五六度読返すのでした、で只今ではいかなる時にも我とわが心に汝必ず忠實なれと申す樣になりました。

○潮の香　　阿波仁木花汀

妾は朝な、海岩の廣い朝霧の街を眺めて、白波寄する渚をさまよふて居る、其愉快いこと！あゝ！美しく彼方に見ゆる風英の濱、其所にも妾と同じく淸い磯邊に無限の希望を抱いて、潮の香に袖を染る少女も遊ぶであらう。

○春子さん　　埼玉船津千代子

お隣りの春子さん小學校の時分は前髮を引つめた束髮に短い袴それはそれは活潑の方でありました去年女學校へお出でになつて休暇にお歸りを見れば廂髮とやらに大きなリボン、カヽトの高いクツに大道せましと歩ませ給ふ。

○お小言　　松江中村ちか子

此樣に、毎日一生懸命に働くのに、夫でもまあ小言の絶えがない本當にくらしい父樣等!!!御座敷で娘も日々二人でやかましく云ふものですからまあ普通の事は一すやる樣になりましてオホヽヽヽとは母の言葉!

○死　　神田漣月女史

半輪の殘月は西山に傾むき、沖には漁火の影も見へない、怒濤は岩を嚙んで飛沫は天をついてゐる、杜鵑一聲月に鳴いたが二の聲遠く〳〵荒浪に呑れた、かゝる夜人は巖頭に立つたならば必らず死たくなるてあろう。

○朝の仕事　　佐世保黒岩露子

歸省の翌日、叔母さんに戴いて、庭のお鉢に栽ゑた朝顔、妹と二人の手入れて、色麗う咲き初めました、白は品位高ふ、紫は情厚ふ、紅は其誠の心も見えて、最と嬉し、私は毎朝此の花を眺て心を淸く致します。

○海老茶袴　　埼玉加津子

今年は、お家の世話を私一人でいたしましたから、その御褒美に、父樣が袴を買つて下さるとの御約束、私と母樣は、老海茶に贊成、兄樣は大反對、あゝ都の姉樣は何れに御贊成遊ばすであらう。

○夕ぐれ　　白菊子

賤がすむ軒端に細う煙はたちて、大路のあたり乳をもとめて泣くちごの聲いぢらし、と聞ゆる鄙歌のこゑ、あはれ一日の業終へてたのしく歸り來る心いかに、門には彼が愛し子の小さき手のべて歸りを待つならむ。

○お祭　　神奈川もと枝

お祖母樣は島田がいゝと、お母樣は桃輪、兄樣は廂髮、そこでどれに結はふと、迷ふは私よ。



新歌論　　編輯局選

天

逸材（？）

菜種絞つた燈の油　蝶がこがれて飛で來る　○　香川縣高松市下横町八十五番戸太田方　岡益藏

地

逸材

今宵目出度や一人の姉が　天下晴れてのお嫁入り　○　相模　吟子

人

絶調

學校かへれば七つの子まで　馬をひきだす稻の秋　○　淺草區森下町十三　大沼きさえ

實景

秀逸

土手の秋風手あらく吹くな君はか弱な生れ付き　○　印旛　細谷さかえ

霞が浦から筑波山見れば稻は筑波に靡いてる　○　常陸　今泉義子

今宵十五の豆名月よ豆を食べたり月見たり　○　岩代　よね子

神戸出てから土佐まで行くに二日九十九里波の上　○　土佐　弘光芳子

花も育ちよ香も蕾からゆかし家庭の姉妹　○　姫路　矢島芳子

私しや秩父の炭燒娘父が木を切りやそばてやく　○　麹町　小草女

知らぬ御方にゆく道とはれ赤い顔する里少女　○　埼玉　吉敷里子

妾しや聞きたいあの追分を節もかすかに遠くなる　○　鳥取　藤井あやめ子

家のおさんはハイカラ下女でラブをアブじやとしやれて居る　○　羽後　前田久子

秋の寒風銀杏に吹いてこがれの扇そらに飛ぶ　○　酒田　渡部富子

父は炭燒き妾と母と働てこもあむたのしさよ　○　伊賀　山村りやう子

笑顔で開いて見る新聞紙故郷へ歸へる發車時　○　東京　芝野吉江子

今年これきりもう十二月又も一年としがゆく　○　常陸　大和田清子

なれば女も判任官に君もなりよて大臣に　○　鳥取　山根綾江

沖の鳥山狹霧に暮るゝ今日も歸らぬ君の船　○　天鹽　天の舍

○　常陸　清月
結ふて上よか都ではやる庇髮でも島田でも
○　越後　吉田りた子
泣いてくれるな今別れても死んだ身でないめぐりあふ
○　飛騨　萬幾月女
合せ鏡は琵琶湖と月よ磨きあげたる富士額
○　美濃　水村淺子
圓い世界に四角な家を乘せて廻るか大地球
○　和泉　白ばら女
私しや田舍の機織り娘一度芝居が見て來たい
○　新潟　なみ子
下に〳〵と槍擊かけて霞むよ陣笠花の道
○　若狹　津田雄子
出雲の指令も下らぬ内に自分免許の若夫婦
○　千葉　紫陽花龍雲
砧打つ娘と琴ひく姫と何方取らうと月に聞く
○　下総　萩原波奈子
早稲は刈り取る晩手は殘る殘る晩手に群雀集る
○　秋田　松田勢威子
山家娘の晴衣は秋の山の紅葉で織つて着る
○　磐城　片寄しな子
鷺の代りに蜻蛉がとまる裏の御池の玩弄船
○　神奈川　ゆたか
今日は曇り日起きない内に分る汽笛の遠鳴き
○　武蔵　山口邦子
君は都に何して御座る私しや山田に稻刈りよ
○　三河　歌子
橋の向うに絵日傘見えて流れよつたる筏の舟
○　越後　堀川弘子
嵐吹くたび畑の豆が秋が來たとてカラ〳〵と
○　本所　矢澤いと子

黄菊なり取る可愛の乙女母へ土産か手いけの花か
○　京都　橋本みつゑ
不孝して出た子なれど親は行方案じる秋のくれ
○　麹町　淺井千鳥子
孫も伜も嫁御も踊れ今年や萬作盆じやもの
○　徳島　小川なを子
嫁さゆきやるか婆あさもおじやれ稻さ刈るあと村芝居
○　愛知　曉花子
歸省してみる門邊の緣門妹が皆いたかウエルカム
○　沖縄　ふさ江
泣いて別れた鎮守の森で會ふて又泣く朧月
○　茨城　愛子
月の光を身にあびながら庭のベンチで默思ふ
○　群馬　飯塚美起子
左菜の畑右蓮華畑中を流れる春の川
○　下野　染宮臥仙子
土藏を九つ立てたる夢の覺めりや冷たい藁ぶとん
○　越中　北本卯月子
放心と大事の話は出來ぬ細い針にも耳がある
○　千葉　野田文子
まりをつき居る少女らみればつみのない樣な顔ばかり
○　秋田　小原ひで子
草を刈る子の苅殘してか野菊花咲く枯野原
○　滋賀　ことれ
琵琶の湖うしろにひかへ前は粟津の古戰場
○　横濱　波南子
お作與平と乘かる好い日野良で語るよひなの戀
○　上野　なみ子
故郷は上州淺間の嶽の煙みるたび妾しや泣く
○　姫路　しぶき
うちて光るは電氣とらんぷ猫の目玉にはげあたま

新笑話

編輯局選



天 ○帽子掛

上總國長生郡新治村桂　小川くに子

「良人には困りますよ、玄關に帽子掛があるのに何時も坐敷まで持つてきては、ピアノの上に置くんで御坐いますよ」「私どもの處でも左樣で御坐いましたが、此頃やつと止すやうにさせました」「夫で、もよくお止しなすつたのね」「ナニピアノを玄關に持つて往て帽子掛を坐敷に置きました」

地 ○ハイカラ紳士

靜岡　杉本靜子

氣障なハイカラ紳士が寫眞店に來て寫眞を撮らんとて先づネクタイを直し咳一咳其位直につく、寫眞師レンズのふたに手をかけ、ハイ撮りますよア、一寸待つて呉れ未だ香水をつけるのを忘れて居た。

人 ○富士山

渡邊紫川

甲女學生「富士山は何時見ても雪が有るが餘程寒いと見えるね」乙女學生「ナーニ掻き人がないからですよ。

○親展　安房　木村天仙

甲「君はなぜ端書へ親展と書くの?
乙「だつて手紙なら人が見ないが端書は人が見るといけないから。

○汽車　岐阜　女

ある田舍の汽車開通式に七十位のお婆さんも見に來て居つて云ふ事に汽車は早い／＼と云ふが、どれ、まー、馬がいく疋で引いて來るか。

○母のかず　奈良　白藤女

今日奉公に來た長松を呼んで、主人「お前の兩親はあるのか、長松「はい只一人の母が御座ります、主人「なに一人の母ばかりでは以前には幾人のお母さんがあつたのか：。

○古跡　山口　西村雨枝

或る女學生旅行して片田舍に至り一人の老人に「此邊に古跡はありませぬか」と尋ねると老人「へイ戸籍は村役塲にございます。」

○Look out　神田　大澤さゆり

米國へ洋行した一行が汽車へ乘つて出發する時、驛夫がLook outと叫んだので、英語生つ噛りの小才子な一人が利口さうに首を出すと向ふの汽車と擦れ違つて大層怪我をしたとか夫れは「氣付け」といふ熟語を「外を見よ」と誤解したからだと。

○大へん　大分　工藤　　子

或夜若者馬屋の二階にねて夜中ごろこけおちたがおぼへなかつた。よく朝おきてから大ごゑて「大へん／＼たすけてくれ馬が二階に上がつた」

○　京都　すみれ

子供「八百屋樣、今御前桃を三つ落して行たね、僕が拾つた。」
八百屋「夫は有難ふ。」と手を出すと、
子供「拾ひ賃として僕が食べてしまつたよ。」



誌友倶樂部

○記者より

○誌友倶樂部の發展。　誌友倶樂部が諸孃の精神的交際の機關、社交的娛樂の機關として日一日と發展して行くのは皆さんの御覽になる通りですが、差當り別に新しく欄は設けませんけれど、皆さんはいろ〳〵御考へを盡くして、交際の方法を新しく、面白く、美はしく、而して善くして頂きたいと思ひます、それには皆さんが誠實に交際して頂くと云ふ事が最も必要です、本誌の誌友くらぶに依りて、益友を得たとか、好き繪葉書帖が出來たとか、新しい編物方を覺えたとか、何かお互ひに利益になり且興味を助けるやうな事が有りたいと思ひます。皆さんが一人一人に其お心になつて下されば其れて結果は善くなるのです、一人でも不誠實な、輕薄な、いたづら者が飛込んで來るといけません。記者は成る可く注意して不誠實な人は入れないやうにして居りますけれど、何分大多數のことでもあり、開放主義を取つて居りますから、悉く誠實な方ばかりであると保證する譯には參りませんが、今後出來得る限り記者は手加減を加へて、此欄を純潔なる女子の交際場裡としたいと存じます。

○其文章に就いて。　誌友倶樂部の書き方に就いてゞすがネ、是れも別に注意しなければ何でも無いやうですが、實際は矢張多少氣を附けてお書になつた方が功力があるのです、譬へばです、交際を求めるにしても、只滿天下の諸孃に交際を望むと云ふやうに、曲もなく、昧もなく言つてしまうと、讀む方も一寸心に止りません、けれども自分の理想の合ふ人に……と云ふのも少しむつかしいてすが、新体詩を愛する人に交はりたいとか、俳句を作る人に繪ハガキが頂きたいとか、或は私も十六歲の人に手紙を貰ひたいとか、或は水彩畵を稽古して居る方と繪の交換をしたいとか言へば人の眼にもつき、標準も立つて交際するのに意味があります。ですから誌友倶樂部の文章だからとて通り一ぺんの紋切形の同じやうな文句を並べずに、何か意見を添へてお出しになれば、紙面もにぎやかに、讀むにも飽かないし、自然皆樣の御利益にならうかと思ひます。今迄にも然う云ふ方は相當にありますけれども猶は多くの方が然うするとよろしい、長い文章は困りますけれど五行や十行は文章さへ誠實なら勿論紙上へ出します、これからは然う深く骨を折らないても、一寸位は考へ持つてお書き下さると、誌友倶樂部だからとて、隅へは置けなくなりますよ、全くです。

○書式に就いて。　御歌所へ御題を出すのとは違ひ、書式の何のと面倒な事は申しません、面倒は申しませんが書式の亂雜なのは自然後へ廻つたり、紛失したり没書されたりする恐があるのです。明確に能く分るやうに書いて下さい、誌友倶樂部はハガキの分も採用して居ますけれど成るべく半紙に願ひたい、一枚のハガキに何十行となく蟲の這ふやうに認めてあるのは記者困らせですよ、ハガキなら多くて十行内外です。それから交際や交換を求めて置きながら、御自分の住所姓名を明瞭にお書きにならない方もありますが、没書です、勿論書くべきものです、圖書の交換にも成る可く自分の持つて居る書名を公にして、讀みたい書物を求めるのが礑です餘り慾張つて何十册となく書並べられるのも考へものです、寧ろ少册でも有力な書物の交換閱讀をなさいませ。話がわきへ外れましたが書式は右言ふ如く、能く分るやうに、鉛筆はいけません、紫インキ、赤インキも場合に依りていけません、墨が一番よろしい、一欄に載るものは成るべく一つの用事に限るやうに願ひますな

○諸孃と記者。　此欄に就いては皆さんに御相談があるのですが、今迄の例に依ると大抵本誌に關係したこと、例へば規定に外れて居ないかとか、書き方は何うであるとか、初めて投書するとか然う云ふ事が多いやうですけれど、此欄はもつと擴張したいと思ひます。疑問に充ちた世の中ですから、皆さんが尋ねたい聞きたいと思ひの事も澤山ありませうし、記者も亦愛讀諸孃にお數へ申上たい、お知らせ申したいと思ふ事も澤山あります。そこで此欄は諸孃のおはなしの欄として、文藝の事は勿論、社會的知識、敎育界、學術界の事から、細かに言へば御一身上の事でも或る場合には御相談にあづかりませ

う。勿論此欄に限り紙上には匿名でも雅號でも差支ません、別に文辭問答とか、社會問答とか云ふやうな一欄を設かうかとも存じて居ますが何分紙面が貴重ですから、一寸割きかれて居ます、皆さんが是非然う云ふ欄がほしいと思召なら、置いても宜うございます。又當分の内は此諸嬢と記者欄を擴張して行ても宜うございますですから分らない字であらうが、分らない文句であらうが、書物の解題であらうが、流行であらうが、東京の模樣であらうが、理想上の問題であらうが、出來るだけ諸嬢の疑問を此欄に寄せて見て下さい、記者も出來るだけは答へて見ませう、記者一個の意見で答へかねる事は先覺の名士に就いて答を御紹介申してもよろしい、只問ひの餘りに漠然として要領を得ないものは答へかねます。

◎諸嬢と記者

○記者樣當地では數日前に初雪が降てたいそう寒う御座いましたが東京はまだそんなでも無いてせうれ、だけ共だん〳〵寒く成る事てせうから御身御大切に遊ばせ　誌友倶樂部へ投書するには何行何字詰ですか必ず次號で御答へを（北海道福山秋野糸萩）（記者曰、東京では未だ霜さへ降りませんから暖い事です、所謂菊日和で十一月中は晴天が續きます、さておたづねの誌友くらぶ原稿は何行何字詰でも勝手です、只能く分るやうに書いて下さい）○記者樣私は田舍から東京へ當春參りましてまだ學も淺いのに是非一度文壇社へ投書致したいと存じまして去る七月の頃よりつまらないことを投書致しましたが、皆沒書許り少しもはりあいがないのです、ところが私の出し方が惡いのかも知れません今度は是れてよろしいのですか一寸記者樣に御うかゞひ申ます（本郷、石橋孝子）（記者曰、折角御投書なさいますのに紙上へ出ないでは張合が無いのは御もつともです、別に規定にも外れて居りませんが、今少し、しんぼうしてお作りなさい、出る時が參りませう）○記者樣女子文壇が誠に面白い故何時も手からはなした事がありませぬ或日文壇を持てハンモックに乘りました處が吊り繩が惡るかつたか其儘仰向に落ちましたがこれでも文壇はかたく握て居ました其後早々誌友に加りました　ホッ〳〵投書しますから何卒よろしくおねがひします（山口縣阿武郡小川村常子）（記者曰、マア〳〵おあぶない、何處もお怪我はありませんでしたか、此れからハンモックにお乘りの時は氣をおつけなさいませ）○記者樣のお世話なして下さるのは誠によろこばしい事です私は本誌の隆盛と記者の健康を祈ります（大分田中秀子）（記者曰、いつも行きとゞかぬ勝です）○懷しき記者樣　妾は貴社文壇を無二の親友と思つて始めから愛讀して居ります疾から投書し度く思つて居りますが拙くて恥かしく今迄扣へて居りました之から勉强して投書します元より學びの道には乏しい者ですから宜敷御教授を願ひます（京都朝顏）（記者曰、御遠慮なく御投書下さい皆樣は少しも躊躇せず　お出しになります）○記者樣當世流行とはをかしい樣ですがまあ〳〵當世流行の國文和文を學びたいですが何んな書を用ゐたらよいでしようか和歌の先生に尋ねましたら文あはせ（三十五錢）和文消息（九錢）がよいつて此の本は何處の發行ですか敎へて頂戴又外に好い書がありますれば敎へて頂戴よ失禮ですが御願致します（萩町無學博士）（記者曰、本社の女子文學叢書を御らんなさい）○記者樣御健康て喜ばしく存ます。さて一寸伺ますが、あの和歌の選評なさる佐々木先生の御家は何處でありますか敎示を願ます（羽州仙北郡藤木村高階てつ子）（記者曰、神田小川町一番地）○中村たかこ樣に答ふ、今一度本名を社內懸賞發送掛へ宛てゝ知らせ下さい○記者樣和歌は一首より投書は出來ないの又和歌は記者樣方の御題でなければいかないのして題は本誌のどこにありますか次號で御答を（越後高田孤舟）（記者曰、題は一度も出した事はありませんから、本誌の何處にもある譯はないのです、つまり題は何でも御勝手の歌でよろしいのです）○（一）圖畫はハガキに書いてもかまわないのですか（二）俳句、和歌、文章などは皆な何へ書いて投書したらよろしいのですか（三）又繪葉書も投書したらよいのですか敎へをれがひます（紀伊田邊小山みどり子）（記者曰、（一）ハガキではいけません（二）俳句を除いて皆半紙、繪葉書を投書して下されても困ります）○記者樣、私先月おつれのとこで女子文壇を見せて頂いて是程のいゝ雜誌はないと思ひましたそれから愛讀して居りますが農事の傍まづいものを追々投書しますて何分宜しゆう願ひます、一寸お尋ねしますが新歌語は一人三首だしてもよろしいのですか（滋賀縣甲賀郡柏木村大字北脇川島糸子）（記者曰、三首お出しになりましてもよろしい）○記者樣私は紀之川のほとりの極く淺學者です是よりどし〳〵投書します

おなほし下さい私の所に蜜柑は澤山あります來る天長節は見頃とおもひます記者先生皆様おつれだち御遊びに御出下さい御案内致します（和歌山縣那賀郡麻生津村畑中芳子）（記者曰、御案内をありがたう、蜜柑は紀伊の名產、正月のカルタ會にはお國の名產も記者の座右に積まれるでせう）○記者様もの丶哀れを集めてよする秋は來ましたさなきだに淋しい今日此頃をしめやかに咲き出てし秋ぐさのはなもいとゞ打しめりがちなる秋雨降りしきる折妾が机上にはいつも頂だい致ました玉蟲朝晴をおいて淋しき思ひを慰めて居りますに妾はまあどうした事でしよう今だにお禮を申上る事を打わすれてなりました今更おかしう御座いますがこゝにあらためて厚く御禮申上ますかしこ（赤坂區檜町十四森奕子）（記者曰、御丁寧な御禮、確に拜承いたしました）○記者様此の程はまことにぼんやりしたお尋れを致しまして失禮いたしました何卒再三まうしかれますが和文の參考書にはどんな本を用ひたらよいてしやうか委しくお敎へを願ひますそれから今度誌上にお出しなさいます時には私の名だけお出し下さいますやう願ひ申します（長崎市つな子）（記者曰、未だ分りません、和文參考書とは土佐日記や徒然草の類の講義書の事てすか、それとも和文を抜萃したものてすか、何れにしても澤山ある書物てす）○記者様私はこんな田舎もので御座いますが去年から本誌を愛讀して居りますのよ、今度私も少し和歌ても出して見たう御座いますが端書てはいけませんの、出來る事なら許して下さいな、願ひてすよ（越後國遠山萩子）（記者ヨ、半紙に願ひます）

○繪葉書交換

先着十名の御方に富町の名所繪葉書二枚一組のを差上たいのですから御望の方は至急繪はがきにて申込なさい（出雲國能義郡安來町姫崎通り六○八番地岩田初子）○記者先生様、貴社發行女子文壇愛讀者の多き事はいふまでも、ありませんが其の範圍の廣漠なるには誠に驚きました、そは繪はがき交換を同意して下すつた方々て知りました斯の如く津々浦々遠きは外國にまで發展されつゝあるは貴社成功上大に祝されねばなりません、また我々愛讀者の僥倖として喜ばればなりません、併して本月の文壇に賤名を掲載して下すつて以來今日まで惠投下すつた繪はがきの數と着した日とを餘白を借りて一寸紹介して見ましよう、八月三十日着、六、同三十一日着、二、九月一日着、四、同二日着、五、同三日着、二、同四日着、八、同五日着、六、同六日着、十二、同七日着十一、同八日着、十四、同九日着、十、同十日着、十一、同十一日着、七、明十二日着、八、同十三日、着、五、同十四日着、七、同十五日着、四、以上は九月十五日午後六時までの總數です、そうして皆それぞれ答禮しておきましたが何れこの分なればまだ〱下さるてしよう、皆様もどーか御遠慮なく惠投をたまひてよ——三春町の佐野とせ子さんこの程は以外の失禮しました何卒赦して下さいよ、あまり突然てしたのてつひ失禮してすみませんてした、今一度交換して下さいまし な實は先日の封筒を紛失してしまつたのよだからお尋も出來ないしまってす九月十五日後六時投函（丹波威松秋山しづ子）○諸孃様繪葉書新聞深山御送下され難有存じます何分人數の事故三十五名丈寫眞及繪葉書て御禮致しました殘り十六七名の諸孃には玆に厚く御禮申します（豐後臼杵町安藤貞子）○諸姉上様繪葉書交換を願ひます當地名所の繪葉書を返禮します亦寫眞御惠みの御方へは妾の見にくきのを差上ます但し先着五名迄（大阪市東區谷町五丁目五六、堀病院武谷室詰細井靜子）○諸孃様に日本風景の繪葉書御持參の方でわたくしに御送附下さつた御方には博多名所や紀念繪葉書數拾組ありますから先着の御方五名丈け御禮として差上ます（福岡市博多下魚町二番地福田いそ子）○色々の紀念葉書スタンプ付繪葉書の御交換を願ひ度う存ます（大阪市南區上本町二ノ五六印藤政子）○皆様何卒繪葉書や玉章の交換をして頂戴そして末長く御交じはり下さいな、一時的はいやよ（播磨國飾磨郡廣村田村秀子）○本誌愛讀の諸孃様私お願ひあるのよ、夫れは繪端書交換なの、ドーゾ美しひのを今から斯んなに首を長くして待つてよきつと〱下さいましよ、私も屹度（北海道龜田郡七飯村字鳴川の里、松井紫すみれ子）○諸姉上様どうか高尙風雅なる繪はがきに和歌、俳句、新體詩等を記入の上に惠み下さい御返禮はきつと致します但し十錢以上ので、（兵庫今出通二丁目壹番邸中川淵月）○どうか滿天下の諸姉様繪葉書を送り下さい妾もすぐ地方繪葉書て御返禮致します（千葉縣千葉郡千葉町千葉寺鶴岡勸造方鶴岡よね子）○私何より繪葉書を樂しみとして居ますのですから寫眞や繪葉書の御交換を願ひますよ、そして長えに變りなきやう、（神戸市江川町岡部登美子）○私し如き不束者へても交

際下さいまして有難く御禮申上ます今後も相變らず、繪端書や玉章の交換を願ひます必らず返事を致します(東京市芝區白金三光町四五、鯉淵方小濱隆子)

○姉様私れ當地のスタンプ付繪はおき貳拾種ほど持つてますのよ靖國神社及び觀艦式のスタンプ付と御換下さいませんか其他のスタンプ付も(大阪市西區薩摩堀北之丁天野方森本隆子)

○東京府。靜岡。京都。北海道に御出の方々御自筆ヱハガキ。外國製ヱハガキ。を永久に御交換を願升(東京日本橋區檜正町十番地小池方山本八枝子)

○都合により繪ハガキ交換中止す惡しからず…(駿河朝比奈村新舟山下よし枝)

○姉様方なにとぞ、繪葉書の交換をねがひます、そして上等繪葉書お送り下さる方は封筒にしてね、御返事はきつと致しますなほ末長くドシ〳〵と(神戸諏訪山大島ちさ子)

○皆様何卒紀念スタンプ繪葉書の交換を御願ひ申します(越後北蒲原郡紫雲寺村山中こう子)

○愛讀諸孃様妾と繪端書交換を願ひますそして俳句を書いてね送り下されし姉様には繪端書に寫眞を異色のを添へて必ず御送りします(加賀鶴來古町九三辻五甫子)

○皆様妾は和製舶來の繪葉書數百枚持て居ります就ては此度繪葉書の交換を始めましたから御贊成の御方はどし〳〵御送り下さいかならず御返事致しますそして上等の繪葉書御送りの御方には少し古いてしようけれども女學世界、婦人界、少女界其他いろ〳〵の雜誌小說等をも併せて差上ます(秋田縣平鹿郡大森町逢坂濟子)

○繪はがき交際の內に住所姓名局印に書されて御返事の出され無き御方が五名有ります此の後は住所姓名を少し大きく願います(和歌山縣有田郡保田村下中島小池濱子)

○諸姉へ妾し繪葉書と風景の寫眞大好きで御座います、何卒以後御見捨てなく繪葉書と風景寫眞御交換を願ひます(東京市麴町區飯田町二丁目五十一番地黑川かほる)

○肉筆繪葉書交換を願ひます(大阪市南區大寶寺町東二丁一六三長屋國子)

○誌友諸孃様妾は松本女學校を卒業した不束者ですが諸姉様の中にスタンプ付きの紀念繪はがきを御持參の方は袋入にて御送り下さい一組御送り被下た御方には當地風景寫眞大ばん三枚但し先着三名。二枚御送り被下た方には中ばん三枚但し八名。一枚御送り被下た方はに一枚に美しい繪はがき二枚を送ります(長野縣諏訪郡湖谷福田屋菓子店小松白菊)

○親愛なる妾が繪葉書交換の諸孃方よ誠に美はしき繪葉書給り有難く御禮申ますよ即日御返答はいたしましたはづなれども若しも不着の御方もあらせられなば一寸御申越を願ひますよ尙此後も幾久しふ愛讀諸姉様何卒短册に歌句を書てお送り下さい(北越ノ國長岡中學校前品田マチ方河內米子)

○自他雖の差は有ませんから一枚の方は當地新聞二枚以上の方は繪葉書てお禮致升(伊豫溫泉郡道後湯之町得能復古)

○私は繪ハガキ狂なのよ、血の通ふかぎり上等繪ハガキの交換を乞ふ、最も水彩肉筆をこのむ(大阪市東區高麗橋詰町六十六番屋敷酒井とし子)

○皆さん妾は勝手な事をお頼み申ます有名な紀念繪ハガキ紀念スタンプ付きのを澤山と送つて頂戴和歌か短い文を書いてよ何卒御願致しますよ御禮にはキツト美い美い寫眞繪ハガキを差上ます(山口縣萩町七十番地川濱騏子)

○諸姉上様ありがたう今後も又繪ハガキ交換をねがひます御禮には矢張肉筆油繪のを差上ます(佐渡佐渡郡畑野村字寺田小田方吉田すみ枝)

○妾も本誌愛讀者の一人てす、どうか以後よろしく御交際を願ひます、繪葉書の交換もして頂戴(大阪府三島郡高槻町上田部赤松春雨子)

○私は高等女學校の一年てす、繪ハガキの交換を望みます雜誌の古いのを差上ます(北海道函館區曙町七番地角本かつ子)

○女子文壇の愛讀者の皆さんよ! 美しいきれいな繪はがきの交換を望んてよ(岐阜縣武儀郡關町本町一丁目愛鄉舍內金森ふみ子)

○繪ハガキ交換ねがおひます、折々男の方からもまゐりますが妾はかまひません心さへ潔白であればよろしいからドシドシおよこし下さいな(大阪中の島六ノ五淺井方淺田たま子)

○妾も餘り風流くさい様てすが繪葉書の交換を望みます不及ながら返禮致します(耶麻郡山鄉村大字揚津瀧下粟田いちみ)

○皆さん繪葉書て御交際して下さい(下總行德町壹丁目中島あや子)

○とゞろ木様武藤様美しい繪葉書難有ございました御住所がけし印のためにわからないのですよどうぞ今一度御書面下さいませ御願ひ申ます(群馬縣新田郡太田町津久井德子)

○下總印播郡臼井町角來篠坂さく子(皆様何卒玉章の御交換もお願ひよ)

○本誌の愛讀者諸君よ宜しく今後の交際而して美麗な繪はがきの交換を願ひますよ(岐阜縣美濃國武儀郡關町相生町加藤裁縫舍內金森すぎ子)

○そが、いらへ滑りなく仕り侍らなんを、送りませや〳〵流行の繪葉書、文の往復も羅いとひ申さじ(東京芝愛宕町三ノ三水谷方大木無果花)

○愛讀者の諸孃様不束なものですがどうか ふみの交換や繪

葉書の 交換を願ひます但し男の御方はいけません（安房國北條町北丁俵屋方木村ひて子）○諸友諸姉様妾は玉苹や繪葉書の 交換大好きですわ御さんせいのお方は 御送り下さいな（岩代耶麻郡喜多方東町字四ツ谷大竹さよ子）○美麗なエハガキ御寫眞下さいな返禮として臼杵名所案內五册臼杵八景繪葉書ちと御氣弱乍妾の寫眞を差上ます但先着十八名に限る 住所と姓名は明瞭に記載して下さい（豐後臼杵町平川正子）○美術繪葉書交換を望む秀逸五名限り思出の記 不如歸の歌秀才文壇女子文學女子の友を添へ 答禮す（美濃國惠那郡遠山村久保原月岡舍市川覺子）○誌友の皆様繪葉がキ交換して頂戴な 上等のを先着五人限り自筆の六枚一組のを差上ますよ（常盤國高濱町東大橋九十一番地酒葉花舟子）○諸姉君よ 御寫眞や御手紙の交際を願ひます五錢以上繪葉書て御申込下され度先着五名に女鑑 を差上ます 繪葉書ヌスピトにはあらず（埼玉縣大里郡寄居町萩原忍子）○私も 本紙の讀者でありますから水魚の交り致します左の所へ 繪葉書を送り下さい（下總米本の櫻井定久子）○繪はがきの交換を致したくありますから 御賛成の御方様は下名へ御申込の程を御願致します、 御玉苹の御交換は 一切御斷りですよ如何なる御用事ても葉書てないと御いたゞき致しません（佐賀市松原町一五八たざき方内田汶蓋）○繪葉書及御寫眞交換を是非願ひたうござひます、 きつと御返事は相當品て致ますから（靜岡縣小笠郡南山村 松下節仙子）○誌友諸姉様、 花々しく 繪葉書交換を願ひます、 但し美しきを迎ふ、 短歌、 俳句を 添め惠み下されなば幸甚 （秋田縣角間川町羽丸とみ子）○愛讀諸姉眞摯なる交際を願ひます 併せて上等なる 繪葉書の交換を切望いたします（秋田縣角間川町うら町 松田せい子）○本誌愛讀者御姉様よ優美繪端書の 交換を願ひます（千葉縣印旛郡富里村大和萩の舍裁縫教習所内 萩原はな子）○どうか御心安う御交際の程 御願ひ致します又繪端書の御交換なすつて下さい 私の方からは美しいので御返事致ます （神戸市三の宮町二丁目一四八篠山益子）○皆様 內華繪葉書交換を願ひます、 但し水彩畫及び鉛筆に限る事（青森市古川町西谷梅子）○親愛なる諸姉様方よ 希はくは永遠に繪端書の御交換を願ひます（秋田縣横平町鍛冶町中文方大橋貞惠子）○誌友の諸姉様何卒繪葉書、 玉苹の交換をして頂戴、 どうか末長く御交じはり下さいまし、 御返事は決してわすれは致しませぬから。（播磨國飾磨郡濱村田村秀子）○私は五千哩のスタンプ付 繪はがき交換は更にやめに致します 其れから船來繪はがきの交換を願ひます（岐阜縣武儀郡關町 加藤裁縫舍內 西村秋子）○千葉縣印旛郡臼井町角來榮坂さく子（地方新聞の御交換もなさつて下さい）○繪葉書交換を望む、 但し女子に限る（伊勢國宇治山田市浦口町濱出きぬ子）○ちよいと御願てすがれ、 諸姉様の內て紀念繪葉書に スタンプを押したのを、 お持ちのお方は 惠ぐんで頂戴なお禮には萩八江の寫眞葉書を 送りますよ、 紛失の恐れがありますから 封狀て送つて頂戴妾も封狀て差上ます（山口縣萩町七十番地川浪顯子）

○寫眞編物造花交換

○誌友諸姉様よ私も不束者ですが エハガキ及び寫眞の交換を願ひます但寫眞は 五名かぎり 着順に差上げます （渡島國松前郡福山小松前町三十五番地 工藤以津子）○誌友姉上様よ寫眞編物造花の交換を願ます 先着二十名に限り三宅先生筆水彩四季夏の卷一組そへて差上ます（茨城縣行方郡香澄村立花すみれ）○諸姉様よ何卒御手紙下さいな 私もだし升わ又諸嬢の御寫眞を惠んで下さいな私もきつと寫眞を御送り致升 それになにか面白き物つけて御送り致升（奈良縣山邊郡丹波市町永尾きぬ子）○誌友の諸嬢よ美い臂突と美しい栞に 寫眞をそえて送り下さいませんか御禮には金色夜叉 不如歸二十五絃紅葉全集五、夏子、乳姉妹、無言の誓、青春、小猫等の小說に妾の醜い寫眞をそえて差上申ます 又上等な繪葉書交換して下さいな（福岡縣嘉穗郡穎田村木浦岐山田方山田芳子）○編物、栞、寫眞の交換を望みます、寫眞の裏には私の名前などを入れずに 皆さんの名前のみ入れて頂戴よ、 又東京を始め 各地方女子の學校の規則を送つて下さい、 私の處發行の雜誌と 交換を願ひます （富山縣魚津町高田方 永林濟枝）○妾は今年の四月上京した ばかりですが何分地方の様子が知りたいと思つて居ます 何とぞ在京の諸姉や殊に地方の女學校の姉君達の 御寫眞とひぢ突とを交換して下さいませんか 御禮には妾の寫眞と寫眞はさみを進上します。 そして永く信書の往復を願ます （東京市本鄕區臺町 九番地市川様方 小川かつら子）○天下の諸姉上様文通を願ひます寫眞を送つてくだされた 御方には妾の寫眞を御返禮申上ます （京都府相樂郡加茂字錢司岩井磯兵衞方 荻田とみ子）○皆様私しも寫眞交換の 御仲間入れにいたして下さい寫眞に御

玉章をつけて又寫眞のみにても御送り下されし姉様には二十人限り失禮ながら不肖の寫眞を差送りますから何卒御仲間入れにして下さい裏面には御名をお認め下さい(靜岡縣小笠郡相草村杉山芳太郎方山本靜子)〇何卒御玉章なり繪端書なりに御寫眞を添へて送つてくださいまし先着十名様をかぎり山口縣風景繪葉書へみにくい寫眞を添へてきつと御返禮致します(山口縣山口道場門前町五十君方守富以智子)〇女子文壇愛讀者諸姉様何とぞ御寫眞お送り下さいお禮には私の寫眞先着七名に御送り申します(備中笠岡入野屋町渡邊賤子)〇諸友の君たち御願ひがあります何卒々々珍らしき頭巾やよだれかけの形御持ちの御方は少さく、紙て裁ツて御送り下さい御禮はゆめ忘ませんよ(陸中國上閉伊郡遠野一日市町若生なか子)〇誌友皆様追々寒くなりますから、自製の手袋やクツ下の如きものゝ御交換を願升、手許に手袋十一組、クツ下七足、外に妾の寫眞二十一枚リボン六尺、親友の寫眞六枚、取揃へてありますから交換を願います(上總國長生郡新治村桂裁縫倶樂部内小川くに子)〇妾暑中休暇中に海外輸出品として岡山縣の特産たる麥稈眞田及經木眞田の標本を少しばかり製らゑて頂きました御入用の御方は編物や栞りや其他の美術品と交換を願ひます(備中笠岡町加藤内佐藤芳子)〇諸姉様何卒御寫眞、造花やリボンを送りて下さい御下された御方様にはきつと御禮いたします但し先着五名にかぎり新色リボン三色四種づゝ御禮いたしますよ(靜岡縣小笠郡平田村上平川西郷儀作方にて杉本靜子)〇皆様御願ひてす、御寫眞や編物を送つて頂戴な、妾實に一人ぼつちて淋しいのよ、何卒やさしの姉様、私しも悦ばして頂戴、妾きつと相當な御禮致します、御安心なすつてお送り下さいまし(播磨國飾磨郡廣村田村秀子)〇誌友諸姉様よ妾皆様に御目にかゝりたいのですから是非御寫眞を送つて頂戴な妾栞に上等のリボンを添へて御返し致します(遠江國引佐郡氣賀町寸座伊藤方鈴木樂津子)〇私の望みは寫眞を交換したい、撮影せしもの貳十貳枚あり御望の御方は繪葉書上等一組送れ一葉進呈す(常陸國新治郡九重村栗木川中のぶ子)〇誌友姉さま方私も寫眞繪葉書の交換を願ひますお送り下さるお方には先着十名かぎり文藝倶樂部一部づゝ添へてお返しいたし升誌友の中には間々不實の方もありますが私は決してそのやうな者ではありませんから御安心の上(和歌山縣橋本町字東家川俣種子)〇諸姉様方何卒御寫眞の交換を願ひます、御送りの方先着五名には私の寫眞に上等栞を添へ、他の方には甲斐名產の水晶印材を一個づゝ御禮に差上ます(又繪はがきも栞の交換を願ひます(山梨縣甲斐國北巨摩郡日野春村川手園子)〇諸姉様何卒寫眞を送つて頂戴送り下さつた方には當地名所繪葉書一組に私の寫眞をそへて御返し致します(秋田市東根小屋町七田邊方安藤きさへ)〇本誌愛讀者の諸姉様片田舍に淋しく暮らして居りまする淺學者てすがどうか末長く御交際を願ひます又繪姿御送り下さい恥かしながら私のも送ります、(安房北條町北町俵屋方にて內代信子)〇皆さん御寫眞の交換をねがひ升而し寫眞は十枚位しか有りませんて先着より送れない時は繪葉書を送り升(名古屋市南新町一、鈴木方深美房枝)〇私は只今は鎮南浦に居りますけれども四五日の內に歸國致しますて下名の處へ繪ハガキ又は寫眞を送り下さい妾歸りましたら先着三十名に土地名產初霜に見苦しき姿を添へてさし上ます(岡山縣久米郡大井西村岡田久米乃)〇一層御親密に御文通を願ひます又寫眞の交換を願ひます粗末ながら必ず私も直ちに上げます(香川縣琴平榎井中ノ町六八四地伊賀上幸子)〇賢明なる諸姉よ、どうかお見捨てなく、御寫眞を送つて下さい、第一着は粗品ながら妾の寫眞を二名、第二着遞信十一周年紀念はがき三名、第三着は遞信省の紀念はがき何れとも一枚宛四名、他は舶來のはがきを以て返信致します、(大阪市東區淡路町四丁目、中村にて東柳子)〇皆様お願ひてすからお寫眞及び美くしい編物造花等を送つて下さい私必ず御禮には自分の寫眞へ満韓風景寫眞をそえて差上ます(靜岡縣榛原郡白羽村瀬原星野様方藤井瀧子)〇皆さん妾も女子文壇の愛讀の一人て御座りますが繪はがき、御寫眞、御手紙、あみ物の御交換を願ひます(千葉縣我孫子町二七一六加藤愛子)

〇圖書換讀（其一）

▲記者曰、圖書換讀の原稿は澤山たまりましたから其一、其二の二つに分けました、其一の方は前から殘つて居る分、其二は新しく締切の分てす。

〇私文學世界ハガキ文學明星心の花活動の日本等不用の雜誌が有ますから繪はがき又は寫眞て申込下さい十五名の方にはすぐさし上げます又諸姉さまの中て淺齋花、銀鈴、みだれ髮、子規隨

筆お持ちの方は私の花紅葉、俳句獨習、箏曲獨稽古、やまと文粋、美文作法、女夫波のうた、不如歸のうた、花守日記などゝかへて下さいな、(神戸市兵庫門口町 杉山艶子)○戰時畫報中學世界御送與の令嬢には面白き温泉場の寫眞又は繪葉書にて御禮申上候尙文學上の雜誌なれば何になりとも (豐後別府濱泉場三〇五 鈴木美代子)○乳姉妹、不如歸の歌及小說百人一首評釋等御もち合せの方は妾の文藝俱樂部及水彩畫の栞日本畫の栞女學世界等と交換して下さる方はなくつて(佐賀縣西松浦郡二里村大里 松永はつ子)○旅人夕暮の曲(シユベルト作英語)貳拾人迄差上ます、繪葉書て申越されよ、私は、熊野、僧月照、大海原、月、箏を持つて升太田道灌、巴御前、都の花、御持ちの方と交換又は寫しの交換を願升、今後音樂好きの方々と御交際を願升(伊勢四日市西町九〇川崎須磨子)○皆さんの御內て箏歌の本をもつて居なさる御方は御讓り下さい必御禮はいたします。帝國女禮式、禮儀と作法、女禮と裁縫、新選女子普通作文など不用てすから御入用の御方には差上げます(石見濱田松原 江木その子)○誌友諸孃!!雜誌の交換をして下さいな、又左の書籍不用てすから望の方は上等繪葉書て申込下さい先着十五名にお送りします。ヘガキ スケツチ、水彩油繪畫法、繪ヘガキ文粋、狂句問答、日本歷史、手輕食パン製法、ヘガキ文學、秀才文壇、其他 (播磨國揖保郡千本國 眞貫美子)○本誌を愛讀する高等三年の方よ私に高等三年の理科をくはしく書いた本が一冊ありますから皆さんの中て源氏物語か太平記か枯野の露か本年分の女學世界かを御持ちの方は此內どれても一册へおし花をつけて御送り下いませんか(長野縣南安曇郡倭村二八五田々井たつへ)○私の手許に「天地有情」「なつくさ」「和歌與竹集」「中等和文軌範」「美文斷錦」「勅語衍義」「坤德」「姬鏡」「婦女家庭訓」「茶の湯と生花」「普通禮式」「女子技藝」「家の寶」「家庭憲法」「奥羽婦人傳」「言文一致女子普通文」「婦女往復用文」「遊學案內東京の女學校」「校註古事記讀本」「近古史談」「盡忠錄」「箏曲獨稽古」「横笛獨稽古」「露伴叢書」「紅葉全集」「若き妻し」「小說家」「血の淚」「教育小說」「濱子」不用になつて居りますからお望みの方へ差上げませう(陸前岩ケ崎町佐々木貞代子)○私は女子文壇壹卷六號より貳卷貳卷まで所持して居りますから御望の方に進呈します(東京赤坂區檜町十二ノ八號 坪野麻葉)○前號に圖書交換を申込ました處直に多數の交換申込ありましたから其內書物にて申込の方には直ちに御交換申上げたが書物が品切れになつたので繪ヘガキて御申込の方には殘念ながら御交換出來ませんてしたから惡からず(豐後富來町 みちゑ)○女子文壇第一卷拾二號女學世界各國の家庭婦人畫報不用につき御望の御方樣は美しき繪葉書にて御申込なされば先着のお方に差し上升 (廣島縣雙三郡三次町 菅原秀子)○私のところに、女學世界十五册、寫眞畫報九册、明治の家庭十册、婦人と子供八册、花の白露、日本外史字引、學友會雜誌十八册、があります何かと御交換下さいませんかしかしお望のお方には差上ても宜ろしい何れも古本てすからそのおつもりて (岐阜縣惠那郡遠山學校內垂柳女史)○諸孃樣妾は不束な者てす昨年の十月に當地へ參りまして看護事業に從事して居るのですが皆樣の內て「小說綠不綠伯爵夫人後編、戀と戀、魔風戀風、」何れなりと御持ちの方は御惠み下さいませんか御禮には妾の寫眞とまづい當地の繪葉書とを御送り致し升(京都市東洞院通萬年寺下る木村方佐々木茂代)○小說「琵琶歌」御持ちの方御貸し下さいませんか御禮はいたします(群馬縣佐波郡連取村森村 葉間子)○誌友の皆樣妾は片田舍の小學校に奉職して居る淺學な者てすが御交際を願ひます手許に小說寶花娘最後の黑田從次いさなどり女鑑三十八册女學世界青年文壇其他不用の本が有りますから伯爵夫人か金色夜叉か裁縫と手藝か何かと御換へ下さい、御寫眞御玉章繪葉書、造花編物等の交換も願ひます (三重縣鈴鹿郡高津瀨村大字高宮川村樣方 嘉壽子)○不用の博文館發行綴帝國文庫の道中膝栗毛御持參の方は同帝國文庫の紀行文集と交換して下さいませんか御禮としては春文社發行赤十字社戰後總會紀念繪葉書乙號一組差上ます(越後西頸城郡根知村山本やす子)○諸姉中に水彩畫手本代四十五錢洋とじ美本寶部と博文館發行盆栽仕立方法の書と御交換下さいませんか發句作法や俳誌澤山ありますから押花や編物を下された御方に差上ますよ(滋賀縣伊香郡片岡村東野第七十番邸田川としかず)○先達は皆樣有難うよ、それ〳〵御返品御返書差上ましたが屆きましたか、紅葉全集は美濃羽島郡正木村大字三ツ柳江崎そて子樣へ送りました、又こんども二回目として小說、青春、小華族以下七種七册詩集壽卿以下十一種十二册新古版文藝界新小說て御返禮しますから、上等繪葉書て御申込下さいまし、お望のもの詩集な

れば詩集と小さく傍に書て 繪葉書の趣味を失はぬやうに詩歌俳を書いて願ひます、(尾張國中島郡起町畑田方渡邊鶴子)○諸姉樣の中に 當文壇第二卷第九、十號の二冊御不用の方は 御讓り下さい、御禮には寫眞、絹の栞、有情の花繪葉書、雜誌、此の内御望みの物を差上げます (美濃國大垣郵便局區内牧村 木村浅子)○愛讀者諸讀樣何卒文集、詩集、及文學的の本を 送つて下さい、妾も相當の本を送ります 又新聞交換も願ひます(越後中頸城郡高城村新中殿 伊藤みちゑ)○和歌や新体詩を奇麗に認めた色紙冊短を 御交換遊ばして頂戴な (近江甲賀郡柏木村 辰井琴瑤)○みな樣私いとも同情深い マッギー夫人の歌を持て居ります實に優美なこと之をオルガンで奏しますとまのあたり君と 相見る樣な心地がしますよ御望の方は美しいゑはがきて御申越し下さいうつして御送り申します (群馬縣新田郡世良田 津久井徳子)○妾の手許に左の不用の 書籍が澤山あります女子文壇 愛讀諸孃に限りお上げしたいのです繪葉書てなるべく早々申し込み下さい 詠歌自在 青春之卷俳句獨案内 天うつ浪 七月發行の女學世界男女學生の氣質以上先着五名に限り 京都名所繪はがき五枚一組づゝ御進呈致します(京都上京區聖護院町貳拾七番地丹波屋方人見正子)○手許に郁文社發行の 作文新辭林、國語漢文中辭林、其他二三冊不用の 者があります、 絹栞の極美しいのと最上等の 舶來繪はがきを送つたお方に進呈致します、 又唱歌萃錦といふ歌の數千五百斗りを集めた唱歌集が不用になつて 居ります、お望みの御方は 一寸御照會を願ひます、(福井縣今立郡服間村春山 梅田菊枝)○大阪空堀町江口方 白百合樣、 私喇叭卒「聞くも勇まし喇叭卒」といふのなら持つて居りますから 御贈り申しましやうか、 河内國牧方町 陸山白ばら樣、私「ノルマントン沈沒」の歌持つて居ます、 寫したのでよろしければ お贈りいたします、 御二方樣共御名を、お敎へ下さい、私の手元に左の物があります、 旅の夢、花の都、枯野、紅葉狩、等まだ色々あります、 皆樣の中にはなれ 小島の歌を惡て下さる方には 右の中いづれにてもお贈りいたします (香川縣香川郡宮脇村一二二 岡田まさ子)○初姿、後の戀、力草、 女學生氣質等 小説の外に中學女學の增刊の文集計りと 文藝雜誌澤山ありますが詩集か 歌集か小説と交換して下さいれ、(大阪市北區上福島北二丁目 村瀬つた子)○諸姉樣方にて 小説伯爵夫人、天うつ浪、不如歸何れにても 御不用の方は女學世界四册づゝと御交換下されまじく候や 伯爵夫人の方へは帝國婦女用文一部御そえ申候 (相摸國三浦郡浦賀町大津 長塚よし子)○皆樣私方に文藝倶樂部卅八年一月より本年三月までのと(增刊も有)兩美人、小弓の御所、片手美人、紫、 小説家二册、 涙子、七日間、(以上小説)新小説三冊、 文藝界三册、 深山櫻、 など有るが寫眞、造花、栞、 編物などゝ交換して下さいませんか 猶品物に應じ 當地高野山名所繪はがき差上升 (紀伊橋本町大字東翠 川俣たれ子)○文通及地方新聞の御交換も おねがひです(下總印旛郡臼井町角來二一九 兼坂さく子)○誌友諸孃の中て、 離小島不如歸須磨 金色夜叉女夫浪など其他高尙優美なる 樂譜御存じの方はどうか御敎へ下さい 私も存じて居ます 限りは寫して御送り致しますから諸姉の中て 駿河沼津地方の御方は何卒玉章下さい 私は一人の親友が沼津にありますから沼津の名を聞のさへ 戀しくて〱たまりませんのよ (岡山縣津山坪井町高谷源二郎方 高谷賀爾子)○皆樣「不如歸の歌」「金色夜叉の歌」「乳姉妹」「伯爵夫人」「まだ見ぬ親」等御不用なればどーぞ御送り下さいよ「啞の旅行」「横戀慕」「モンゴリヤン妖怪村」「人生の初旅」「人生の行旅」等色々て 御禮致しま(す靜岡縣榛原郡白羽村 增田富士江子)○私は「俳諧春秋」三十七八册あります書物編物栞等と 御交換下さい (神戸奥平野一〇五谷川醇子)○少女界少年世界少年界中學世界數十册あります 御入用の方は繪ハガキにて申込み下さい 進上します (姫路市坂田町四十七番地山田方 宮島婿美子)○私の許に「不如歸」「新婚旅行」「はやり唄」等あります「伯爵夫人」後篇と代へて下さる方はありませんか 繪ハガキも差上ます(岐阜縣吉城郡阿曾布村 三井ふさ子)○女子文壇壹卷七號より十二號まで 不用しほり送つて下さる方に一册づゝ差上ますから 繪葉書にて御知らせを願ひます (陸前登米郡登米町福島清)○亂れ髮、己が罪の歌、 御不用なのが御座いましたら 何卒御送り下さい、 寫眞、栞、繪葉書(有情の花)、櫻の御所御望みのを御禮致します (岐阜縣大垣郵便局區内牧 木村浅子)○あの妾左の書物不用ですから 誌友諸孃に限り極上等繪葉書て發表向ふ十日間の内に申込て 頂戴な抽籤てお送り致しますから 銀山王、一葉全集、女波男波、星、雅三俗四、みだれ箱、 女子文壇懸賞文集蘭艷論等てす又皆さんの中て 朧月花御不用の御方ありましたらお送り下さい 相當お禮は致します 決して〱踏着するやうな者てありませ

ん（和歌山縣日高郡藤田村吉田 阪本六右衛門方春江）○諸姉樣よ白玉姫、露姫、藤村全集、不如歸の歌、花守、ハイネの詩集、金色夜叉の歌、ユーゴー詩、はつ潮、心琴、竹柏園集、夏草、アラビヤナイト後編、戀のナポレオン、女夫波の歌、以上御不用の方は御送り下されば私の 青春の詩、花天月地、黄菊白菊、草枕、塔影、花紅葉、はなれ小島の歌、深山櫻、千草の錦、 日記文、雪月花、憐の響、英文自然の心、白百合、等いづれにても御指定により御送り申ます（神戸市橘通貳丁目 高橋龜子）○女子文壇菊花壇三十六文叢其他雜誌貳拾七部 不用になつて居りますから繪葉書か栞送つて下さつた方に先着順に御上げします（三重縣阿山郡小田村 岡森昌子）○どうかみなさまの中で お讀み古しの小說がありましたなら御貸し下さる 御方は下名へ御一報下さいまつと 御禮はいたします（高知縣安藝郡井之口村字瓮之宮梶原方 中山しげい）○本誌御不用の方がありましたら送て下さい 又詩集歌集何ても好いてすが廉價て御讓り下さる 方は下名へ御通知の程を（茨城縣那珂郡戸多村大字戸四九ノ二 綿引はや子）○皆樣の內て小說多情多恨忘れがたみ宿り木 青春まだ見ぬ親伯爵夫人天打つ浪血の涙 涼子露風戀風詩集花守塔影青渡集御めぐみ下さる方には私の不如歸服のゆくえ 上下女學生訓 和洋料理書女子職業案內避暑の友其他美しい技藝品で 返禮いたします（備中後月郡高屋村 倉田こふて）○妾十一號で地方新聞の交換を誌友の諸孃樣に願つて置きましたら 澤山お送り下さいましてまことに有がとう 今後も續々諸孃さん送て頂戴（近江八日市町中野武村學貴）○私の處に 小說火の柱に田山花袋著族すがた萬朝募集時文小品紅葉俳句集、 俳流の女神、及び俳諧遊背冬の卷が御座いますから諸孃の 中に伯爵夫人か或は夏子天うつ浪綠不緣乳姉妹 其の他何でも家庭小說と 御交換下さいませんでしようかお望みの方は御一報を乞ふ （北海道小樽區稻穗町十四番地 梶水仙）○どなたか妾に不如歸の歌を御送り下さつた方には先着三名樣へ 村井弦齋著 臺所重寶記 を一部づゝ差上ます （芝區新錢座町八番地 鶴岡かつ子）○諸孃樣私の手元に明治令孃、明治才媛文集、雁のゆきかひ、 新生涯、露子夫人、 前後二册、いさゝ川、 實用裁縫全書、食道樂、 春秋二册、 御座いますから 外の御本と何卒交換願ひます（八王子町八木四 村野梅子）○私のところに左の不用書がありますから おのぞみのものと報知新聞切ぬき 小說太閤榮華物語か又は朝日の切ぬき薩摩琵琶歌（琵琶歌ならず）と御交換下さいまし 私のは 「二十五絃花守新學士新夫人家庭の模範不如歸の歌 雪月花田舍源氏源氏物語 その外種々」（靜岡縣志太郡燒津町松村絮の武）○皆樣私の手許に「多情多恨、思出の記、新曲浦島、 にせ紫、 新夫人、 桐一葉、 小說家」等ありますから皆樣の中て「藤村詩集、 春鳥集、 舞姫、 白玉姫、 言海、 若草上製、 花守、 出廬」等の汚れないのと御交換 下さる方は下名へ （若狹熊川局下假屋 梶屋萩子）○女子文壇第二卷二三四號御持合せの諸孃樣方は御寄送を願ひます 着次第直に相應雜誌 見斗ひ御禮致します （信濃下伊那郡龍江村 島岡新子）○私しの處に女子文壇二ノ六七八九の四卷、 其他三十册ばかり 不用の雜誌があり升からレースや何かと交換して下さい（上野國太田町入町 大沼なみ子）

○圖書換讀 （其二）

○誌友の姉樣方妾は小說「未だ見ぬ親」懸賞文集新小說と文藝倶樂部に新小說付 每月の繪葉書澤山有ります、 皆樣の御內にて 天うつ波第一卷、紅葉山人の作何ても小說、高等女子作文、 小說人の兄上下、御不用のお方は何卒御交換下さい （東京小石川區櫻木町四番地 大谷通子）○私しは先頃父を亡くしまして母と二人淋しく 暮らして居りますから不便と思召して、 夏子、 乳姉妹、己が罪、 不如歸、 懸賞文集、 等何れなりとも お惠み下さい お禮として不肖ながら妾の寫眞を差上ます（香川縣高松市下横町八十五番戸 太田恒五郎方 山地たま子）○私の處に女學世界の定期增刊「女重寶記」「家庭百生活」「花にしき」「家庭十二ヶ月」「婦人壯烈譚」「社會百生活」「小天地」等が御座いますから御入用の方は 繪はがきにて御申越し下さい何れにても御望みのを送ります（尾張國知多郡龜崎町井口別宅にて と代子）○皆樣の內に懸賞文集 お持ちの方は御惠み下さい御禮には女學世界に當地栗林公園の 繪はがきに地方新聞を致します 又編物や某新聞玉づさの交換を乞ふ（香川縣高松市柏原病院內 横井久子） ○雜誌の古いのでもかまいませんから 御送り下さい お禮は必ず 致しますから…… 下名の處に （福岡縣鞍手郡勝野村小竹 花田たみゑ）○皆樣の內に不如歸己が罪夏子伯爵夫人 不思議の娘まだ見ぬ親露子夫人御持ちの 方は御めぐみ 下さらぬか 御禮には可愛らしき女子の二人寫し一枚に 相當のリボンをつと 御送り致します （和歌山縣那賀郡麻

生津村 畑中芳子）〇満天下の愛讀者諸姉様よ私に不用の書籍が 五十册ばかりありますから、新版小說の何たるにもかゝはらず 交換しますよ且又優美なる繪葉書 送つて下されば三十名限り書籍進呈します（千葉縣海上郡足川村 入木美佐保子）〇皆様の中に懸賞文集、朝晴御不用の 御方は御惠み下さいませ御禮には 女學世界、女鑑等ありますから懸賞文集の方は、それに 舶來十錢の繪はがを添へ、 朝晴の方はそれに 繪はがき一組と五錢以上の繪はがきをも添へて 御送り申します、（京都市寺の内通り大宮西入 永尾久子）〇諸嬢様私の金色夜叉、ほとゝぎす、黑潮、濱子、青春、已が罪と皆様の 持つてゐらつしやる伯爵夫人、やどり木、 想夫戀、 女夫波、寬風戀風、天うつ波、 等と交換 して下さいませんか（香川縣綾歌郡松山村 河合逸惡）〇どなたか久保田米僊遞の美惑新論持ていらつしやる 方は私の二十五絃か白羊宮かと、かへて下さい 又俳句雜誌ホトヽギス第九卷第一、二、三、四號 お送り下さつた方には 私の詠歌自在か水彩畫手引のうちお氣に召したのを送ります 一册でもお送り下さい相當のお禮はいたします（神戶市兵庫門口町 杉山とし子）〇私は三十八年から本年七月迄の 女學世界がありますから何か外の雜誌か 又は其月のほかの女學世界と御交換を 願ひます（滋賀縣甲賀郡水口町北町 富田せい子）〇私の處に（少年少女界三十册、 男女用文葉書文百科用法和歌入重垣英語の本小說） ありますから ホトヽギスの歌でも小說でも下さつたお方に お望みのをあげます（廣島市舟入村十番地ノ一 津川さだ子）〇今私の手許に女學世界の 古いのが有ります（卅六、七、八、九年）が御希望の御方は シホリ又繪ハガキて御申し越し下さい 御送り致しますから（新潟縣南蒲原郡大島村 原みさほ）〇諸姉上様の内で女子文壇二卷の六號及び 新古文林一卷八號御所持の方は上等の 繪葉書と交換して下さいませんか必ず 相違なく差上ますから（美濃山縣郡谷 内藤みち子）〇私の元に作文秘訣、大日本女學會前期の女學講義等が 不用になつて居りますから御望みの方は 繪葉書リボンあみもの等と交換下さいまし（長崎市勝山町七 野瀨あい子）〇本社發刊の女子遊覽便覽が、 あいて居りますから、御入用の方は下名まで、 はがきを以て御申込み下さい、 差上げます（仙臺市北目町五十五番地郷家方 宮崎ことぢ）〇諸嬢の中で塔影、俳句作法、 朝晴、 ウオヅオズの詩、 毒草、一册でもお送り 下さつたお方には 妾の草枕、バーンスの詩、小扇、 はつしほ、山上湖上、の中で價の相當したものを送ります （大阪市西區本田町壹丁目番外一四八 片山忠子）〇私の手許に徒然草土佐日記竹取物語伊勢物語方丈記 紫式部日記住吉物語 人生觀他に雜誌數十部有りますから皆様の中に小說寬風戀風 金色夜叉伯爵夫人乳兄弟玉蟲朝晴等御あきの方はお情けて 御交讓致して下さい又高價の本ならば夫れに應じて 御禮致します （靜岡縣榛原郡白羽村濱原星野様方藤井瀧子）〇誌友諸孃様よ、 皆様の中に、 千草の錦か、 朝晴か、 玉蟲か、 天地有情か、 雪月花、の中何れにても 御持ちの方はどうぞ御惠送して下さい御禮としては妾の許に、 しだわらび、女學生訓、 女學生の栞、 風月集、 寬風戀風、 無錢旅行、貧乏旅行、 等がありますから何れにても 御望みに依つて送ります少し古くとも宜しう御座います（千葉縣海上郡足川村 入木美惠子）〇詩集か小說か文集ならば何でも宜しうございますから御交換下さいませんか 私はまひろ野、 明暗、 あら木、 銀鈴、 名殘、 愛吟集、 無弦弓、戀衣、花守、金帆、 夏晴等の詩集か朝晴、 その綠、 酒中花、小說著作法、其他雜書二十部許りと、 山彥、文庫、新聲、 白鳩、 新潮、 女學世界、女子之友、 婦人世界、 少女界等の雜誌て必ず 御返禮致します決してづるい事はしませぬ（麹町區土手三番町 廿二山下宮子）〇みなさんの中て地方の 文學雜誌新聞あらば送つて下さい 返信は送ります、 又繪葉書に和歌俳句を書入て送つて下さい これには秀逸のものには 美麗なる繪葉書を送る（橫濱市南太田二〇八三 白妙會內星月菫子宛）〇妾に亡き姉の紀念なる小說、 雜誌、 文學書類百餘部あり今は見るだに昔を偲ぶ涙の種 左記品々の内と交換したし贈り給ふ 同情の娘あらば夫々相應の品にて御禮申す寫眞、 信玄袋、 ハンカチーフ、 栞、編巾着、（以上細製）襯衣、 樗牛全集卷二、 金色夜叉、已が罪、 上等風景繪葉書（肥前佐賀市上蘆町花島方 秋山靜子）〇皆様妾の手もとに文藝俱樂部婦人世界女學世界女子文壇 ムラサキ寫眞畫報等不用てすからなにかと 交換下され新聞は二六都報知等取ります故他のと 交換れがひます（京都區八丁堀幸町六 長谷川すみれ） 〇皆様の內て小說露子。濱子。乳姉妹。 已が罪。 中編。 後編。新夫人。 冷熱。わすれ形身。 まだ見ぬ親。釣道樂。等のうち何れにても 御惠み下さいませんか御禮としてひぢつき 必ずく 差上ます（相撲高坐郡麻溝村 遠藤吟子）〇皆さん妾は秀才文壇第四卷

より第六卷までと中學文壇第五年より第八年までと寫眞畫報日露戰爭實記等取揃へてありますから御望の方は申込み下さい進呈致します尙有名な神社佛閣の印影幷に石摺葉書、紀念繪葉書舶來繪葉書名所繪葉書等の交換を願ひます（紀伊那賀郡中貴志村米田時子）○妾女子文壇貳卷の九、十號の二册ありませんから、もし皆樣の內に御不用になりましたら御惠み下さい御禮には寫眞挿（絹布私製）繪葉書、名所寫眞、シナリ其の他雜誌を差し上ます（岐阜縣大垣郵便局內牧村木村淺子）○私の許に病戀愛、洗ひ髮、浮世日記（以上小說）女子軍歌、日本外史論文講義、萬國地圖の不用書がありますから諸姉樣の中で相當書籍か或は栞、貼つき、等と御交換下さる方はありませんか（靜岡縣小笠郡南山村松下華仙子）○妾は和歌俳句の稽古が致しとう存じますお情けある方は何卒栞箋に五六首づゝ書いて御送り下さい、亦亂れ髮、己が罪の歌御持ちの方は暫らく御貸し下さいませ（美濃國安八郡馬瀨木村竹雨）○皆樣のお內に英譯不如歸お持參のお方でお讀み仕舞の後お送りくだされば英譯金色夜叉、英譯眞人の自白、乳兄弟、己が罪の內お好みにまかせて何れなりとも直ぐお送り申します、（德島縣美馬郡拜原村高田まさを）○私に五六年前頃から今迄の女學世界、太陽、中學世界、女學生氣質、珍世界、本朝女鑑、少年世界、其の他の本澤山ありますから美しい繪葉書、寫眞、栞、リボン玉章などおめぐみ下すつた方に何册でも差上ます（羽後酒田寺町番外十二菊地栁子）○諸嬢方私の許に左の不用本がありますから何か面白い本と交換して下さいな空中大飛行艇塔中の怪頭山王武の俠日本武俠艦隊中生の墓（宇都宮市旭町貳ノ一二九手島方登美子）○妾は神州元氣、平家物語、馬琴傑作集、近世說美少年錄、魔風戀風（上中下）戀の畫葉書詩集には天地有情、行く春、あけぼの其の他二三持ち合せて居ります、皆樣の內で（金色夜叉、伯爵夫人（前後）青春（春の卷、夏の卷）、夏子（前後）やどり木、めをと波（全部）等の內いづれなと御持合せの方はお交換して下さい（埼玉縣大里郡久下村字久下田島悠一郞樣內。芳枝子）○私は左の雜誌、不用になつて居ます、御入用の方は、美はしい繪葉書に字數少なくかいて、御申込下さい、婦人世界、女子文藝、秀才文壇、女學雜誌、日本の家庭、皆近頃のですよ（備後福山東町矢野品子）○私は江見水蔭著漁師の娘海水浴松居松葉著女の義理の小說三册を所持して居りますが田山花袋著ふる鄕又は朝晴玉蟲其他何か面白き詩集と交換したし御望の方は下名まで（北見國利尻郡沓形村空川の里山口なみ子）○皆樣の中に藤村詩集金帆二十五絃曉鐘花守銀鈴御不用の方は下名迄又坂正臣先生の習字手本もどうぞ御惠送遊ばして下さいましな。必と相當の物で御返禮致しますわ（下谷上根岸百廿五太田秋濘子）○私の手許に歌學提徑、女鑑、女玉手箱、婦女必とも、家庭百生活等凡二十五部餘あります幾册とてもよろしくありますから小說詩集と交換を願ひ升（茨城縣土浦本町中西歌子）○皆さん妾も此度からお仲間入を致しましたからどうか宜しく御交際を願ひますて如何なる種類にても書籍雜誌の交換を希望致します（岡山縣邑久郡笠加村上笠加在入江いま子）○妾に書籍左の如く有りますから繪はがきを以て御申込み下さい先着の順序に依り早速御送り申します、女子衞生學、下女讀本、新撰女子作法書、女子文壇一卷五號より二卷三號迄、衣服と流行、料理いろは庖丁、裁縫と編物、御申込みの際書名明記の事（秋田縣南秋田郡男鹿中村中間口武田登子）○妾の所に江山烟霞、古戰場、女子之友が不用になつておりますから千山萬水、金色夜叉、其他の書籍と交換して下さいな但一應御照會下さい（下總印旛郡臼井町角來二一九飯坂さく子）○皆樣私は今度始めて御挨拶に出たのですが以後末長く御交際下さいませ只今私の手許にヘイネの詩集が不用になつて居ますから皆樣の中で德富蘆花先生の「自然と人生」御不用の方は御交換下さいなそれから御玉章を下さい（岐阜縣稻葉郡加納町二丁目青沼信子）○妾の手元に故事熟語辭典が不用になつて居ますがみなさんの御所持の面白い小說か料理書かと御交換をお願ひ致します（廣島縣高田郡甲立村中村たか子）○妾は玉蟲、朝ばれ、物產小辭典及び中學文壇八十號より百二十七號まで四十七册、女子の友九册、（三十五年發行）、文庫十八册、才媛文集、女子文藝七册、ハガキ文學二十三册持つて居ますから諸姉の圖書御送り下さつた方には御望により早速送ります（姬路市延末町矢島芳子）○妾は去る休暇中に、花袋著のキイツの詩、◎島居きみ子著の下[illegible]のやどり、靜若の玉蟲水蔭の避暑の友、言文一致模範普通文、不如歸の歌、紀行文粹松風吟月、戀愛觀を購讀して唯今不用となつて居ますが皆樣の中で花袋著の草枕、花守、銀鈴、小扇、みだれ髮、春ぐさ、むらさき、無花果、火の柱、眞人の

自白、朝晴の内どれか一冊宛交換してくださいませんか(越前國平戸御舘七六六 廣瀬喜代子)○御姉様達の中で妾の持つて居る小説新妻君、敎育小説、村雨日記 霜夜綿帽子、詩集では若菜集其他女學生、興日本歟亡日本歟、一噴一國、三十棒、齊藤集慷慨家詩文歌評釋、俳句小史等の何れかと小説の露子夫人、伯爵夫人、男氣、不如歸、小公子、乳兄弟、戀と戀、小紫旗、まだ見ぬ親、浪子、其他面白い小説と交換なすつて下さいませんか(三重縣志摩郡立神村 小林敏江)○我が有する、藤村詩集、詩聖ダンテ、天地有情、夏草、小詩國、小扇、埋れ木、と諸姉の、泣菫作廿五絃、白羊宮、有明作の春鳥集、清白作の孔雀舟、林外作の夏花少女、泡鳴作の悲戀悲歌、晶子作の舞姫、雑誌の明星と白百合との内にて交換又は讓受け度し、望みの賢姉は交換の書名又は讓り代金の報知と共に至急先づ御送本を乞ふ(上總山武郡千代田村 山田沖子)○私は女子文壇少女界秀才文壇を數十冊持つて居ますシオリ又は他の書籍と御交換下さいまし、猶來る一月年賀状の御惠みを願ひます皆樣返事早刺(長野縣小縣郡川邊村 山浦楓月子)

○諸孃の交際

○九月の初めより少々病氣にて醫師の勸告に從ひ目下香山に轉地療養中、御交際被下候皆様には甚だ失禮仕候ひしも不惡御思召被下度候御學事の都合も有之候まゝ可成早く歸京致すべく今度は閑靜なる山の爭過に止宿の考に候へば何れ其節御知せ申すべく候(大澤さゆり)○妾の樣な賤い者も貰いと思は無いて給はがき御手紙御惠み下さい升た御方が只四名有り升ていち〱御返事差上た恥しい様だが妾は未だ何んな栗も見た事は無いから諸嬢様何卒御惠み下さい妾の力の及ぶ限り御返事致し升(秋田縣南秋田郡男鹿中村中間口 武田はる子)○本誌愛讀の諸姉上様よ、交際しては呉れませんか姉上樣方の面白い書物や繪葉書の交換しては呉れませんか寫眞御望の御方は上等繪葉書を以て申込みなさい進じます(茨城縣新治郡九重村要木 川中すけ子)○親愛なる誌友の姉様方賦に不束者ですが末永く御交際を願ひます(松江市北堀 坂田いち子)○私しは愛讀者となりてより茲に滿一ケ年何卒諸孃達よ繪葉書や玉章の交換を願ます(府下八王子町停車場前乙幡もん子)○皆様私は山家に住んで居る不束者ではありますがどうか御交際なすつて下さいませ、又俳句や和歌や寫眞や繪葉書などの交換を御願ひ申します(奈良縣吉野郡賀名生村 中富よしみ)○滿天下の諸孃様よ妾は片田舍の山奥に住む一愚人てございますが繪葉書交際乘りの交換して下さいませんか(千葉縣安房郡 保田町横根千葉女子文壇投稿會々長 金木ふみ子)○諸姉様方私も愛讀者の一人ですから何卒お交り下さいませ(大分縣大分郡東大分村 田原秀子)○賢こい諸友の諸孃たち私は田舍の無學無才の少女て此女子文壇て大變篤になつて來ましたどうか各四方の諸孃様と和歌などを記して交際を願ひます(越前吉田郡圓山西村開發 野坂まさを)○皆様私も愛讀者の一人てすからどうかお仲間入りをさして頂戴なそれから繪葉書や玉章の交換を願ひます(和歌山縣海草郡西和佐村岩橋 池見敏江子)○貴孃方々樣私は誠に不束な賤女てありますが、何卒永く交際を願ひます返事は必ず差上ます、假名は御斷り(羽後國仙北郡藤木村字入宝 高階てつ子)○諸姉様私もさる頃から本誌の愛讀者になりましてよ、どうかよろしくご交際や繪葉書交換をお願ひ致します、又ご寫眞を下さつた方には妾の寫眞に文藝倶樂部、早稻田文學、婦人世界、の中御指定のものをおそへして先着三名樣に御禮します(伊豫越智郡菊間本町 寺尾すみれ子)○私は母と二人て何よりも女子文壇を樂しみにして居りますから末久しく御交際を願ひます(鹿兒島市山之口町 高見馬場中程松山榮)○親愛なる誌友諸姉様妾は第一巻第一號より愛讀者の一人てすが繪葉書樂編物御玉章の御交換を願ひます(群馬縣佐波郡玉村町五丁目 羽鳥美辰子)○私は露しげき山里に敎への鞭を取つて居る者てすが慰みに寫眞の稽古を致して居ります どうぞよい景色の處が有りましたら御知らせ下さいませ早速寫しに參りますしかし男と思はれては困ります(埼玉縣兒玉郡東兒玉村大字梗木 平野三重子)○何卒寫眞や玉章の交換を願上ます必ず御返事申上ます(大分縣北海部郡神馬木村木佐上 宮野直子)○敬慕いたします姉君たち妾は淺學てはありますが將來どうかよろしう、て妾は雜誌、地方新聞、繪はがき寫眞圖書文書などの交換が非常に好むてすから姉様方どし〱御送り下さい(神戸市奥平野二二七前川方 井口あや子)○誌上の御姉上様よ、妾は愛讀者てありますが每日病院住て何一つ樂しみもありませんので只々此の女子文壇とお姉上の御文通をのみ日頃の友として樂しみますわれえ皆様哀れとお思召して以後御一層の御交際

を御願ひ申上ます（呉市共濟會病院內 大隣俊子）○鹿兒島勝月のぶ子樣に申ます 私は土くさき出羽の山里に生れた者て 今年高等四年を卒業し蠶備學校に入學してゐ 不束者てすが妹とも思ひ永久に御交際下さい諸孃もどうぞ交際を願ひます（山形市香澄町十日町口 菅原かん子）○諸姉樣の內にて只義理一片の 交際てなく末の末までも姉妹の如く御まじわり下さる方は ないてしようか之までいろ／＼の方と交をしまして 見ましたがながくつゞけて 下さる方がありませんのてす、若私の樣な者にても御交さい下さる 方がありますれば下記の許へ（神戸市北長極通六丁目一〇五鴨田まさ子）○博學多才の 姉樣方私は信州の淺間山を後に控へ 千曲川の邊に住む不束者以後宜敷御交際を願ます、 又文通或は寫眞の 交換も希望します、 （長野縣北佐久郡北御牧村 竹重くら子）○諸姉樣方よ 私は片山里に住む愚な者てすが當文壇の愛讀者となりましたから 御見捨なく繪葉書や アミモノの御交換を願ひますそれから手紙の 御交換をも御願ひ申ます下手てすがすぐ御へんじはいたします （下野栃木縣河內郡羽黑村中里池田吉三郎方 金田錦子）○諸姉樣何卒皆樣同樣 御交際を願ひます繪はがき玉章及び栞の御交換を必ず お返しを致します （大阪西區薩摩堀裏町四 中野敏子）○姉君達よ妾はさきに臘葉植物をれだりましたが 暑中休業かけて病のため里に歸りてゐましたので其間に 諸姉から多數よせられましたが 受理人なしとて返戾したることをあとて聞きまして誠に 殘念にたえませぬ願くは諸姉半日の採集を試みられ 可憐なる妾が研究に便宜を與へられたく 必ず前回のよう御讓いたします 但し標本は數の多きを望みますから丁寧に及びません新聞全紙を 四ッ折にしたるものに挿み可成全形を保つものて上に ボール紙をあてて折れぬやうにして願ひます 先は左樣なら（富山縣中新川郡上段村城川秋子）○私は筑紫のはてなる片山里のもので御座いますが 開け行く御代の有難き御惠の波に 浴しましてわずかに文讀む事が出來る樣になりましたが私は 此の愛する女子文壇の君を愛讀して居るかくれたる 壇友の一人てす壇友諸姉の お作を拜見いたしまするに誠にお羨ましく一篇にてもと 思はれたけれども淺學の身の悲しさは思ふ事の萬分の 一もかなひません何卒可憐のものよと 思召て愛讀者且つ壇友の一人として永久に御交際の程を伏して お願ひ致します（鹿兒島市新町四十六番地 大津喜和子）○本月の女子文壇の口繪にて お寫眞を拜見致しました美濃の山田きん子樣 妾は美濃の太田に居りました者て 此度出京致したので有ますいとなつかしく候まゝ 貴孃の御住所おしらせ下され度尙御交情の程一重に 願ひ上げます （淺草區千束町三ノ五四 遠山ゆき子）○妾も女子文壇の一愛讀者てす何卒お交りを願ます お手紙を戴いてお返事を差上ないやうな事は決して 致しません（府下北豐島郡巢鴨町二ノ三五小川豐三郎方 本橋好子）○皆樣私の許に栞三十八色と 下田歌子先生の著女子の技藝、野ゆり、押花（西洋物）色々ありますから 繪はがき造花押花等と交換しませう（兵庫縣武庫郡 西灘村ノ內岩屋 ボートクラブ內野間久子）○諸孃樣方よ私は 女子文壇愛讀者てあります是迄投書したとはありませんが 此後は御交際を願ひます 又繪はがき寫眞の交換を願ひます（下關市宮田町室津店 室津榮子）○兄等は陸軍士官て 當地に居りません宅に妹と淋しく暮して居ります故 何卒御玉章や御寫眞又は繪葉書を送り下さいまし必ず 御返禮致します（宮崎縣宮崎町字川原町 日高うめ子）○京都の高田樣、濱部樣、 同じ學び舍て 生ひ立ちたる妾、以後はいつ／＼までも 御交際下さるやう御願ひ申上ます（麻布霞町八 藤本香子）

○女子文壇愛讀會通信

秋田縣平鹿郡角間川町に女子文壇愛讀會を組織し其第一回を十一月五日午前十時、角間川學校內に開きぬ、會員は凡て本誌の愛讀者にして集るもの二十七名、頓て左の催しあり

開會の辭　松田せい子君
交際に就いて　黑丸とみ子君
繪葉書交換の正不正　石川菫子君
家庭論　小笠原ふみ子君
英語について　苅萱富子君
結婚について　奈良八重子君

外に討論、笑話等二十餘の餘興あり午後四時閉會、會費晝食茶菓等にて金一圓也（十一月五日幹事通信）

明年度の定期增刊

本年の定期增刊も此「菊花月」を以て終りとなりました明年も矢張一年間に四回の增刊を出します、さうして愛讀者、投稿家の御滿足を計らうと存じます、明年の增刊も二月、五月、八月、十一月の四回に發行し發行日は十五日と極めて置きます、猶ほ一層の奮發を以て右の增刊號も例號に倣ふて口繪、繪はがき、水彩の畵も悉く鮮美なるものを挿入し、記事も例號の通り、紙數も例號の通り、凡て一日發行の分に優るとも劣らないものを出す計畫てありますから何卒宜しく御愛讀をお願ひ申します。

蛭兒より

名無し小草の君へ（本誌十四號參照）

夜雨

鵜の床の草かくれ
花守の名も埋れては
蛭子が八重の疊菰
敷けども足の起たずして

一人はせめて吾母よ
肩貸しぬべき妹とと
望みしかどもきかれねば
今は花をも培はず

十六胸を病みてより
寧石に碎けんと
言ひては母を泣かしめし

人も涙の友といふに
名乘れ、西京の方ならば
いかゞは吾に耻らはむ
髮のかゝりも匂へるに
口籠りてのみ躊躇る

かゞり火焚きて晩稻扱く
常陸少女は任他
傘の半にかくれたる
君が瞳の見ほしきに

丹波の山の人とばかり
呼びてあらんはあはれなり
古磐余の野を行きし
七人の少女も名は有りき

名宣れ、「濱」とあればとて

君を母とは言はじもの
「照」は月の朧なり
森にとつぎし姉の名なり

小萩ほろ／＼露かれて
み寺に籠る「勝江子」の
叔母によく肖し面かげの
紅は涙に落ちにけり

陽炎めぐる草むしろ
椿の油毛に塗りて
艶を日かげにくらべつる
「おえふ」は丈のすぐれしか

（秋月波根の
　雪揺れて
白蝶舞へる
野の花に

うき人の名を
卜へば
「花」と「胡蝶」と
うなづけど）

嗚呼、君母たらばふところに
珠のやうなる子を抱け
君姉ならば弟に
絹の手毬をなげたまへ

恙ありとも悲みて
刃は乳に刺すなかれ
野を戀ふるとも一度は
人の腕に凭りも見よ

はま子はわが母、てるはわが姉の名なれば曰ふ、勝江は從妹、今出て某家の奥女中たり、おえふは竹馬の友、人に嫁す。

附録



文藝雜感（冬の卷）

記者編述

冬構

樹には霜除を施し、花壇には藁屋根をしつらひ、蘇鐵は菰に捲かれ、松は杖き、庭は荒れて淋しくなる。冬がまへの天地、此時人間は反省し、謹愼し、日かげに慰藉に得、燈火に親しみを求む。冬と云つても十一月、十二月は未だ暖かな日もあつて、東京では一月から二月中が最も寒さの烈しい頃て、年内は冬がまへの時である。冬は花も少ない、綠も枯れる、紅も無くなる、葉も落て、蔓も切れる、水は音せずなり、から風は吹荒ぶ。冬は凡てのものが凋落する、單り二千年の公孫樹のみてない、古來の歌人は人世の盛衰にも是を喩へた、人間の盛衰には時期が極つてないけれど、冬は定まつて來る、人間の衰へる時が分つてあれば皆冬構をするてあらう、人間の衰へる時て定まつてあるのは只、老いの到る時許りてある、境遇の浮沈や失意や落魄は何時來るか知れない、併し斯う云ふ考へは若い間に持たない方が宜い。昔の文學は佛敎思想から來て居るものが多く、直ぐ諸行無常や、榮枯盛衰を持出して、哀がるけれど、少壯者の文藝として斯んな思想に感化される事は甚だ危險て、譬へ冬が來やうとも、草木が凋落しやうとも、無常を感ずるには及ばない。草木の葉が悉く落ち盡くすのは、奮鬪の狀態と見るのも宜しからう、或は滅亡の姿と見るのもよし、地に落る葉は皆滅びて了つたと云つてもよし、冬だからとて必ずしも無常迅速の嘆聲を洩らさない方が宜しい。

冬の花

冬は花の乏しい時で、寒菊、寒牡丹、寒薔薇、寒椿などあるけれど、特に冬咲く花としては水仙、山茶花、茶の花など極く僅であるから、雪までも花の中に入れて六つの花などゝ云ふ。花ではないが實の中に南天、梅もどきなどの紅い色の實も、淋いし冬を彩るに好き配合であらう。水仙は餘り高潔で、花としては淋しすぎる山茶花は油氣のない花であるが、冬の花の中では最も愛すべく、茶の花は葉がくれに咲いて、謙遜して居る枯尾花は花の中に入れるのは少し無理であらうが、田舍道には能くあつて、いつまでも殘つる居る、枯尾花には他の花らしい花に見得られない趣致があつて、畫趣にも富んで居る、薄の時分とは全く姿が變つて、冬のものになつて了つて居るから面白い。要するに冬は花の時季でない、花は問題にならぬ、枯野と云つても見物に出かける譯にも行くまいし、僅に室咲の花を愛づる位に止まる。

溫室の花

冬は花が無い、そこで溫室の花を見る事が甚だ娯樂になる、東京で溫室の花を公開するのは小石川の植物園位で、其他大隈伯邸や酒井伯邸などにも溫室はあるが一般に公開しない、大隈伯邸の溫室は實に立派で、模範とするに足る、植物園も別に大仕掛ではないが、奇花珍草に富んで居る。外は寒い風がひゆう／＼と吹いて居るも、硝子一枚を隔てた裡には、熱帶地の花や草が、紅く、青く活々として居るのを見ると、一種別世界の趣がある。今頃でも、蘭科の植物を初め、海棠の類が色鮮やかに咲いて居る、日本の花とちがひ、椰子の林も現出して居る、棕櫚の叢も現出して居る、紫の花あり、白の色あり、少女の唇の如きもの、リボンの如きもの、鳥の嘴の如きもの、花の形も亦變つて珍しい東京の人は此植物園の溫室へ行けば、冬でも花は見られる、只地方の人は植物園や溫室を見る機會も無く、冬だからとて特種の花を見る事が出來ない。花戸は能く室で花を育てゝ、冬から梅なども咲かせるが、溫室はつまり其室の大仕掛のものである、地方の人でも少し園藝に熱心ならば、小さな仕掛で溫室位は出來るだらうと思はれる。

龍田姫

春の佐保姫に對して、秋の龍田姫と云ふのがある、

佐保山、龍田山、何れも大和にある歌の名所で、佐保山の霞の色など云ふ事もあつて、佐保姫は春の神とも云ひ、霞の神とも云ふ。又龍田山は紅葉の名所で、龍田姫と云ふ名は古くから有るらしい、昔の隨筆に『紅葉は龍田姫の業のよし、和歌にも詠ず、龍田姫は秋の萬物を造化したまふ神靈の名なり、又春の萬物造化の神靈を佐保姫と云ふ、往古奈良の都、佐保山は帝闕より東に當り、龍田山は西に當り、東西に有て秋の方角ゆゑ名附けたり』とある。龍田は法隆寺の邊にあつて今も紅葉の名所である、龍田姫の外に龍田彥と云ふ神も同所に祀られてあつて萬葉集に『我ゆかば七日は過ぎじ龍田彥ゆめこの花を風にちらすな』と云ふ歌がある龍田彥は級長津彥命、龍田姫は級長戸邊命であると云ふ說で、祝祠にも二つの神の名がある。



全躰我國には佐保姫、龍田姫の如く、人格化された神樣が少い、西洋にはアポロとか、ディヤナとか、キユピットとか、神話中の神樣が皆詩歌の上には人格化されて居る。又日本の歌人も、佐保姫、龍田姫のやうな自然を司る美くしい女神を歌ふに、大いに力が足りなかつた、只ぼんやりと詠じ去りて、造化の工を讃美するとか、大自然の神秘を闡かうとかする意がなかつた。紅葉の錦、神のまに〱ぐらゐが先づ上手に神樣を見付けた方であらうが、それても未だ人間の慾望が主になつて居る。自然は何うしても神の手に造られたものであるが、釋迦や基督は宗敎と云ふ一の座にある神で、造化とは違ふ、造化は更に詩的の神樣として文藝乃至美術の上に表現れる約束を持つて居るので、秋の龍田姫などは其一人であらう。

西鶴の文

近松、西鶴と並べ稱せらるゝ程の吾國の文豪、井原西鶴の文は、一寸初心の者には分り難い、紅葉、露伴の初期の作を讀むと、西鶴の筆の跡が髣髴として忍ばれる、殊に露伴の風流佛などは能く西鶴の筆致に肖て居る。偖て西鶴の文章を吟味するに、文法の破格、聯想の突飛な點が多くて、再三再四讀返して初めて深い味ひの湧いてくる裃振てあるが、戀愛に關するものは暫く措いて、商人の內幕、換言すれば元祿時代の大阪の町人氣質を描したものにも、實に善く穿たれた點がある、左に抄出する一文も其例て、是は「織留」と題する六巻もの丶一部てある。

大海の底には尾閭といふ穴あり、諸川の水日々夜々、に入れども彼の穴の中にて失するが故に増す事更になし。人間に一つの口あり、此尾閭の如し、一生の中、朝夕食物限りもなし。(記者曰、大海の喩を持て來て、人間の衣食の限りない事を云ひ、下の生活の困難なる狀態を述べる序としたもの、西鶴にしては書出しの堂々たる文章てある)身過は八百八品、それ〳〵に備はりし家職に油斷する事なかれ(記者曰、身過は生活と云ふに同じ)今時は正直を以て其身の骨を碎けば天理に叶ひ、それ〳〵の渡世いたさぬと云ふ事なし(記者曰、此處のいたさぬはせぬと云ふに同じ)總じて諸國の城下、又は入船の港などは人の足手かげにて種々生業の種もあるぞかし(記者曰、城下とか港とかは今の市てあらう、足手かげは足や手を働かせてと云ふ事てあらう)されば山城の伏見の里は七八十年も見及びしに、通り筋の脇々は、昔繁昌の時の町並殘りて、次第々々に物の淋しくなりて、何商賣すると知れず、年月を送るもの其數知れず(記者曰、序論に次て事實を述べた、山城の伏見は豐太閤時代に全盛を極めたが、德川も中頃になつて其繁昌が稍衰へて來た、物の淋しくなりと云ふ其物のと云ふ二字に能く全躰が想像される、西鶴は決して無意味の字を使はなかつた、脇々は兩側に同じ事、多年の墮勢で舊樣を存して行く町の狀態、觀るが如し)是を思ふに千軒あれば共過ぞかし、近年は人の心賢うなつて、大概の働きにては中々身過になり難し(記者曰、千軒あれば共過とは千戸の市では何うなり斯うなり市の態面を保つだけの事はして行くと云ふ意、伏見の事てある、近年以下は更に一

轉して西鶴が見たる實例を述べるので伏見の事ではない）過し年の師走に竈の上塗を仕に廻るを手廻しの善き事と思ひしに、又今年の暮には達者なる男が釜磨きに歩きける、大釜五文、其外は大小によらず二文づゝなり（記者曰、竈の塗替は今の東京でも來るが、釜磨きは來ない、成程身過の爲の新發明である、第一例）又餅米洗（人賃一斗二文にて埒の明く事手前に人を持たぬ者は勝手よし（記者曰、歳の暮の事でもあらう、餅を搗く米を内で洗ふのに、人手の少い處があらうと洗ふて廻る職業である、一斗を二文で洗ふと云ふのだから隨分安い、第二例）また表具屋の隙なる細工人と見えて、定木、竹箆、刷毛、糊までを持ちて、お座敷の腰貼一間を一文、明り障子一枚二文、何行燈にても一文にて掃除までいたしける（記者曰、表具屋とは今の建物師、大坂邊にては爾云ふ、商賣道具を持歩いて職業を聞いて歩いたのであらう。腰貼は座敷の壁の裾へ紙を貼る事、何行燈は何んな行燈でもと云ふ意、掃除までいたしけると文に勢ひを添へた點を見よ、第三例）年德棚を買ひければ、鈎木、釘まで持ちきたりて、恵方を檢め、釣りて歸りぬ（記者曰、年德棚も歳の暮に新しく買ふもので、買つた丈て向ふから來て能く釣つてくれた事を云ふ、第四例）何にても自由なる世時と成りける、是等は世帯の事にて中より下の人の爲にも成りぬ（記者曰、以上第四の例を擧げて、人々渡世の工夫する事を述べ、是等は中等社會以下の人の爲にもなる事だと云ひ、更に一轉して中等以上の社會を對手とする新身過法を述べ來る）又五十ばかりの男、風呂敷を肩に掛けて、猫の蚤を取りましよと聲立てゝ廻りける、隱居方の手白三毛をかはゆがらるゝ人、取れとて頼まれけるに、一疋三文づゝに極め、名譽に取りける（記者曰、手白三毛とは三毛猫の手の白いのを云ふのであらう、扨て何んな方法て取るか）先づ猫に湯をかけて洗ひ、濡れ身を其まゝ狼の皮に包みて、暫し抱きけるうちに、蚤ども濡れたる所をうたてがり、皆狼の皮に移りけるを、大道へ振ひ捨てける（記者曰、成程是は奇想天外より落來る新發明で、西鶴ならざる人も感心するであらう、狼の皮とは剝製の獸皮であらう、此第五例の最も奇拔なるを擧げたさに、四個の例を豫め前に置いた手腕、文章家としても凡てない）是程の事にも、そも〳〵何としてか分別仕出し、身過の種とは成り

ぬ、今程諸人賢く、物言はずして合點する世の中に〔記者曰、物言はずして合點する世の中とは實に奇警な觀察で、若し西鶴をして現代にあらしめば、愈よ己が言を確むるてあらう。扨て此文猶ほ續きありて、不思議の職業を描して居るが、餘り長くなるから此邊に止めて置く、以て西鶴の文の妙所を味はれたい〕

近松の文

近松門左衛門の文章は、西鶴に比べると文藻豐富で和漢の故事や名文を盛んに引用し、謠曲、俗謠、漢詩和歌、俳句何でも彼でも近松の筆に入る、近松の世話ものは流石に觀察の千古に卓絶して居る所はあるが、時代物になると奇怪、荒唐、誇張の筋が多く、文章の花やかな事も無類である。世話物の中でも最も重んぜられる『曾根崎心中』の一節に、能く人口に膾炙した一節がある、知つて居る方が多からうとは思ふが、未だ讀まない人の爲に其一節を茲に引く。

此世の名殘、世も名殘、死にゝ行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ。あれかぞふれば曉の、七つの時が六つなりて、殘る一つが今生の、鐘の響の聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も空もなごりと見上れば、雲、心なき水の音、北斗は冴えて影うつる、星の妹背の天の河、梅田の橋を鵲の、橋と契りていつまでも、われとそなたは夫婦星必ずさうとすがり寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩もまさるべし。

各時代の代表者

文學を修養するのに如何なる書物を讀めば可いかと云ふ時、第一に其時代を逐ふて系統的に優れた作を見るのは、一つの方法である、最も一時代の文學でも詳しく調べる日になると、恐らく一代の事業であるか知れぬ、一わたり有名な作物を讀んて行くだけても容易な事業てはない。そこて其數知れぬ作物のある中て、兎に角一時代を代表するに足るべき作は何かと云ふに先づ奈良朝時代では『古事記』てあらう、優美、壯嚴素朴等の趣味を兼備へ、文章としても立派なものである、只古雅の文字は初學の方に一寸分り難いかも知れないけれど、講義類に依りて少し讀み初めると、後は追々了解てきるやうになる。次に平安朝時代では源

語」、清少納言の『枕の草紙』を擧げや
先祖として『源氏』の文章上の價値は
説として見るも
[illegible]の今日でも
[illegible]大部

鎌倉時代では『平家物語』と『源平盛衰記』である、此時代の文章は純粋の假名文を離れて、漢語や佛語も加はり、近世的になつた、盛衰記と平家と比べると、平家の方が好いやうに思はれる。次の室町時代は文學の暗黑時代であらうけれど、なほ『謠曲』と云ふ別種の文藝が創始され、文章としては『徒然草』などもある。扨て最も近い德川時代は文運興隆して盛んに傑作が出



た、元祿には近松あり、西鶴あり、文化文政には馬琴あり、京傳あり、三馬あり、一九あり其他數知らずあるが近松の世話物、西鶴の『五人女』、馬琴の『八犬傳』、三馬の『浮世風呂』など能く代表して居るてあらう、此時代の文學は讀むに然う深い手引は入らないのであるから、先づ歷史的に研究するにしても、德川時代から着手するが、便宜であらう。

胡蝶の墓

近頃の青年の作に胡蝶の墓とか、胡蝶を葬むるとか言ふ事が多い、此胡蝶の墓と云ふ事を始めて詩に歌つたのは河井醉茗で、今より五六年前であらう、知つて居る人もあらうが、左に其全篇を拔く

胡蝶よ覺むること勿れ
われらがつきし奧城に
春は花咲く朝まで

郵便はかき



CARTE POSTALE

女子文壇附錄繪葉書

再び覺むること勿れ

いつきしは築きし、奥城は墓、春はのはの、それて秋の蝶であるから、花咲く春まて此墓に眠つて居よと云ふ意。

萩は實になる秋のはて
秋海棠の花は折れて
冷たき露も深かるに
うべ、弱き羽の萎れけむ

うべは「成程」、晩秋の頃、草花もすがれ、蝶の羽も露に萎れた。

黄き芭蕉の葉の面すら

せて
きぬれど
くづさずに
秋の日や

無く裂けて了ふ
落ちて居る、誰か奥

手の上に載せて、息を吹いても眠れる蝶は再び覺めぬ、翼いためずとあつたから、姿くづさず其まゝに埋めて置く、「秋の日」は全躰にかゝる。

寒きに覺むること勿れ
美くしき者は脆かるに
觸れそ冷たき風の音
土をかづきて靜かなれ

美くしき者は凡て脆いと此處に作者の理想を述べ、覺めると冷たい風が吹いて居るから土をかづいて靜かに眠つて居れと云ふ。

花を分たる移り香は
とはに彼女の抱けるを
暗き林に吹きさわぐ
嵐は何を埋むらん

冬の枯林を吹き通す寒い嵐は何を埋めて居るか知らぬが、奥城に眠つて居る胡蝶は、彼が花より花を分けた移り香の、夢暖かに眠つて居るてあらうと。彼女は胡蝶を指す、此詩全體に透明であるから、能く分るてあらう。

諺と地方的特色

…々地方的特色を論じ、地方的特色の…げたるが、一二の例を拾ふと「東雷、…言ひ、一種の天氣模樣を言ひ表は…」方々て大抵はあるらしい、…は千葉の人種と天象を…水利の乏しい大和…「因州へ行て…上手な人…ぬ、

…色れ」は三市の華奢を痛罵したもの。

金婚式、銀婚式

皇室に於ても銀婚式の大慶典を擧げさせられてより金婚式、銀婚式の名は何人も知るやうになつた、併し西洋では結婚後一年目から既に何々婚式と云ふのがあつて、必ずしも二十五年目の銀婚式を初めとしない、今其名を擧げて將來の花婿花嫁諸君の參考に供する事としやう。

第一年　綿婚式―第五年　木婚式
第三年　皮革婚式―第十年　錫婚式
第十二年　絹麻婚式―第三十年　眞珠婚式
第十五年　水晶婚式―第四十年　紅玉婚式
第二十年　磁婚式―第五十年　金婚式
第廿五年　銀婚式―第六十年　金剛石婚式

名所圖繪

昔は地理と云ふ學問もなかつたから、種々の書物に地理學上の記事を散見するが、諸國の風土記の如き、恐らく地誌らしいもの丶出來た創始であらう。風土記とは國名や地名の由來、神佛に關する傳說、山水の名所等を斷片的に書いたもので、文章は漢文である。今日から見れば殆んど疎雜で、書籍の體裁も爲して居らぬが、其代り古い地名や土地の變遷を知るには唯一の考證で、學者が之を珍重するも所以なき事ではない。德川時代になつて文運盛んに起り、交通の繁くなる處から其利便上、案内記やうのものも澤山に出來、文士歌人が名所探檢の資料として紀行文も重んぜられるやうになり、殊に東海道筋の如きは最も詳しく紹介せられた、其多くの地理的出版物の中で、最も完全し、又最も趣味あるものは各國の「名所圖繪」であらう、畿内五個國の外に猶ほ數個國の分が出來て居て、全國完

備はして居ないが、出來た分だけを見ても篤志の著書であつた事が知れる、一國の分は少くも四五冊、多くは十數冊の上にのぼり、『東海道名所圖繪』あり『木曾名所圖繪』あり或は紀伊、或は播磨、或は花洛と能く調べたもので、本文は雅馴な文章で書かれ、所在の闘べも机上で作つたものと違ひ、多く實地を問ひ糺して存外正確で信ずるに足る、引證の和歌、文章なども多く、神佛の舊跡は殊に巨細に紹介して居る。猶此名所圖繪の特色は、題の示す如く繪畫の多い事で、繪に文句を添へたと云ふ方がいゝ位で、一二枚毎に繪が挿こであり、其繪も亦甚だ古雅掬すべき韻致を具へてゐ

姿は能
攝津、河内、
る處『江戸名所
る、又世に其書は之
名所圖繪』であらう。

女性觀

於て女子の起源に關する印度の神話

を紹介した、クリスト教に説いた女性、又は希臘の哲學に見えた女性、何れも女子に取りては難有い消息ではなかつた。西洋の中世紀になると其等の説が變化し發達したが猶女性に就いては、男子より劣等なものとして居る。テルツリアン曰く『女子よ、汝は常に喪服を着け、襤褸を纏ひ、涙を浮べて歩くべき筈である、汝は人類を墮落させた』と。又アウグスチヌスは『女子は敎へる事も出來ぬし、證人となる事も出來ぬし、命令することは猶更出來ぬ』と言ひ、猶ほ甚しいのは紀元五百八十五年にマコンと云ふ所で、僧正の會議があつた時、『女子は人間なりや否や、女子は精神を有せりや否や』と云ふ問題が眞面目に討論された、女性の侮蔑も茲に到りて極まれりである。ロシアの諺に『女子はガラスから出來るとしても、それは不透明なガラスであらう』と云ひ、暗に女子の智慧の鈍い事を指し『女は髮長く思慮短し』と云ふ諺も行はれた。彼の有名な『脆きものよ、汝の名は女なり』と云ふ句は、セーキスピヤの『ハムレット』中にあるので、絶代の文士も女性の弱い事は認めて居た。

（坪内逍遙）

文壇（倍大水彩畫繪葉書 寫眞口繪 毎號挿入）毎月一日發行

壹冊 前金拾錢

半年分 郵税共 前金七拾六錢

一年分 郵税共 前金壹圓[illegible]錢

外國 [illegible] 前金壹圓四拾四錢

郵税無料

定期増刊 二月十五日 五月十五日 八月十五日 十一月十五日 發行

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法

半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で與れます（郵券代用は一割増）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇最廉無比 定價金拾錢 郵税壹錢 申受けず

(東京秀英舍印刷)